
ヘタレストの一週間

KT@ヘタレの人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヘタレストの一週間

【Nコード】

N0096N

【作者名】

KT@ヘタレの人

【あらすじ】

彼―俊也は自他共に認めるヘタレである。不良に絡まれば財布ごと渡して穩便にお帰り頂くし、限定販売品を譲ってもらったために女の子に土下座したことだっている。

顔は自分でも悪くないとは思う（それが不良に絡まれる一因にもなっているのだが）のだが、校内に知れ渡ったヘタレ伝説のせいで彼女もいない。

だが、ある出会いから、彼は激動の一週間に巻き込まれていく。

「き、貴様何故生きている!？」

ヘタレストの、自称巻き込まれ、実際台風の間となった事件の
週間が始まる…。

完結しました。ご声援、ありがとうございました！

一日目（月）　　～開幕～

彼―俊也は自他共に認めるヘタレである。不良に絡まれれば財布ごと渡して穩便にお帰り頂くし、限定販売品を譲ってもらうために女の子に土下座したことだってある。

顔は自分でも悪くないと思う―（それが不良に絡まれる一因にもなっているのだが）のだが、校内に知れ渡ったヘタレ伝説のせいで彼女もいない。

とまあ彼はそんな個性―（？）が有りはするものの、概ね普通の人間だと考えている。運動神経もそこそこ、頭もそこそこ。特に人に憎まれる事もなく―（不良に絡まれるのはスルーだ）、平凡に―（女の子に土下座するのもスルーだ）、平和に生きてきた。

当然、殺されそうになったり、殺しそうになったり、なんていう漫画の主人公みたいなことには無縁だし、願い下げである。

――そんな彼だが、
まさか、

初対面の相手に、
こんなことをいわれるとは、
さすがに想像していなかった。

「き、貴様何故生きている!？」

――俺はヘタレだ。

そこに否定の余地はない。する気もない。だが、取り立てて社会

のゴミというわけではない。と、思う。…と、信じている。宿題は5回に4回はちゃんと出すし、道端にゴミを投げ捨てたりだっていない。

そんな、平和で慎まやかな日々を過ごす俺が、

「き、貴様何故生きている!？」

こんなセリフを言われにやらんのだクソ。

——まあ、落ち着いて遡ってみようか。

俺は放課後、さつさと家に帰る夕チだ。町をぶらぶらしたり、放課後の学校に残る、なんて真似はしない。そりゃ俺だって放課後の教室で女の子とフラグ立てたりするのに憧れないわけじゃない。だが、俺はヘタレ。最優先すべきは、わが身の安全だ。

いつどこで不良に絡まれるかわからんのだし、そうなれば問答無用で財布が空っぽだ。抵抗？なんでそんな危ない真似を。このランダムイベントを回避するには、エンカウントの少ない道―（調査済み）を通り、さつさと安全地帯―（＝家）に逃げ込むのが一番だ。

今日もいつもと同じ人気―（含不良）のない道をとぼとぼ帰っていた。まあ補習のせいでいつもより遅い以外何も変哲はない、はずだった。

——行く先で、殺人未遂現場に出会わなければ。

そう、それは殺人未遂現場。

一人の女子高生―（ウチの高校だ）が尻もちをついて倒れており、それに歩み寄る一人の男。

――その手に光る、長い、銀色。

それを見た瞬間、
俺は、

――悲鳴を上げて尻もちをついた。

フツ、笑ってくれ。

音にすれば「ひでぶ！」と「あべし！」を足してさらに2倍した
感じの悲鳴だったと思う。

人生でベストスリーに入る悲鳴だった。そんなに数えるほど悲鳴
あげてんのか、というツツコミは無しだぜ。俺を誰だと思ってるん
だい？

その声は、時間を止めた。

DI。もびつくりの効果だぜ。

殺人鬼―（仮名）もびつくりの音量だったようだぜ。

ポカンと口をあける尻もち女―（やっぱり仮名）。同じく呆けた
顔で顔でこっちを見る殺人鬼。茫然としたまま尻もちについて、金
魚みたいに口をパクパクする俺。ちなみに声もちょっと出てたかも
しない。あばばとか。

どのくらい時間が止まっただろうか？てか、あのス。ンド何秒く
らい止められるんだっけ？

まず動き出したのは、殺人鬼。

気を取り直したように顔をニヤけツラに戻し、ナイフを舐め回しながら歩き出す。

——俺に向けて。

つていやいやいやいや！

普通男の子は女の子の方に興味持つでしょ！

さっきまで襲ってた子ほったらかしちゃだめでしょ！

あんたも男でしょ！

あ、あ、アツー！じゃないよマジで！

とかなんとか完全にテンパツたまま、体は動かない。いや、一部分だけは動いた。

「いや、僕あんまりお金持っていないですよ財布ほしいならあげますから確認してみてくださいマジで別に全部取られたって警察とか呼びませんしホラ体だってもしあなたがホの字の人でも満足させたりできないですしあっちにかわいい女の子だっていますし！？」

伊達にヘタレやってない俺。この間3秒かかってなかったんじゃないか？慣れって怖いなほんと。あれ、なんだか泣けてきたんだが…。

「ひ、ヒヒ…おまえ…いいなあ。あの女は脅しても切っても反応薄イんだア…。つまんねエ…」

あ、あれ、俺、なんかまずいことした？

「おまエ…いい悲鳴あげそうだなア…」

あ、分かります？さっきの悲鳴そんなに気にいったんですか？つてかそんなの言ってる場合じゃない！

「いえいえ僕ヘタレですから痛いとすぐ気絶しちゃいますしさっきのは偶然のまぐれというかやっぱこれ以降はご期待には添えられないというか……！」

俺、必死。泣いてるのは命の危険が怖いからだよ。それだけだよ。

「ヒヒ……今ので十分だあ……おれはおめエみたいな命乞いが聞きたくてこの仕事してんだア……」

俺、必死。必ず死ぬ的な意味で。

ゆっくりと迫ってくるナイフ。涙と汗でぬれた頬がちよっと切られる。俺、「ヒウッ!」。ああ、悲鳴あげたら長生きできるかな……。でも、男にマウントポジション取られんのかって、すげえ気持ちわるいな……。

ちよっと切られては悲鳴をあげる、をどれくらい繰り返したか。まあ実際2、3分だろうが、ヘタレとしてはもうお腹いっぱいです。これだけの間いい悲鳴――（？）をあげ続けられた自分に乾杯。あと人生にも。

とうとうクライマックスか、殺人鬼がナイフをこれまでと違って大きく振りかぶる。うむ、いいフォーム。それを見届けて目を閉じる。

とかいってるのはもうヘタレらしく諦めたからかな。

ああ、できれば脱ヘタレで死にたかった……。……。

……。

……。

……。

「ぐあッ！！！」

あ、あれ？なんだ？生きてる？

ちなみにさっきの悲鳴は俺じゃない。俺ならもっとエレガントで個性的な…じゃねえ！

「な、なんだあ！？」

うん、モブキャラ的セリフ。脇役体質だし、俺。

あわてて目をあけると、そこには、一人の女。

ショートカットだが、一房だけ長い黒髪が後ろで束ねてある。背筋の伸びたスマートな体。

振り返ってこちらをみた美しく整った顔。

その形のいい口が開き、

「き、貴様何故生きている！？」

え、ええー！

「い、生きててごめんなさい！？」

え、ええー…。

どこまでいってもヘタレな俺だった。

彼はこうして、ヘタレなりに、とある事件に巻き込まれた。この一週間、彼はヘタレなりに、命をかけることになる。ちなみに現段階では巻き込まれた様にしか見えないが、少々先まで話せば、所謂主人公の位置である。

ヘタレストの一週間が、こうして始まった。

一日目（月）　　～開幕～（後書き）

初投稿。 やっちまったかもしれない……。感想とかなんとかあればいろいろお願いします。拙いところも多い素人ですが、よろしく願います。

一日目（月）　　邂逅

—— 静寂。

といえちよつとはかつこいいかもしれない。まあ実際は誰もが一度は味わう、所謂「何とも言えない気不味い空気」というやつだ。

「……………」

相手、沈黙。当然俺も沈黙。あの、やりたくない学校の仕事の責任者を決めるときのあの空気（を、何百倍かに圧縮したの）のなか、発現する勇氣は、このヘタレには無い。もちろん。

「……………」

「……………」

え？何？これ俺が口開く感じのフィンキ（なぜか（ry？いやいやいやいや無理無理無理無理！初対面の美女に話題振るなんて無理！だ、だれか、助けて、助けてどら。モン！？

「クツ…チクシヨオ…！人の楽しみをお……………！」

沈黙を破ったのは、地を這うような低くぐもった、迫力のある声に、あわててその方向を向く。

…助けてくれたのは某ネコ型ロボットではなく、殺人鬼だった。うん、助けてって言うつといてなんだけど、これはやっぱりうれしくないね。ごめんなさい。

「……………次は殺すからなァ…女ァ……………」

そういつて立ち上がつて（結構派手に吹つ飛んでた）、身を翻して走り去る殺人鬼。おお、結構、てか超足はええ。あつという間に見えなくなつちまつた。元陸上部とかかな？

⋮

⋮

って、え？まだこの沈黙？殺人鬼（が消えた方）から視線を戻すと、微塵も変わらずこちらを見つめる顔。殺人鬼に今お約束のケンカ売られてたのあなたですよね美人さん（しつこいけど仮名）！？ガン無視して良かったんですか！？経験的にいうとあれ無視しちゃまずい感じでしたよ！？

○

「あ、あのぉ。」

俺、負けた。何に負けたのかは分らんが。ともかく沈黙を破つて声をかけてみる。見た目はどっからどう見ても年上美人だ。呆け顔していることを差し引いても。

「さっきは、その、ありがとうございました…。」

⌋
⋮
⌋

「で、あの、その……。」

「……あ、ああ、あああ済まない。少し呆けていた。」

良かった、ちゃんと生きてた。反応してくれた。何で殺されかけた俺が殺人鬼やつつけてくれた人心配してんだろう？ とか何とか考えていると、

「私の名前は、柊 蓮（ひいらぎ れん）。わけあってこのよ
うな人助けのバイトをしている。ちょっと予定外の事が起きて、驚
いてしまった。あの殺人鬼については、問題ない。今夜はこれ以上
は何もないはずだ。とりあえずちょっと待ってくれ、その女を起
こしてやらないといけない。」

……？

なんかいろいろよくわからんが、とりあえず尻もち女を起こすら
しい、座り込んだまま固まっている彼女へと歩いていく。俺？腰が
抜けてて立てないんだ、ハハハ。

「――？」

「――。」

「――。――？」

「――？――。」

なんか話してるっぽいけど、ちょっと遠くて聞こえん。てか、意識
して小声にしてないかアレ？なんか馬鹿にされてんの？「ちょっと
カッコ悪くね？あいつ」的な。まあいいけど。ヘタレなめんなよ、
ハハハ。

とか何とか考えていたら、美人さんがこっちに歩いてきた。ああ、
柊さん、だっけ？尻もち女はそのまま後ろ姿に頭をさげ、帰ってい
く……。いいのか、一人で帰らせて。俺は送らないけど。

「……さて。」

「……は、はい。」

「君は、木林 俊也（きはやし としや）か？」

「……は、はい。」

「間違いない、生きているな？」

「……は、はい。」

なんだ、この会話。と思った瞬間手を取られた。いや、そんな色っぽいものじゃなくて、手を握りつぶさんばかりの握力で締め付けられた。そのままずると引きずられていく……てかこれ速くないか！？走ってるの！？体浮くんじゃねこれ！！？人間の力じゃないだろオイ！！！？え、えーーーー！！！！

柊は、走っていた。

後ろから聞こえる悲鳴は、彼女の耳には届かない。

——急がなければ、この幸運が逃げてしまいかもしれない。

実際にはそんなことは無いだろう。勝手な思い込みだ。そんなことも分からないほど、柊蓮は子供でも、愚かでもない。だが、それを分かっていてなお、彼女は走るのをやめない。

——幸運どころではない。これは…奇跡だ。

その理由も、彼女は理解している。まだ彼女が子供で、愚かだった頃の記憶。その頃の自分が、急かしているのだ。『彼ら』と出会う前の、地獄の世界。全てが自分の敵だった世界。あの恐怖が、走らせているのだ。『彼ら』に貰った、この夢のような世界。

そして、

あと一週間で。

——終わる世界。

この男は、

さつきからヘタレた事しか考えてないこの男は、

——この世界を、救えるかもしれない。

最後の希望を胸に、彼女は走り続けた。目的地はもう見えている。
『楸探偵事務所』。知らなければ見落としそうな小さな看板しかない、質素な一軒家。

「師父ッ！いるかッ！！！」

飾り気のないドアを引き千切らんばかりの力で抉じ開け、建物中に響き渡らんばかりの大声を張り上げる。普段の彼女からは想像もできないその動作。

「うおっ、レン、どうしたよ！？キャラ違くなー！？」

廊下を歩いていた少年が素っ頓狂な悲鳴を上げる。タンクトップのよく似合う、独特な髪の色をした少年——榎田 涼（えのきだ りょう）が、驚きのお手本のような顔を浮かべる。

「地下かッ！」

「そうだよ、今は多分ヒマにパソコンしてるんじゃない」

「おまえも来いッ！」

「う、うええ！？てか、おたく誰？」

「あ、あばば」

「話は後だッ！」

空いていたもう片方の手で涼の襟首を捕え、そのまま引き摺って

廊下を駆抜ける。そのまま二人引き摺っているとは思えない速度で階段を駆下りる。

「師父ッ！」

「おやおや？ 柊さん。どうかされましたか？」

地下室のドアを蹴り空ける。ベギョッ、という断末魔の悲鳴を上げてドアがはじけ飛ぶ。飛んできたドアを一台のコンピュータがなすすべもなく受け止め、ガギャッ、という嫌な音を立てる。が、柊はドアやコンピュータに配慮する余裕はない。代わりに地下室（ただけ言うにはやや広く、機械類が散らばっている）の中にいた青年が一瞬だけ顔をしかめ、立ち上がる。

「師父ッ、こいつ」

「ちよつと待ってください。榎田くんも一緒、ということ全員居た方がいいんでしょう。パルカちゃんを起こしてきますよ」

はじけ飛んだドアを心配げに見たあと、柊の方を見て青年が告げる。その顔には、感情が全く読めない面の様な笑顔。立ち上がり、柊のわきを通り地下を出る青年の顔を見つめ、柊は、やっと落ち着きを取り戻し、

吹き飛んだドアの残骸と、

巻き込まれた一台のコンピュータと、

両手にぶら下がる半死体に気がついた。

「……すまない。」

いや、すまないでは済まないでしょ人をいきなり拉致って気絶させておいて！と思っではいるものの口を出てのは、

「いえいえいえ、大したことないですハイ！」

…ヘタレにはこんなことしか言えないんだよ。笑ってくれ。俺も笑うからさ…。

まあ、それは置いて、いったい何なんだ？ 5W1Hひとつもわかんねーんだが、何がどうなってるんだ？ 今いるのは一戸建ての家のロビー、って事以外なんも分かんねえぞ。いや、見回したら時計があつた。晩飯食いつぶくれた時間だと分かったただだった。気づかなくてもよかったね。

「ところで、あの…」

「師父、木林俊也だ。生きている。」

うん、遮られるよね。お約束だね。そんな気はしてたんだ。でも、こっちは誘拐された感じなんだし、説明があつてもバチは当たらないと思うんだ。ってか、俺の紹介の後についた、『生きている』って何だそれ、責められてるのか？ ついでに言えば俺、名乗ったっけ？

「今回の『救助者』に聞いたら、ヘタレストと言っていた。今回の『被害者』、木林俊也のあだ名だったはずだ。」

「なるほど、事情は分かりました。順に説明しましょう。」

うん、『救助者』とか『被害者』とかよく分かんない言葉は置いておこう。突っ込みはひとつだ、ヘタレストっていうな。ヘタレは許してもそれは嫌だ。

「さて、まずは自己紹介からまいりましょう、木林くん。私の名前は、楸 シン（ひさぎ しん）と言います。この楸探偵事務所の所長をしています。」

「は、はあ…。」

「その少年は、榎田 涼くん。ああみえても大学生ですよ。このバイトをしてもらっています。後ろの背の高い女性が、柊 蓮さん。もう聞きましたかね？バイトではないのですが、よく仕事を手伝ってくれるいい人ですよ。で、私の後ろにいるのが、妹の パルカ と言います。この家は私が事務所兼、自宅として利用しているのです。」

「は、はあ…。」

なんかすらすら説明されたが。とりあえずまあ、笑顔の眼鏡イケメンにすげえ髪の色したシヨタ（見た目中学生）の美少年、美女に美少女。なんとまあ需要のありそうな事務所だなオイ。タレント事務所って言われても納得するぞ。

「…さて、本題に入りましょう。あなたが知りたいのはこんなことより、『我々が何者か』で、『自分は何故連れてこられたか』でしょう。」

「は、はあ…。」

なんか笑い眼鏡（俺内で決定）の主導で気に食わないが、言ってる通りなので頷く。ってかさつきからこれしか喋ってない気がするんだが。

「まず、一つ目です。私は探偵事務所をしていますが、これは便宜上です。実際に我々がしているのは、『未来をより良くする為の運命の選択』です。」

…はい？なんかすごいかわいいい笑顔ですごく電波なこと言いきったよこの人。あわてて周りを見るが、にこやかに頷く美少年と無表情な美女、美幼女。…みんなグルかそうか分かった。てかあれだけ興奮しまくって今さら冷静ぶってんな怪力女が。

「きみは、『運命』というものをどのようなものと考えていますか？」

「いや、運命ならば仕方ない、ってくらいしか…」

「…それは…、そうですね。そうです。様々な説があると思いますが、我々の言う『運命』は、一方通行の道のようなもの、と考えると分かりやすいですね。地点によって決まった事件が起こり、『世界』という車が走り続けることで連続した出来事が我々の『日々』を作り出す。」

「…は、はあ。」

なんか宗教勧誘みたいになってきたんだが。笑い眼鏡の笑顔がどうしようもなく胡散臭いんだが。壺買わされんのかな俺。今月小遣い少ないんだが。いや、金ならまだしも洗脳とかされないだろうな。

「重要なのはこの『運命』が一本道では無い、という点です。つまり、ある地点において道が分岐、起こる出来事に変化が生じるわけです。この分岐は数はそこそ多いのですが、それによる影響は分岐によって異なります。」

「なんか…難しいんすね……………」

「そうですね。我々は、この『運命の分岐点』において、人助けをしている、ということですね。例えば、『運命の分岐点』においてAという道とBという道がある。Aという道では一人の人が死ぬが、Bの道では誰も死なない。」

「ならBの道がいいじゃないですか。」

「ええ、そうですね。まあ一概にそうとは言えないのですが、概

ねその通りです。ここまで言えばもう我々の仕事は分かりますね。
この『運命の分岐点』において、より良い道…ここではBですね…
を選ぶ事です。」

すごく…よく分からないです…。ハハハ、いやなんとなくなら
掴めたよ多分。…多分（重要なので2回言いました）。

「それで、殺される運命だった俺を助けた、ってことですよね？」
「それについてはやや複雑ですが…。分かりました、説明します
ね。それが二つ目、『自分は何故連れてこられた』の答えとなるで
しょうしね。」

いや、複雑なら遠慮します帰らせてください、って言えない空気。
なんか眼鏡の奥が輝き放ってる感じだし。笑顔怖いし。あと、そこ
の怪力女、視線に期待と凄み混ぜんな。こええよ。

「今回の『分岐点』、道は二つでした。一つは、女の子を助ける
為に飛び出した人が、刃物を持った男と戦い殺される、という道。
もう一つは、その人が女の子を見捨てて逃げ出し、刃物を持った男
に追いかけられ殺される、という道です。前者ではその後さらに『
分岐点』が生じ、女の子の生死が分かれ、後者は『分岐点』なく生
き延びました。」

……………アー…ハアン？どゆこと？

「つまり、柊さんは女の子を助けに向かったのです。そこでは男
の人が立ち向かって殺された後に、柊さんが助けに入ることです。女
の子を助ける、という運命が『見ら』れていましたから。」

……………なんか、嫌な予感。ざわ…ざわ…とかいつてる場合じゃない

気がする……。

「つまり、あなたは殺されることが前提。冷たい言い方かもしれませんが、我々はあなたを助けに行つたのではなく、女の子を助けに行つたのです。柊さんの驚きはそのせいですね。」

えーっと……。

「私が到着したとき、こいつはまだ生きていた。死が避けられないほどの傷もない。悲鳴を上げ続けることで殺人鬼から殺されるのを防いでいた。」

「つぶ！ようするにあんた、『運命を捻じ曲げる』ほどのヘタレってわけだ！さっすが、伊達にヘタレストじゃねえな！！はっはっは！」

「……笑うために連れてきたなら帰っていいですか？もう気が済んだでしょ。妹も心配しますし。」

「だめです。」

用事は済んだ、と思い、立ち上がるうとした俺に思わぬ追撃。内心「ええー」って思いながら（顔に出さないのがヘタレクオリティだ）振り返ると、さっきまでの笑顔が、驚くほど真剣な顔。その真顔には、威圧感、というのが相応しい圧倒的な存在感。メガネの にらみつける こうげき ！ ヘタレ に こうかはばつぐんだ！

「あ、あの……」

「一週間ここでバイトをしていただきます。いいですね？」

「…ハイ。」

ここで逆らえる人がいるんだろうか、と思うほどの威圧感に、俺、

3秒で敗退。よく分かんないけど分かったとしてもう頷かざるを得ない迫力だったしまあいいか。

「今日はもう遅いですね。二人暮らししている妹さんも心配するでしょうし、一旦帰って、明日の放課後また来てください。」

「…えー、二人暮らし、って知ってるってことは……」

「来なければそういうことです。」

ここで笑顔に戻す必要は全く無いんじゃないかなあ。いや、ほんとに……。どうしようかなマジで。つつつても俺に逃げるような度胸は無い。ヘタレっていうな。

「…待っている。」

「おう、また来いよな〜！」

にこやかに怪力女とシヨタ野郎に逃げ道を塞がれた俺には、まあ要するに翼のもげた鳥、まな板の上の鯉だった。あきらめて叫ぶ。そう、女は度胸、というように、ヘタレは妥協、というのが俺の自説だ。

「わかりましたよっ！来ればいいんでしょ来れば……！」

そう言って今度こそ立ち上がる俺。そのまま歩き出…そうとしたところで、制服の裾を引っ張られた。

「だから明日またk」

「かえつたら、あたまをかばうほうがいい。あと、あしたはきをつけて。なぐられるから。」

「では、そういうことで。また明日お待ちしておりますね。」

さっきまで完全な空気だった美少女が、無表情のままずさまじく物騒なことを言い、笑い眼鏡にさっさと追い出された。

追い出されて気づいた。

ここ…どこよ？

あわてて後ろのドアノブを回…らなかった。

家に帰れたのは、それから2時間後、10時を回った頃だった。

一日目（月）　　邂逅（後書き）

多分中の人の投稿は一月くらいで終わるかと。
感想、ご意見お待ちしています。

一日目（月）　　ゝ思惑ゝ

相手が玄関から出た直後に鍵をかける、という行為は、所謂拒絶の象徴である、という説がある。もちろん俊也はそんなことは知る由もないし、全ての人が鍵をかけた相手を嫌っている、と決定する訳でも無い。

だが、今回の場合において、施錠は紛れもなく拒絶の証だった。楸探偵事務所の間人は、様々な意味合いで、普通の人間ではない。その為、彼らは『普通ではないもの』についての拒絶感は少ない。

そんな彼らでも、

拒絶せざるを得ない異質。

異質の中での、さらなる異質。

今まで信じてきたものを、崩壊させる力。

紛れもない、

『運命を捻じ曲げる力』

「さて…明日の事を考えましょうか……。」

楸シンは、一人呟く。他のメンバーは明日説明する事にして、既に帰らせている。シン自身も普通の人間ではない。使い古された表現をするならば、『異能者』。彼の力は、『選択』。選択肢の中から、最善のものを一瞬で選び取る力。たとえその選択肢が100であろうと1000であろうと、彼には関係ない。その力で、常に最善の運命を選び取ってきたのだ。

「選択肢を新たに作り出す彼は、私にとって天敵ですね…。」

拒絶は恐らくそのせいだろう、と彼は見当をつける。

「……ですが、これで…」

だが、そんなちっぽけな拒絶やプライドなど、些細なものだ。この胸の高鳴りには適わない。自分の事など如何でもいい。彼の一番大切な者。あと一週間で失われるもの。

——それを、彼なら救える。

——少なくとも、その可能性がある。

彼は無言で、横に佇む妹、パル力を…彼の一番大切な者を撫でる。無反応に撫でられる彼女を、彼は慈愛と、寂寞の混在した眼差しで見つめる。

地獄を見た少女。

それ故に、壊れてしまった少女。

一週間後に、死に逝く少女。

「パル力…。必ず、私が助けて見せます…。」

——まずは、情報を揃えなくては。

シンの能力の、『最善』の基準は、彼自身が決める。その為に、彼の中には古今東西あらゆる知識、情報が詰まっている。情報が揃えば、自分は負けないという自負が、彼にはある。

無言のパル力を寝室に連れて行き、地下室へと向かう。

青年と青年の周囲の情報、今の手持ちの『異能』、これから起こる事件の内容。頭の中で文字列が浮かび上がり、忙しく飛び回り、彼の『異能』が覚醒する。

——どの選択肢が、彼の『異能』の情報を効率良く得られるか。

一瞬で得た道筋を検討、微調整するため、パソコンを立ち上げる彼の目に宿るのは、闘志。

彼は、全力で、最善の明日を作っていた。その為、気付かなかった。

——鍵となる青年が、今日とんでもない目にあっていることに。

「ただいま〜っと。」
「にーさん！ー！！」

やっこの思いで家に帰りついた俺。そんな俺を迎えるべく、台所から飛び出してくる妹―森音（りんね）。おうおう、お兄様の帰りがそんなに待ち遠しかったか愛い奴め。ハハハ。とか考えながら玄関口で靴を脱ぐ俺に跳びかかる妹の手には……フライパン（両手持ち）。ってオイオイオイ！！しっかりと取っ手を握り、スイング準備万端の状態で間合いを詰められる！ヤバイ！！

——あたまをかばうほうがいい。

とつさに頭によぎった無機質な声を信じて、俺は両手をクロスさせて頭を庇った。

直後、すさまじい衝撃。
腹に。

「ガボふッ！！！」

わが妹であることが信じられないほど出来のいい妹は、俺が頭を庇ったと見るや、信じられないバット（フライパン？）コントロールで軌道を変え、腹部を強力に振りぬいたのだ。いい腕してるじゃねえか、俺と世界を狙わないか？

つてかオイあ的美少女（パルカ、つつたか？）、なにが頭を庇え、だ。代わりに腹殴られただけじゃねえか。

「我が家の唯一絶対の掟、分かってますよね！？」

「…帰りが遅くなるときは理由と時間をメール連絡……」

「そうです。こんな簡単なこともできないんですか！？」

「…ちよつといろいろあつて……」

「メールが来たらダメとは言わないんですから……全く……」

ぶつぶつ言いながら帰っていく我が妹。なんとか声が出せたことから考えると、一応手加減してくれたのか？こないだ不良に絡まれて遅れた（当然メールなんてできない）時は声出すどころか呼吸困難だったし。

「ま、いいです。台所来てください。」

そのまま台所に行くと、ラップに包まれた晩飯。おお、食いっぱ

ぐれて無かった！よくやった我が妹よ！妹が手際よくそれらをレンジで温めながら、どこからか救急箱を持つてくる。

「全く…今日はいつにも増して切り傷が多いですね…。ちょっとじつとしてくださいね、消毒してガーゼ当てますから…。」

「ひえいつ！」

「動かない、情けない悲鳴上げない！」

「ひゃ、ひゃあい！」

そのまま手際よく消毒されてガーゼを貼っ付けられる。顔、腕、足、腹の順で全部。おお、出血大したこと無かったから気付かなかったけど、殺人鬼意外と切りまくってたんだなオイ。まあ制服はよく破られる（誰に？愚問だね）から替えの用意は多いし、妹の裁縫の経験値は抜群だ（何故？また愚問だね）から問題は無いが。ちなみに腹が赤く腫れてるのは貴方のせいなんだが、スルーしてしまうんですね。

「まったく……我が兄ながら情けない…。」

「スンマセン……。」

「それもです。兄なんですから兄らしく堂々としていてください。妹に完全に尻に敷かれて…情けない……。」

「いや、それは殴りかかる妹にs」

「言い訳しないでください。そんなんだからヘタレストとか言われるんですよ。」

妹の説教は、電子レンジのいい声（GJ!）で打ち切りとなり、二人で晩飯となった。

ああ、言い忘れてた。うち、妹と二人暮らし。それ、なんてエロゲ？とか言わない。まあ死別とか事故とか、シリアスな理由がある

わけじゃなく、単身赴任で飛ばされた親父に母さんがついてった、
っただけだ。ただ、このことを知っているのは、多分いないんじゃないか？担任にだって三者面談とかは忙しくて来れない、しか言っ
てないし。あ、楸っていつてたあの笑い眼鏡は知ってたな、どこか
ら聞いたんだ？

「で、明日もいつも通りに起こせばいいんですか？」

「ん、頼む。」

「ですが、ガーゼを変えるので少し早く起こしますね。」

「……ハイ。」

「では、食べ終えた食器持っていきます。もう寝てていいですよ。」

「……ありがとうございます。」

そのまま寝室に強制送還。そういやあいつ一緒に飯食ってたけど、
まだ食って無かったのか。待ってくれてるとはいいやつだ。世間一
般で大人気の、ツンデレってやつだな。実の兄じゃなく同級生とか
に言えば彼氏の一人二人簡単にできるんじゃない？顔いいんだし。ふ
わふわへアーも悪くないし。

そのままベットに倒れこむ。疲れていること山の如しだが（山
が疲れているかどうかは知らない）、なんとなく眠くならない。そ
りゃそうだ。初めての事ばっかだったし。ん？いや、そんな初めて
でも無いか？ナイフで切られたことはあるし、女の子に手を掴まれ
たこともある（そういえば、手え握られたせいで片思いの不良か
らナイフ、だった）。誘拐、っつーか監禁もどきもあるし。そう考
えると意外と初めてでも無い？

—— きみは、『運命』というものをどのようなものと考えてい
ますか？

——殺人鬼から殺されるのを防いでいた。

——あんた、『運命を捻じ曲げる』ほどのヘタレってわけだ！

運命を捻じ曲げる、ねえ……。なんかよく分かんが、こればかりは間違いなく初めてだ。ほんとは行かなきゃなんのか、明日の放課後……。不良なら「家に殴りこみかけるぞオラア！」とか言っても實際来たりはない、と断言できるのだが、あの心の読めない笑顔には得体のしれなさがある。行った方がいいだろうな……。森音に迷惑はかけたくないし。いや、ヘタレの妹、ってことで既に大分迷惑かけてるけどさ。

「はあ……………」

特大のため息をつきながら、台所の方を見やる（壁があるから見えないが）。洗い物の音がし、なんか鼻歌も聞こえる気がする。なんか機嫌いいな、森音の奴。そういえば料理の腕もまた上がってたかな。

「とりあえず、明日の学校で考えよう……………」

——あしたはきをつけて。なぐられるから。

ふと頭をよぎった嫌なセリフをぶんぶんと頭を振って追い払う。お前の言うことなんか聞かねえぞ！聞いたら腹ぶん殴られただけだったじゃねえか！明日だって、ん、明日？

火曜日。

あ、しゅ、宿題……………！

こっちの方は、ぶんぶん頭振っても追い出せなかった。運命なん

て不確かなものより、現実の方がいち高校生には大変なものなのだ。

頑張つてベットから起き上がろうとしたものの、体中に染みついたヘタレ根性は、俺を起き上がらせることを拒み、結局夢の中に引きずりこんだ。

ヘタレ……って……言う……なあ……zzz……。

木林森音は、ご機嫌だった。別に兄をフライパンで殴打した為、では無い。彼女にそんな性癖は無い。

——ん、頼む。

何気ない兄の一言。自分を頼る、頼ってくれること。そんな一言が、どうしようもなく嬉しいのだ。

——まったく、にーさんは私がいないと全然だめなんですから。

整った顔をちよつとだらしく崩しながら、洗い物を続ける。ヘタレの兄、というものは、当然彼女にとつても嫌なものだ。実の兄が為す術無くボコボコに殴られたり、女の子に土下座したりするのは、正直見ていて憂鬱になる、と考えている。だが同時に、そんな兄を見ていると、どうしようもなく守ってあげたくなるのだ。母性本能、というものかも知れない。

——明日は、ちよつと朝ごはん凝ってみようかな。

ご機嫌のまま明日の予定を立てる。ちなみに木林家では、昼食用に弁当は作らない。別に彼女にとって、作ることに苦は無い。だが、持参で登校する度に、兄が他人にそれを献上する姿（いわゆる力ツアゲ）は、見たくない（実際に見る訳では無いが、否応無く耳に入ってくるのだ）。一人分だけ作るのは非効率的。ということで作っていないのだ。だが、折角早起きののなら、何かいつもと違うことに取り組むのも、いいかも知れない。

——明日は、どうだろうな……。にーさん早く帰ってくるかな……。

親の仕事関係で始まった二人暮らし。元々同級生の世話役になることが多かった森音にとつて、人の世話をする、というのは苦で無く、寧ろ楽しいものだった。それが超絶駄目兄貴であったとしても加えて、向上心の高い彼女にとつて、家事スキルが鰻上りに上昇するのは、爽快なものだったのだ。

——よし、明日は頑張ろう！

皿を拭き終えてしまい、洗い場を流して片づけを完了する。この速度も、二人暮らし当初に比べればかなり速くなっている。他のことを考えながらこのタイムはなかなかだ、と森音は一人満足げに頷く。

ちなみに彼女には、「家事が上手くなるのが面白い」程度の認識しか無い。彼女は気づいていない。それが彼女の中にある「兄に褒めてもらいたい」という願望によるものであることを。そしてその感情が、所謂ブラコンの発想であり、彼女の行動が、誰が見てもそうだと分かる行動だということを。

そんな微妙な思いがめぐりながら、文字通り『運命』の一週間、

最初の一日が終わりを告げた。

一日目（月）　　ゝ思惑ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

二日目（火）　　予言

穏やかな朝、が来るはずもない。何せあの妹と二人暮らしなのだ。マンガのお節介をそのまま現実に引き出したような性格なんだから。

「にーさん！……さっさと起きる……！」

「おおうつ……！」

大声と共に響き渡る、甲高い打撃音。どこまでいってもマンガキヤラだなオイ、フライパンにおたまつて。ちなみに朝は早い、俺の部屋は完全防音（理由は…男なら皆わかるだろ？）なため、これだけ騒いでも近所から苦情が来たことはない。まあ出来すぎた妹がいつもお裾分けとかしてるからかもしれない。

「ほらほら、ガーゼと包帯変えますよ。」

「お、おう、いいよ、腕とか自分でできるさ。」

「どうせ時間がかかるだけでロクに出来ないから私がします。大人しくしてください。」

……妹よ、蒸し返して申し訳ないが、兄らしく堂々たれ、とか昨日言っただけだったか？　こういう細かいところで頑張ってみてんだよ、一応。頑張ってる、よな？　俺。

結局大人しく為すがままに手当てをされた後、朝食に引っ張り出される。手当てでも大した時間かからなかったし、もう寝れんじゃね？　と考えていた俺。だが、願いは儚く砕け散るッ、て感じ。妙に豪華な朝食を、テレビを見ながらいただく。

「んぐんぐ、むまいな。」

「もうちょっと品位とか語彙とかないんですか。」

「んー、うまいしいんじゃね？」

「……… 適当ですね。」

妹の言う通り、適当以外の何物でもない会話をしながら朝食を食べる。ちなみにいつも寝坊ギリギリ（妹がしびれを切らして怒鳴りこむまでのロスが大きい）な為、こんなんびり会話しながらの食事は珍しい。ヘタレの特殊技能の一つとして、食事の瞬殺は欠かせない（パシラされる前に完食していないと食いつぱぐれてしまう）のだが、その力は朝も大分役立つのだ。

「今日は、帰りは遅くなるんですか？」

「んーああ、その予定。ちよつと用事があつてな。」

「……… まあいいです。」

「昨日よりは早いんじゃないかな、多分。」

「最近物騒ですから、できれば早い方がいいです。」

ちら、とテレビの方を見ながら妹。

「……… 現在……… 町付近を中心に連続殺人が……… 被害者は………」

「………… ……… そだな。」

間違いなく、例のあの殺人鬼だろう。あんどき逃がしちゃったっぽいし。その責任の一端が俺にある、様な気がしないでもない。あそこで俺が生きてなかったらあの怪力女が冷静にあの殺人鬼は捕まえられたんじゃないか、とか考えてしまうのだ。自分でも考えすぎだろ、とツツコみつたくなるが、考えてしまうのだから仕方ない。この辺もヘタレに関係してるんだろうか？よう分からん。

「……… 昨晩も……… 名が……… 犯人は……… 複数……… 組織の関与が………」

「…気をつけるよ。」

心配掛けてすまん、と言わないのは、何故だろう。やっぱりヘタレだろうか？というか、実の妹に何でこんなに気を使うこと考えとるんだ、俺。

「分かってるならいいんです。」

「…歪みねえな。」

ほんとは「素早ええな」とか言うところでこういうネタに走るのは良くないかな。分からない妹に言っても仕方ないし、からかうのをひそかな楽しみにしているわけでもない。え？マジだよ？

「では、食べ終わったらさっさと朝の支度をしてきてください。」

兄さんは殴られて傷だらけで無い前提なら、きちんとすればそれなりの顔に見えるんですから、ちゃんと身だしなみに時間をかけるべきです。」

「…なんか嫌なフレーズ入れんなよ。」

「分かってるなら前提を満たしてください。」

いつもより妙に饒舌な（なんかいいことでもあったのか？）妹に、なんだかんだ言われながら台所を追い出され、そのまま洗面台へ。顔の切り傷が染みるのを堪えつつ（悲鳴とかは上げてないよ？ホントだよ？）、眠気を水で洗い落とす。台所からなんか聞こえた気がしないでもないが、無視を決め込む。

結果、いつもより10分近く支度は整い、どうせすることも無し、ということで登校を余儀なくされる。我が妹はもう少し「何もすることの無い時間」の重要さを知るべきだと思う。思うだけで口には出さないけど。

朝、森音はフライパンとおたまを持って兄の部屋に入る。ちなみにいわゆる不法侵入をしている訳ではなく、もともと兄の部屋は施錠されていない。理由は一度施錠のまま就寝した兄を扉の外から必死に起こそうとした森音が、兄諸共遅刻になった、という前例の為だ。「次に施錠したまま寝たら鍵ごと壊す」と明言した森音の気迫に、俊也が屈した、というのも当然一因である。しかし、「起こしにいかない」という選択肢があつたことに、両者は気付いていない。

——せーのっ!!!

心の中で精一杯の気合を込めて、森音がおたまをフライパンに打ち付ける。響き渡る快音。毎朝こうして起こすのは、森音の数少ない漫画の知識の一つによるもので、兄の興味分野に絡める数少ない機会である。

森音本人はこれが兄の知っている「マンガ」の文化で、兄はそういうものを好むのだ、と知っている（それに自分が合わせてやる、ということの意味には気付かない）が、俊也は既にそんな段階を超えており、所謂「あんなこと」や「こんなこと」で起こされるようなメディアがお好みなのだが。

叩き起した後、朝食をとる。兄がすぐに朝食を食べることを望んでいないことなど、森音には一目瞭然だったが、そこは無理強いをする。

——せっかく張り切って作ったんだから、いつも通りの時間に起きてこられてガツガツと食べるなんて勿体ないじゃない！

心の中で呟きながら、兄の手を引き摺る。体格も体型も平凡だが、高校生ともなればそれなりの重量がある。ふとした時に森音はそれを感じる。昨日の傷の手当てもそうだった。スポーツをしているわけでもないのに、無駄な脂肪がなく、程よくしなやかな筋肉の付いた体。

——もしかしたら、天賦の才とかあったりしてね！

この発想自体がかなりブラコンのものであることは言うまでもないが、『運命を捻じ曲げる』という『異能』は明らかに天賦の才、と言えるものだろう。最も、森音はそんなこと知る由もないのだが。

眠たがる（様にしか見えない）兄との朝食、

「んぐんぐ、むまいな」

この一言で、森音の思考はショートしてしまった。次に気がついたのは、学校の玄関口で兄と別れた後、靴箱に向かってにやけていたところだった。もちろんその間の行動が特に問題ないことは、すっかり思い出せるのだが、そんな問題ではないのだ。

—— たった一言でこんなになるなんて…。

森音は盛大にため息をつく（ちなみに通りがかった男子生徒が一人、その物憂げな行動に頬を赤らめていた）。こんなことでは兄を立派に成長させられない。もっと気をしっかりもたなければ、と気合を入れなおす森音。

もっとも、最大の問題は誰がどう考えても完全に彼女がブラコン

であり、本人にその自覚がないことも相まって、完全にツンデレ属性を帯びていることだった。

昇降口、いつもより早い登校。無造作に自分の靴箱に突っ込む靴と手。何かを押しつぶす感触。×2。

「ほええ？」

周りも気にせず（早い登校といっても遅刻の20分前。優等生度的に、上には上がいるものだ。ちなみに妹は、上に属する人だ）、素っ頓狂な声を出す俺。だって靴箱に手紙だよ？こんなシチュエーション普通ないだろ。

…いや、ある。普通ではないが、経験なら。そういえばあの時体育館裏に呼び出されたのは何だっけ？

…。

……。

………。

あー…。思い出さなきゃ良かった…。

「果たし状だったな、確か…。」

まだヘタレが定着してなかった頃、女の子とイチャついてた（あの頃はそう思って無かったが、今にして思えば間違いなくイチャついていた）のに腹を立てた不良に呼び出されたんだった。不良さ

んってなんか古風なこと好きだよ。何でだろうね。今でも仁義とか重んじるのかな？

ちなみに思い起こせばあの時土下座したへんからヘタレが定着したのかな。人生の分岐点って分かんないもんだね。他人事じゃないけど。

「……えーつと……。」

とりあえず封筒の中身を見る。え、その場で？とか言わない。人間命の危機がある爆弾は早めに正体を知っておきたいだろ？俺だけかもしれないけど。

一通目――

拝啓

2年B組 木林 俊也 様

昨日の夜は大変お世話になりました。

あのような事は、今まで生きてきて初体験でした。

あの夜の事は忘れられないと思います。

不謹慎かもしれませんが、あんなにドキドキしたのは初めてでした。

話がそれてしまいましたね。

そのことで、是非俊也さんにお礼をしたいと思います。

昼休み、体育館裏に来ていただけないでしょうか？

時間は何時でも構いません。

昼休み中待っています。

2年C組 森羅 瑠璃

2 通目――

放課後、体育館裏にこい

ちなみに、「放課後」の下に2重線で消された「昼休み」の文字がみえる。

どう見ても死亡フラグです本当にありがとうございました。

立ったまま遠のく意識の中に、無機質な声が、無駄にはつきりと響いた。

――あしたはきをつけて。なぐられるから。

……。

……。

……。

んなもんこの状況でどうしろってんだよ！！！！

二日目（火）　　ゝ予言ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

二日目（火）　　～昼休～

さて、状況を整理しよう。どうしてこうなった。俺の思考がパソコンに映せるなら、A Aがしっかり踊っているだろう。

こう見えても、思考力には自信がある。思考力、洞察力、そして危機察知能力。ヘタレはいつでも殴られる危険と隣り合わせだ。考えることをやめるのは死を意味する。

「まず、一通目だ……。」

丸っこい書体と整然とした文章。不良のものではない。不良が女の子を装ってこんなものを書き、おびき寄せている、というのは無い。俺くらいになると、それを見分けることだってできる。実績もあるしな。

「昨夜……やっぱあれだよな……。」

殺人鬼絡みの例の一件。その時の女の子、というと、例の尻もち女か。あつはつは、あそこから死亡フラグ立ってんじゃん。強制イベントじゃん。というか、なんか助けたっけ？俺が勝手に悲鳴あげて尻もちついて、殺人鬼に嬲られて、怪力女に助けられて……。

うん、俺は悪くない。ん？違うな、いいことしてない。助けて無い。よって、感謝される覚えもない。森羅さん？行かなくていいかな？

問題は2通目だな。

……。

……。

……。

自分の思考力が恨めしいが、これは、ヤバイ。考えれば考えるほどヤバイ。だつてさ、まず字が書きかえられてんじやん、昼休みから放課後に。これさ、さっきの手紙読んでるよ。ラブレターっぽい読んで時間ずらしてんだよ、きつと。つつーことは昼休みも張りこまれてる可能性大だよ。例え一通目がホントにエロゲ的理由による呼び出しとしても、迂闊な行動取れないよ。

ん？時間をずらした、ってことはこの森羅、って子の邪魔はしない方がいい、って考えた、ってことだよな。

……この森羅、って子も不良の関係者、って事無いよな？

その線で、「ウチのお嬢（死語）に何してくれてんじやコリア！？」みたいな展開なつたりしないよな？ん？これじゃ不良からレベルアップしてヤーさんだな。それはさすがに無い。無い、よな？しかもこの手の手紙、行かなかつたら翌日3倍になって帰ってくる感じだよ。どうすつかね。

——明日の放課後また来てください。

やーなかーんじー。うーん、天秤にかけなきゃいかんよな……。放課後には先約があるしなあ……。不良の用事で放課後、つつつたら10分20分で済むわけないし、そのまましばらく動けなかったり、とかいうのも考えられる。

——来なければそいうことです。

——にーさん！

「はあ……。」

とりあえず昼休みまでに考えよう。即決できないところがヘタレだよなあ、とか内心落ち込むが、別に速けりゃいいってわけでもないよな、と自分を納得させる。このへんが森音曰く「にーさんは向上心が足りません!」とか言われる所以なんだろう。

「…はあ……。」

今日何回目かの（まだ朝のHRも始まって無いってのに!）ため息をつき、教室へと向かった。どうしようもない重い心をズルズル効果音付きで引き摺りながら。

彼の予想は、概ね正解と言っていいだろう。代り映えのしないHRと授業を受けながら（当然「受ける」と「学ぶ」は絶望的にイコールでは無い）、俊也はひたすら心の中で唸り続ける。一応最善を尽くそうと考えてはいるものの、道に光は差さない。

だが、予定通りにはいかないのが世の中の理である。俊也がその事を痛いほど、もとい、痛い目にあって思い知るのは、ちょうど2限目の長休み（彼の学校では2〜3限目間に20分の長休みがある）だった。

「おい、ヘタレ、ちょっと来いや。」

「う、うええ!？」

「いいから来いってんだよ!」

「うええ!」に否定の意味合いは無く、寧ろついて来いと言われ

れば穩便について行くのが俊也の流儀なのだが、今日はイベント過多に気を取られて、突発的事件への心構えが疎かになっていた。人生とはえてして、そういう所を突かれるものだ。

為す術なくトイレに連れ込まれる。一応不良といっても所詮普通高校の不良であり、講義をサボることに抵抗は無くても、普通の生徒を講義に遅れること前提で連れ出すのは不味い、という微妙な不文律を持っていたりする。勿論場合によってはそんな不文律など関係無く連れ出され、殴られる特殊なケースだってあるし、俊也にはその経験もある。

だが、今回は幸運なことに、その特殊なケースでは無いようだった。それを一瞬で察知できる彼の経験値は、驚嘆に値する。いや、同情に値する。

「お前…昼休み、ルリオ嬢に会うらしいな……。」

「は、はいい！」

「ルリオ嬢に何かしたら……今までのとは比べ物になんねえことになっからな……。」

「り、了解しましたあ！」

「というか…何もしてねえよな？昨日の夜。」

「何もしていません！学校帰りにちょっと会っただけです！！！」

「ならいい…。昼休み、間違ってもすっぱかしたりすんじゃないぞ……。」

「わ、分かりましたあ！」

ヘタレ全開の悲鳴を上げながら、非暴力絶対服従を貫く俊也。彼の思考は、どうせこの後一人称視点で書かれるだろうから割愛するが、言えることはひとつ。

彼の逃げ道は無くなった。

どーするよオイ……。どーするよオイ……。大事なことなので2回言いました。気分的にはあと5回くれー繰り返しても足りないくらいだが。

とりあえず目下の問題は、この授業の終わった後だ。この授業が終われば、昼休み。昼食の時間と昼休みの時間がまとめてあるこの学校において、「昼休みの間中ずっと待つ」という事は、授業が終わり次第ずーっと、それこそ1時間以上待ち続けている、ということになる。

一部の人視点から見れば、完全に俺が待たせている事になるのだろう。暗くてじめじめした体育館裏に。不良たちから「ルリお嬢」と呼ばれるお方を。

「終わったら全力ダッシュだな……。」

ベストなのは、先に自分の方が体育館について、お礼なんかいらない、というか忘れてくれと言って、まだ昼飯食べてないからサヨウナラ、という手順だろう。これなら（不良から見ても）不自然はなく、（不良から見ても）やたらベタベタしているようにも見えず、（不（以下略））相手に失礼を働いたようにも見えないだろう。結論、終わったら、全力ダッシュだ。もっとも厳しいのは前提条件を満たすことだろう。教室を見回すと、不良が何人かいない。恐らく既に張り込んだ後だろう。……授業くらいちゃんと出てくれ。

「では、少し早いが今日はk」

「『『ありがとうございますあー！！！！』』」

馬鹿な高校で良かった。学食組が終わるや否や、（つーかまだ終わってなかったかも？）全力で食堂に向かって駆け出すおかげで、それに紛れて全力疾走する俺もあんまり目立たない。

いや、前の奴がちよつと驚いた顔してたから、もしかしたらちよつと人に見せられない形相だったのかもしれない。そりゃそうだ、学食でうまい飯食いたいー、程度の奴とは切羽詰まり具合が違う。

よし、体育館裏までジャスト5分！そんじょそこらの陸上部にだって負けないタイム、これなら必ず尻もち女よ」

「あゝ、木林さん…ですよねゝ？はやいんですねゝ。」

…願いは儚く砕け散るッ。

何でいんだやもう！見たところ、案の定例の尻もち女だった。腰まである長いストレートの、ストンと落ちたみたいな黒髪、は昨日見た通りだった。は、とつくのは、あの時は遠くて、顔は良く見えなかったんだ。こうしてみると、なかなか、いやかなり高レベルだ。良く言えばほほ笑んだような、悪く言えばちよつとぬけてるっぽい…いや、悪く言う必要は無いな、ほほ笑んだような細目。と小さな口。

…直感。これ不良のアイドルだよ、絶対。上手くやらないと命の危機だよ。綱渡りだよ、タイトロープディフェンスだよ。

「えゝとゝ。こんなに早くて大丈夫ですかゝ？お昼とかゝ。」

「いや、後で食べようかな、とか…思っちゃったり…？」

「そうですかゝ？そんなに急いで来なくてもいいのにゝ。」

独特の間延びした、人を安心させるような声。でも安心できない俺。だってさ、後ろ後ろ。俺の後ろも尻もち女さんの後ろも。すごい視線。刺すような視線、ってこういうの言うんだね。俺初めて知ったよ。だって殺気が感じられんだもん。俺武術の心得とか全く無いんだが。

「いえ、森羅さん、こそ…こんなに早く…」

「ルリ、でいいですよ。私ですか？私はちょうど授業が自習で。せつかくだから前の時間から。ですからのんびりですよ。えへへ。」

「……。」

俺、絶句。やべえよ。視線の殺気が倍化の術だよ。ってかこの視線、ひとりやふたりじゃないよな？ガチで俺やばくね？でも、ずっと黙ってんのもマズイ。ここで相手の機嫌を損ねたら終わりだ。もちろんフラグ的意味じゃない。俺の命的意味でだ。

「えっ…と、ルリさん？俺、別にそんな」

「呼び捨てでいいですって。俊也君は恩人なんですから。ヘタレスト、なんて呼ばれてるけど、昨日はホントに助かりましたよ。」

「ヘタレスト言わんでください。」

「あら、すみません。」

ヘタレスト、って最初に言った奴、誰だよ。妹曰く、「ヘタレに最上級のestと、人のistを掛けたんだそうです。なるほど上手い事言ったものですね。」だそうだ。にしても、こんなに定着するとは。ほぼ初対面の人に言われるなんて。

「で、お礼のことなんですけど。」

「いえいえいえいえいえいすいすいすいそんなの！俺なんて何にももしてないですし！！！」

貰ったら殺されそうですし！僕の事を本当に思ってくれるならこのまま放っておいてください！というか見逃してください！！！

「手紙に書きはしたものの、何がいいかよく分からないんですよね。ですから」

「でしたらやっぱりいいですって！」

ググー。

「…あ。」

「あらあら。ではとりあえず…お昼をどうぞ。」

俺の腹の音。終わりの鐘の音、にちょっと似てね？似てないか。そうか。でも、それが似ているように思えてしまう俺の今の心情、分かるだろ？

「沢山あるんですよ。料理の練習がてらに、多めに作って、仲のいい人にあげてるんですよ。今日はもうずっとここにいます。予定ですから、俊也君にあげないと余ってしまいます。」

「え…あ…う…」

お花畑の中心で、小鳥と蝶々と戯れるかのようなほほ笑みを浮かべるルリ女史。「てめえルリオ嬢の言うことが聞けねえのか！？」の視線半分と、「ルリオ嬢の手作り弁当、食おうもんなら分かってんだろぅな！？」の視線半分。口をパクパクさせたまま固まる俺。俺。俺。どうするよ俺！？ら、ライフカードお！！！！

「さあさ、遠慮なさらずに、あ〜ん」

「頂きますからそれ以上は勘弁を!!!!」

すべての視線が殺気に変わつたのを瞬間的に察し、大慌てで座り、差し出された箸（出し巻き卵付き）、ではなく、横に何膳（箸の数え方くらい知ってるさ）か置いてある箸を拝借し、弁当箱からいくつかおかずを頂く。うまい。うまいんだが、視線が痛い。やばい。この視線がなければ、妹の飯より数段うまいんじゃないかなろうか？もちろん、なければ、の話だ。

「どうでしたか？お口に合えば良かったですか。」

「と、とてもおいしかったです。」

最後の晚餐にふさわしいくらいには。

「そうですか〜！それなら、ご飯が欲しくなったらこれからいつでも言ってください〜！ですから、携帯出してもらえますか？」

「は、はい……」

このとき、最後の晚餐、に氣を取られて（うまいこと言ったとか考えてたわけじゃないけどさあ……）、気付かなかった。ここで携帯を出して連絡先を交換してしまつたら、これから不良の皆さんとお付き合ひが続く（してなくても続くんじゃない？とかいうツッコミはスルーだ）、という事に。

「はい、登録しておきましたよ、どうぞ。」

「んまつ、つあつ、ちよぎっ！」

「ほえ？」

「も、もう登録されたんですか？」

「ええ、機械系だけは素早いんですよ。普段トロくさいのは見た目通りなんですけどね。えへへ。」

あ、ああ……。俺の…最後の希望が…。そこっ。希望なんてあったの？とか言わないっ。

「ん、あの…。」

「なにかあれば、いつでも連絡くださいね。私にできる事でしたらいつでもお助けしますよ！」

「はい…、では…今日はこれで…」

「あ、そうですね、ご飯まだですよ、私のおかずだけでは足りないですよ、育ち盛りの男の子ですし。お呼び出ししてすみませんね。」

「ど、どうも…」

「そうですね。よろしければ、今日の放課後でもどうですか？家の方でしたらいろいろおもてなしできると思いますし。」

「いえ、放課後にはちよつと予定が…」

「あら、そうですね？残念ですね。楽しみにしていたんですが。でも、無理強いするものではありませんし…。あ、お引き留めして申し訳ありません、ではでは。」

にこやかに手を振るルリ女史。

あ、ああ、終わった…。苦行が終わった、ではない。これから始まる尋問会、ともすれば拷問会によって、人生が終わった、という意味だ。

分かってるよ、もちろん。あの角を曲がり切ったらもう、不良たちが目の前に、ってわけだ。だが、行かざるを得ない。死地と知りつつも行かなくてはならない、人生にはそんな機会があることを知った。できれば一生知りたくなかったけどな。

「くるぞくるぞくるぞキター」

「ああ？なにぶつぶつ言ってるやがんだ？」

曲がった瞬間、胸倉をがちり。いつもお世話になってます、不良さん。別にならなくて世話になってるわけじゃないですけどね。寧ろ全力でお断りですけどね。言えないけど。

「え、えーっと…」

「今日の放課後、ルリお嬢と一緒に行け。」

「は、はい？えーっと呼び出しが…」

「それは俺達だ。だから、ルリお嬢が優先だ。文句ねえな？」

「あ、あの…」

「……。」

「……。」

沈黙。「わかりました」と言って立ち去れば？とか思うかもしれない。誰だってそー思う。俺だってそー思う。…胸倉がちり掴まれて無ければ、だが。

「え、えーっと…」

「ルリお嬢はな…、いい子なんだよ。おめえなんかどうにかしていい子じゃないんだよ…。俺達不良なんかだって、分け隔てなく接してくれる…」

「あ、あの…」

「だからこそ、敵だつて多い。センコーから目えつけられたりだつてしてる…。そんな子だから、俺ら程度じゃ足りねえ…。俺らをまとめて畳んじまえるくらい、体も、心も強くなきゃいけねえ…。」

「……。」

「だから、間違つてもお前みてえなヘタレストには、任せられね

えんだ、よつと……！」

「ゲロ口つ……！」

「顔は勘弁しといてやらあ。ルリお嬢に会うときに困るだろうし、なツと……！」

「グヘエッ……！」

「……ったく、いつもの事だが、このくらい耐えねえと、張り合いがねえな……。もういい、行くぞおめえら！」

離される胸倉。崩れ落ちる膝。倒れる体。去りゆく不良たち。でも、意識ははつきり。こういつときつてさ、なんか気を失えないよね。何でだろうね、気絶できれば楽だよね、って思うときほどそうなんだよね。

まあ腹筋2発。頑張れば起き上がれる程度。殴られることに慣れてしまった人間基準で、だが。レバー打ちじゃなくて真っ直ぐ腹筋に入ってるから、苦しさもそこまで無い。

「うう、つと……。」

起き上がる。うん、我ながらしつかりした足取りだ。殴られたら、倒れた方が痛い目はみない。倒れて、腹を下にして頭を抱えるように庇えば、後は割と頑丈な部分しか蹴られないもんなのだ。うん、もちろん俺だつて気付いてるよ、これが勝ちをあきらめたヘタレの発想だつてこと。分かってるけどまあ、仕方ないじゃん？いつも、一対多数、っていうのも生ぬるいような状況だし。

「ん、とりあえず、学食か……。」

まあ、ロクなもん残ってねえだろーが、食わないよりましだろ。もし残ってたとしたつて、さっき食ったおかずにはかなわないだろーし、まあ味に期待しても仕方あるめえ。

つつ立つてもしょうがないし、とりあえず行くか。放課後の事は、放課後までに考えりゃいいんだし。考える時間はたっぷりある。授業という、な。ま、睡眠時間が削られるのは痛いが。

心の中でぶつぶつ言いながら、もしかしたら一部口に出しながら、俺は歩き出した。割と、後ろ向きに、だけどな。

何の変哲のない授業。思考を放棄し、まどろむ男。言わずもがな、木村俊也。置かれている現状と、迫られている決断を考えると、気持ちは分からなくはない。思考を放棄、というのはヘタレの証である事に疑いの余地はないのだが。

♪♪♪

「うえい!？」

響き渡る電子音。今日び電子音の着信音など化石以外の何物でもないのだが、一度着メロで「にーさん、趣味悪いです」と笑われて以来、彼の着信音、メール音共は電子音に設定されている。ちなみに、電子音にしたらしたで「今時電子音って…プププ」と言われるだろうということには、彼は気付いていない。

「キバヤシー。没収されたいのかー。」

「すみませんっ！以後気をつけます！」

「まったく…。授業中だろーが…」

形式的な注意（彼レベルの高校で嚴重に注意した所で、生徒の反感を買っただけなのだ）を受け、そのまま机の下に隠してメールを

見る。

(? 知らないアドレス?事務連絡?)

画面には、見覚えのないメールアドレスと、題名に書かれた「事務連絡」の文字。訝しげにメールを開いてみると、

(! ま、まじかよ!?)

本文はこうだ。

『楸です。今日の放課後について連絡です。森羅電気のお嬢さんには私から、今日はお断りさせてもらい、明日改めてお願いする旨のメールを送りました。もちろん、君のアドレスから、ですが。あとで返信のメールを転送しますよ。

なので、今日の放課後は直接楸探偵事務所に来てください。恐らく不良たちは森羅電気のお嬢さんの方に張り付いているでしょうから、君は楸探偵事務所に来ればいいです。ちゃんと尾行はまけますから、放課後、と言つても君の学校では授業が終わるころには日が暮れかけていますからね。なるべく早く来ていただけると助かります。まあ、早く来ることになるとは思いますが。では、お待ちしていますね。』

(……………。)

とりあえず、逃げ道は無くなったな、というのが彼の最初の感想だった。実際のところは、迷わなくて良くなった分、気分的には楽である。と無理やり自分を納得させる。

次に、文の中からいくつか不審な点を考察する。

（「早く来ることになる」ってのは…？」）

一応考察してはみるものの、ヘタレで鍛えている（？）といつても彼も所詮一般人である。考えても分からないものは分からないのだ。だが、長年のヘタレ生活で染みついたヘタレ根性で、彼は、「分からんことは割り切ってしまう」ということを経験的に身に付けていた。この時も、

（ま、そのときになれば分かるかなー）

程度の考えだった。そのまま次のメールが届く。例の、ルリ女史の返信のメールだろう。

『わかりました、大事な用事なら仕方ないですよ。気になさらないでください！リユウさんたちはとてもいい人たちですが、ちよつと無茶する人たちなので、俊也さんに迷惑とか掛けてないといいんですけど…。明日、楽しみにしていますね！うちの人たちは忙しいから家にいないかもしれませんが、明日は私もバイトないので助かります！では、またメールお待ちしておりますね！』

…。

……。

……。

（ああ、あの不良（のリーダー格）、リユウって名前だったな、そういえば…。）

現実逃避全開でそんなことを考えながら、明日も予定が埋まってしまったことに嘆息する俊也。しかし彼は基本的に打たれ強い人間

であるから、明日の予定をキャンセルしたい、というメールを打つには至らない。もっとも彼は自分ではそれを「どうせあのイケメンメガネにメール止められるだろ」とか、「断ったら不良が怖いし」という後ろ向きな理由によるものと考えており、自分のヘタレ具合に落ち込んだりしているのだが。

（ま、なるようになるんだろうなー）

という、『運命を捻じ曲げる』力を持つ者にあるまじき感想で、思考を打ち切ってしまった。もう少し考えれば『早く来ることになる』の意味は分かった事であり、もっとしっかり覚悟しておくべきだった事を知るのは、校門を出てすぐの事であった。

二日目（火）　　～昼休～（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

二日目（火） 〓 姓無〓（前書き）

盆で更新が遅れてしまいました。そのうえ若干量少なめで申し訳ありません。これからは以前同様のペースで更新できると思います。お気に入り登録が増えていて、嬉しいです。ありがとうございます！

二日目（火） 〽姓無〽

「あー、あー、あー……。」

「待ってたぞ、ヘタレ。」

「おk、把握した……。」

「何を言っているんだ？とりあえず行くぞ。」

「い、いえ、ちゃんと自分で歩くんで……。」

放課後、校門で待っていたのは、ショートカットと、その中に翻る一筋の長い髪の良く似合う、凜々しい眼をした美女……というところばっかりやましい状況な気がするが、実際には怪力女、もとい、柊、とかいってた、例の女が仁王立ちしていた。

——まあ、早く来ることになると思いますが。

ちなみに、一目見た瞬間の心の声としては、「あー、あー、あー、把握した」だった。まあ考えてる事がそのまま口を突いて出た、つてヤツだ。そのくらいは勘弁してくれ。ヘタレでも人間なんだ。人間だもの。としや。

「それにしても楸、って言ったつけ？あのイケメンメガネ。何者なのあの人？人のケータイ完全にハッキングしてくれちゃってんだけど。」

「師父を呼び捨てとはヘタレはなかなか太いな。まあ、師父については、私も知らないことが多いな。分かるのは、強い事と、賢い事。特に電子機器についてはものすごいぞ。」

……師父って。あんた何時代の人間やねん。ツッコミの時だけ関西弁の人間ってなんか関西人に目の敵にされるよね。なんでだろうね。

まあ、それでもしちゃうんだけどさ。やめられない、とまらない。

「まあ、時代というか…私の年は…と、そんなことを話している場合じゃないのではないか？あれ。」

「はえ？」

指差された方向を反射的に振り返って見る。剋目する。…あーあー、毎度お馴染、不良の群れ、ってか軍団じゃん。すげえよ、この距離からでも目え血走ってんの分かるよ。特に先陣を切る彼、ああリュウ君だったね、足はえーよ。どうすんだよ。俺逃げ足速いと自負してるけど彼からは逃げ切れねーよ。

「まあ、それを見越して私が派遣されたわけだが…」

「ふおえ！？つあ、首、あ、あ、アツー！！！」

突如所謂首根っこをひつつかまれて、そのまま（俺基準で）全力で引つ張られる。浮かぶ俺。I c a n f l y。なんかデジャブ。

「てめえ、昼休みの事忘れたわけじゃねえだろうがあ！！！」

「こ、これは不可抗力で！」

というか、見て分かれ！！どうみたって拉致現場じゃねえか！昼休みどうのここのの問題じゃねえよ！それからルリ女史！こいつらなんとかしてくれよ！？いい人なんだろう、とても！

「ルリ女史、に、はっ、メールでッ！」

「んなことわあつてらあ！！！」

わかってないよ、それ。全然分かってないよ。

というか、おい、すげえよ。不良がみるみる遠ざかっていくよ、逆向きに走ってるみたいだよ。どんだけ足早いんだよこの怪力女。

「さつきから拉致現場だの怪力女だの…。もう少しまともなことを考えられんのか。これから師父から色々と説明があるだろうに…」

「えっ、なっ、ちょ、首、タイが入った、死ぬ死ぬっ!!!」

なんかいろいろと死亡フラグやらなんやらあった気がするが、人間の脳つっ―のは、考えるのには酸素が必要らしいよ。その酸素を、絞殺という手段で断たれた俺は、いろいろ考えるべき事を残したまま、思考を放棄。というか、…これ…って…あー…

最後の瞬間に思い浮かんだのは、『ブラックアウト』という単語だった。

気がついたとき、俺はベットの上だった。知らない天井だ…と思ったら、いきなり人間の顔がドアップで飛び込んできた。

「きがついた…？だいじょうぶ…？」

「…ハイ。」

そのきれい、というか、かわいすぎる顔は多分、昨日の美少女、パルカとかいう子だろう。とりあえず簡潔に挨拶をする。ん？返事は挨拶とは違うって？そうなの？

「おにいちゃん…よんでくる……。」
「あ、ハイ。」

そのままベッドから降りて、トコトコという擬音語が似合いそうな足取りで部屋の外に歩き去る。腰まであるゆる髪は緩やかに波打ち、フリルたっぷりのドレスはホントに人形のようなだった。ちなみに思い浮かんだのは、呪いの人形だった。例のあの髪が伸びるヤツね。無表情なことか似てね？言ったら怒りそうだが。

とか考えてると、直ぐに別の人間が入ってくる。うん、あいつだね、所謂犯人だね。

「楸…さん…」

「こんにちは、木林君。思った通り早い時間に来てくれて助かりますよ。まあ、失神して泡吹いているとは考えていませんでしたが。」

「いやてめーと怪力女のせいだろ、JK。まあ口には出さないけどさ。」

「え…と、今h」

「今の時間は、夕方6時。今日は二つ仕事がありまして、一つは柊さん、もう一つは君と榎田君に行ってもらったつもりです。事件の起こる時間は8時前なので、今から二人でんびり行ってもらって結構です。ここの事は、彼から色々聞くといいですよ。きっと気が合うと思いますよ。」

「いやいや、確かに聞こうとしていた事全部答えられてるけどさ。そういうのあんまり人に好かれならしいよ。聞いた話だけどさ。」

「えー…つと、」

「ちなみに君のバイトの最終目標だけは、私から説明しておきましょう。私たちは今、危機的状況にいるんです。詳細に言えば、選択を迫られている。一人の少女の命か、この町のすべてか。」

「は、はいい？」

「私は、そのどちらを選べない。いや、正確には選べますが、選びたくない。そんな時、君に出会った。選択肢ごと無にできる君に。」

「あ、あの…、」

「君にはこの一週間、正確には5日で、『覚悟を決め』てもらいます。ここでのバイトはそのためです。」

「か、覚悟って…、」

「断っておきますが、私は所謂シスコンです。妹のためなら、なんでもする覚悟があります。君が覚悟を決めるためなら、なんでもする覚悟が、私にはあります。」

「い、いや…、」

「私からは、以上ですね。なにか質問があれば、榎田君に聞いてください。えのきだくーん！」

外から「あいよーっ」という幼いが威勢のいい声が聞こえる。なんていうか、外堀から完全に埋められた感じ。ん？ちよつと違うか？袋のねずみ？まな板の上の鯉？そっちの方が近いか？絶対絶命度が上がってる気がしないでもないんだが。

妹の笑顔（ここ数年見た記憶がないが）、ルリ女史のとりけた表情、不良のにらみ顔がフラッシュバックし、頭の中で「お前は完全に包囲されているっ！」の声が聞こえる。

…すいません、投了です。

「楸のダンナ、なんか俺っちに用？もう仕事の説明は聞いたけど

」。

「榎田君、今日の仕事ですが、彼、木林君と一緒に行ってください。私たちの仕事の現場を見せるのが、一番いい理解になります。あと、彼の質問に答えてあげてください。」

「まあ俺たちは別にいいけど…なんか不味いこととか口走っちゃうわねえかな？」

「大丈夫です。君にはそんな不味い情報なんて教えていません。君は考えたことがそのまま口にでる子ですからねえ。」

「ははっ。そりゃちがいねえ。お、ひきつけたよ。」

「あ、あの、僕の意味は…？」

「関係ありません。まあ、君も榎田君とは気が合うと思いますよ。彼、飢えてますから。」

最後の抵抗をバツサリと切り捨てられ、そのまますんげえ髪の色した少年に売られていく俺。ドナドナどーな…。てか、飢えてるってなんだよ。ほんとにドナドナじゃねえだろうな？

「んじゃ、まあそろそろ出発だし、行こうぜ、若大将！」

「は、はあ…。はあ…」

変な呼び名で呼ばれ（この事務所は時代錯誤な人が多いのだからか？）、背中をばしと叩かれ（殴られ慣れている俺でも結構痛い）、そのまま連行。ちなみに上のセリフは一回目が同意（イヤイヤ）、二回目が溜息だ。もう今日何回溜息したか。人生でもトップ3、いやこの場合はワーストかな、にはいるぞオイ。

とか何とか考えている間に、外に連れ出され、バス停まで歩かれ、そのまま乗り込む。なんかバス代おごってもらってんだけどいいのかな。というかコイツ、当たり前みたいにこども料金ではいつたぞオイ。顔立ちと背丈はいけるかもだが、その頭は無理なんじゃ

ねえかコラ。

だが、バスの運転手は何も言わず（あんまり堂々としているからかもしれない）、そのまま最後尾のシートに二人で座る。

…。

……。

…………。

よし、とりあえずいろいろ聞いてみるか。あのメンツじゃあ、多分、いや俺の鍛え上げられた勘（何で鍛えられたって？ 愚問だね。）が間違いないと言っている、こいつが一番話を通じる！
いくぞ、俺！

ちなみに、結論から言えば、この勘は正解だった。
もつとも。

後にして思えば、ちょっと正解過ぎたかな、と思うが。

「腹部に金属殴打一回…顔は無傷…拳での殴打が二回…。」

俊也達が仕事に出かけた後、シンは一人、地下室の機械と向き合い、キーボードを叩いていた。行っているのは、ハッキング。常人にできる速度を大きく上回るタイプスピードと進行率で、必要情報を探索する。

「つまり、昨日の帰宅後と今日の昼は、運命通り…。」

だが、それでも彼の全力には程遠い。思考の大部分が、別の事に

集中しているのだ。流石に『最善』の能力を用いて迄はいないが、思わず思考が口から零れ出る程に。

「彼の能力は、運命を変えられる時と変えられないときがある…。その条件として考えられるのは…。」

ハッキングしている相手は、大物だ。今回の最終的な戦場となる場所に、本拠地を構える者。彼の最愛の妹、パルカの死地となる『運命』の場所に陣取る者。

「覚悟…。」

表の世界では、業界では世界でも有数の規模を誇る大企業。この町から程近い土地に本社と設備を持ち、大勢の社員を抱える大御所。古風にいえば、城、とも言えるかも知れない。

そして、裏の世界では、最新鋭の兵器生産工場で、最悪の兵器の製造、保管、輸出を担う、軍事工場としての側面も持っている。

そんな相手でさえ、彼にかかれば片手間の作業でハッキングできてしまう。柊が自信を持って「電子機器についてはものすごい」と語るのも頷ける。

「では今後は…ん？」

殆ど無意識に行っていた探索の手が、不意に止まる。同時に、独り言も止まる。『運命を捻じ曲げる』能力の思考を一旦打ち切り、100%全力の集中力を画面に向ける。

——足跡？

発見したのは、何者かの足跡。自分では無い。自分ならこんなミスはあり得ないが、この足跡は、自分で無ければ見つけれなかったらう。

——とりあえず逆探知から身元を…

反射的に足跡の主を検索する。勿論一筋縄ではいかないが、シンの本気にかかれば不可能では無い。小一時間という、シンを相手取ったにしてはよく逃げた、といえる時間の後、

——ッ！！！

絶句したのは、シンの方だった。それは彼が見つけたかった情報、「相手が用いている実戦担当者は何者か」であつた。あつた、のだが。

「『姓無』とは…。」

『姓無（せいなし）』。裏の世界では名の知れた、それでいて詳細は不明な点が多い集団。分かっているのは、雇われの傭兵の一種であるということ。少数精鋭の集団であるということ。

そして。

——紛れもなく『殺人鬼』であるということ。

「『姓無』が囁んでいる…ハッキング…。」

なるほど、とシンは一人納得する。自分は会社自体との戦争を考えていたが、どうやら違うらしい。相手は、会社に攻撃を仕掛けている人間。恐らくテロリストの一種だろうそれらは、厄介なことに

銃火器、戦車すら軽く凌駕する『姓無』を雇っている。

「なるほど…。姓無が相手では、私がみすみすパル力ちゃんを奪われてしまう可能性も、ゼロではない…。」

自分の思い描いたシナリオを頭の中で修正しながら、シンは一人ごちる。それに合わせて、今後のスケジュールの調整を図る。

——『姓無』は恐らく、いやほぼ間違いなく『異能者』。

——ならばこちらも『異能者』をぶつけるべき。

シン自身の『異能』は、戦闘向きではない。確かに相手の戦闘方法や力量から『最善』の戦法を探ることはできるが、それはあくまで、シンに前情報がある場合だ。未知の兵器、ましてや『異能』が相手では、その情報を集めている間に決定的な一打を喰らってしまう可能性が高い。

その点、残り二人の『異能』は、かなり戦闘向きだ。こと終に関しては、扱い方さえ間違えなければ無敵と言ってもいいほどの力を発揮する。

——『姓無』がいるとしても、恐らく一人か、多くて二人。

『姓無』は、互いが殺し合わない様に大人数が集まることは無い、と言われている。殺し始めたらずまらないため、同志討ち危険が高いからだ。

——ならば、策はある。

急遽浮上した、「戦闘力の向上の必要性」を最優先事項とし、ハ

ツキングを打ち切り、ディスプレイの前から立ち上がる。まだこの事務所にいるはずの柊に、鍛錬を念入りしておく事を伝えておく、という、いち早い対応の為である。

このとき、彼は気付かなかった。

ひとつ、見落としをしていることに。

それは『運命を捻じ曲げる』力の考察の所為だったかも知れないし、『姓無』が現れたことによる驚きの所為だったのかもしれない。

彼が、テロリストの足跡を消し忘れていた事に。

このほんの些細な見落とし、シン本人も「自分でなければ見つからない」と考えた程の小さな見落としが、後に大きく事件に絡むのは、少し先の事だった。

二日目（火） 〓姓無〓（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、〓ご意見や〓感想をお待ちしています。

二日目（火）　　～開戦～

「え、えーと、いろいろ聞いていいと言われたんですが…」
「だが断るッ！！！」

「！！！！！！？」

「え、ええええ！？」

「ま、まさか、コイツ…」

「い、イケル男なのか！？この外見で！？」

「いやいや冗談だよじょうd」

「なん…だと…！」

「…なんだっけそれ？」

「カレーにつけて食べるインドの食べ物。」

「…ナンだっけそれ？」

互いに交わす視線。レベル的にはトキメキ熱視線つていつても違和感ないレベルだよマジで。てかそんな目で見つめんなよ、ものすごい期待こもってんだよ。あ、念のため言っとくけど俺ホの字の方面の人じゃないからね。見つめ合ってたってそんなこと起こんないからね。バスの中だとトイレないしね。あっても行かないけどね。

「若大将…君は、分かる人だね。」

「そういう君も、分かる人。」

言って交わす固い握手。なんか、すごい一体感。いや、こういう話できる人って、周りにいないとすごく欲しくなるんだよね。

——彼、飢えてますから。

楸といった、事務所のイケメンメガネの言ったセリフを思い出す。ああ、なるほど。飢えてる、ね。確かにその気持ちは良く分かるよ。俺みたいにさ、不良と絡みがある（絡みたくて絡んでいるわけでは決していないけどね）とさ、こういう話題に精通した人はあんまり近寄ってくれないんだ。まあ多分、逆の立場だったら俺もそうだよ。誰だってそーする。俺だってそーする。

「では、なんでも聞いてくれたまえ、同志よ。」

「では遠慮なく…、まず、あなた、何者ですか？」

「ああ、俺？なんかチュートリアルっぽくなるが、まあいいか。とりあえず俺の今からの俺の話は、長い説明文だからめんどくさい人は飛ばしていいんだぜ。」

「誰に向かって言ってるんですか。メタ的な事言ってるので説明してください。」

「んじゃあ、質問に答えてくか。俺は、榎田 涼…ってそれは知ってるか。今は大学4年だよ。進路が事務所に内定してっから、就活しなくていいんで、暇人だ。見た目中学生とか言ってくれんなよー、一応気にしてんだからな。」

「名前がどうか、そういう問題ではないのだよ。」

「あ、それ俺元ネタ分かんね。じゃなくて、ああ、なるほど。俺達が誰か、ではなくて、何者か、だったな。俺達は、『異能者』。まあ簡単にいやあ超能力者だよ。色々あって超能力が使えるようになって、困ってた…のはレンだけか。まあ気持ち悪くなってる時に楸のダンナにそれとの付き合い方を教えてもらった。そのままその力を生かして一緒に仕事してる、って感じかな。」

「超能力者…？」

「ああ、まだ誰のも聞いてなかったのか？そりゃ訳分かんねーよなー。まあ一番分かりやすいのはパルカの嬢ちゃんだろーな。あの

子の力は、『予感』。運命の分岐点をあらかじめ感じられる力だ。その周辺情報も少しは分かるらしく、その分岐点を俺らがいい方にいじってる、ってーのが俺らの仕事。というか若大将、この力がなかったら俺らの仕事成り立たねーだろーがよ。」

「ああ、あの子が…そーいえばそーか。あの子は…」

「んー、これは俺から話していいのかな…まあダンナはいいって言うってたし、いいか。パルカの嬢ちゃんは、昔はあんな感じじゃなかったんだ。無口ではあったけど割と表情豊かで、生き生きしてたが、ちよつと、あつてな…。」

話していい、と自分で納得しておきながら、言い淀む心の友（内定）。確かにあの子は、異常だ。あの表情、あの眼は、普通の人生を歩んできた小学生ができるもんじゃない。

安っぽい言い方をすれば、まるで地獄を見てきたような…、いや、今現在地獄のと真ん中にいるような顔。

「あの子は…、自分の死ぬ運命の分岐を『予感』しちまったんだ。そしてそれは、数万人の命との天秤だ。」

「なっ！！！」

「自分が助かるか、数万人が助かるか。その運命の分岐を見ちまった。ふさぎこむようになったのは、それからだ。それでも今は、何力月か前よりは大分マシだよ、あの頃は部屋からは出てこねー、飯は食わねーで大変だったよ。…いや、そうとも言えないか。あの子が今みてーになったのは、死ぬ覚悟を決めちまったからだからな！。生きることをあきらめちまった今の状態が、マシとは言えないかもな…。」

「それってもしかして…。」

「おう、流石は若大将、勘がいいねえ！それが5日後の日曜日、時間までは今回は良く分かんないらしいな。元々日にちが近づくほどハッキリしていくモンらしいからな。」

「だから、僕が……」

「そ。『運命を捻じ曲げる』ほどヘタレな若大将に、その運命をぶち壊してほしー、ってわけだ。がんばれよー、選ばれし子供たち！」

また懐かしいネタを……と突っ込むほどの余裕はなかった。心の友は、もしかしたら気を使ってネタを混ぜてるんじゃないだろうか？ だったらネタで笑い飛ばした方がいいんじゃない？ とかいろいろ考えはしたが、それを行動には移せなかった。ヘタレと言われても反論できないのもそうだなあ……、と心の中で落ち込む。

だつてさ、やばいよ。俺ヘタレだよ（認めんのはえーよ、とか言わない）。今の話だと、そんな奴に数万人の命預ける気だよこの人たち。なんか桁違いすぎて実感ないんだが。ないと不味いかな？

「他に何か聞きたいことはあるかい？」

「そんな機械声で明らかにRPGの最初にいる説明の村人Aですよーみたいなことしないでいいですから。文章で説明し辛いんですよ。じゃあ、今日の仕事について教えてください。」

「なんだよ、若大将だつてメタ的じゃねえかよ。ははっ。さてさて、今日の仕事だな。今日の仕事は、まあ所謂人助けだよ。なんか車が暴走するから、それにはねられそうになるバーさんと子供助けに来いって。まあ、命にはそんな関わんないらしいから、ピリピリしないでいいぜー。もともと俺一人で行く予定だったしなー。」

「なにそれこわい……じゃなくて、じゃあ僕は見てるだけでいいんですね？」

「おうよ！ おっさんに任せときな！」

「ホントですね？ 僕絶対なんにもしませんからね？」

「……若大将エ……」

「な、なんすか。」

「そのセリフはすげーかつこ悪いぜー。若大将も男なら、ちった

あ見栄やカツコ気にした方がいいんじゃない？」

余計なお世話だよ、心の友よ。そんなの氣にする余裕があるなら、ヘタレなんてやってねーよ。てか分かって言ってるんだろ。エ…の顔芸とか細かい芸はいらねえよ。

「ああ、あと、俺の『異能』は、『害意』。名前は楸のダンナがつけてくれたけどな。説明としては、人を傷つけるもの、傷つけようとするものが、ぼんやり光って見える。以上！」

「以上、ってそんな元氣に言われても…。」

「まあ、あつたからってそんな困んねえよ。むしろ事故とか起こしそうな車分かったりで便利だし。はははっ。」

「んー、超能力者ってこんなんでもいいのか？某学園都市ではどんなだったっけ…とか考えて、ふと気付いた。」

「榎田さんは…5日後が、怖くないんですか？」

「リョウでいいぜ、若大将。で、ん？」

「…言ってから、「しまった」と思った。これ地雷かもしれん。大丈夫じゃないのを必死に隠してる人に「大丈夫？」って言っちゃった感じだよ絶対。怒られるかもだよ俺。」

「あ、いやあの…」

「んー、まあ怖くない、つつつたら嘘だな。だがまあ、あの事務所の間では間違いなく俺が一番お気楽だろうな。だって俺、パルカの嬢ちゃんが死んだとしても就職先無くなるだけだし。パルカの嬢ちゃんみてーに命かかってるわけでも、楸のダンナみてーに愛する…あのマジシスコンだからな、ははっ…人が死ぬわけでもないし、レン…はまあ、俺から言うより本人に聞いた方がいいだろ、と

にかく俺が一番大したことないって思ってるだろーよ。」

なにか、ずれているんじゃないか？

この人は、なにかおかしいんじゃないか？この人は今、「人が死ぬことなんて大したことじゃない」と断言した。全く会ったこと無い人ならまだしも、今まで一緒に仕事してきた仲間が死ぬ事を、だ。それよりも、就職先がなくなることを優先した。

「…。」

「ん？そうか、若大将みてーな普通の人からしたら、俺が異常者に見えるかな？そうだよなー。」

顔にでちまつてたか。でも、これは隠せない。だって、俺普通の高校生だし。あつても殴る殴られる、くらい。命のやり取りなんて聞いたこともない。なんか、別次元の話だし。

その、別次元にいる人が、目の前にいる。そして、自分は「そっち側」に足を踏み込みかけている。

——ヤバイ。

今からでも、逃げるべきじゃないか？という考えが脳裏に浮かぶ。それはみるみる大きくなり、自分の思考を塗りつぶし、

「心配すんなよ。大したことないとは言ったけど、助けられるなら助けてーよ。できないことはしねーけど、できることはやるよ。」

「あ…。」

「そしてあんたは俺らのジョーカーだ。最大限守られる。というか、あんたが死ぬことはねーよ。この5日間、楸のダンナがあんたを死ぬ気で守るだろーうしな。多分自殺したって死なせてもらえねーよ。ははっ！」

軽薄そうな外見をした少年（実際は大学4年だから…5個上！？）が、一瞬だけ見せた真剣な眼。ものすごい色した前髪の隙間から見えた眼。

——助けられるなら助けてーよ。

その迫力に、やっぱり気押された。威圧感ってやっぱりすごいよ。ヘタレ ぞくせい に こうかはばつぐんだ！

「まあ、とりあえずなるようになるでしょうし…」

「おお、そーだよなー！とりあえず今日は俺の華麗な仕事っぷりでも見てしっかり職業見学してってくれよ！帰りにはなんか買ってやるつか？おじさんが、アメをあげよう、ってか？はははっ！！！」

「…そーなのかー」

「おお！？そっちもいけるか！仕事あけのカラオケもいいなー！」

徐々に（間違ってもJ。JOに、では無い）感化されて、仕事の舞台に着くころには、こんなマジ話した事なんてどっか記憶の片隅に追いやられて、やっぱり心の友になっていた。

うん、オタク文化って怖いね。こんなマジな話も流せるなんて、世界中の人がオタクになったら戦争とか無くなるんじゃないかね？とか柄にもなく、真剣に考えてしまった。

柊は、歩いていた。登り始めた月が照らす道。今日の仕事も、いつも通り。そしてその「いつも通り」は、彼女にとって、命のやり

取りを意味する。

——人殺しとの、戦鬪。

それに恐怖することはない。彼女の能力は、使い方を誤る…所謂、「自爆」をしなければ、ほぼ無敵と言っていい能力なのだ。たかが人殺しの一人や二人、文字通り相手にならないのだ。彼女が適わないと認めているのは、自分の体術の師匠であり、己が「師父」と慕うシンのみ。せいぜい榎田が互角に戦える程度。たとえ銃火器や刃物を持った相手でも、問題無く倒してきた。

「『運命』は、動くだろうか…。」

人知れず、小さく呟く。彼女は、無敵だ。少なくとも、それに近い。それでも、運命は彼女には変えられない。彼にしかできないのだ。今日は、榎田と行動を共にしている。それが彼らの司令塔たるシンの『最善』の能力の下した決断だったし、終自身もそれが一番だと思う。自分が説明には向いていないことくらい、きちんと理解している。榎田なら、一番分かりやすく（シンのように要点を押さえて、という意味では無く、心に残るように、という意味だ）説明できるだろう。

「私に、何ができるだろうか…。」

今日の彼の成長において、自分に出る幕は無い。だが、どこかに置いて、自分の力が必要になるだろう。その時に全力を尽くす覚悟は、出来ている。彼の力を引き出す為、育てる為なら、なんでもするだろう。

だが、今日は、その時ではない。
ならば。

——私はいつもの仕事をするまでだ。

分かれ道の直前で、立ち止まる。

今日の任務において、登場人物は三人。通行人と、殺人鬼と、自分。

分かれ道は三通り。事件を未然に防ぐ道と、起こった事件を途中で止める道と、事件が最後まで進行する道。

今回、彼女が選択するのは、二番目のそれだ。理由は簡単。通行人が気を失った状態なら、自分の正体を見られずに済み、尚且つ縛、無力化した殺人鬼を心ゆくまで尋問、いや、質問できる。彼女にかかれば、黙秘などは全くの無意味なのだから。

響き渡る、耳を劈くような悲鳴。

悲鳴が起こってから、きっかり四秒で、通行人が失神する。『予感』で見られたのはそこまで。それ以降は、実際に現場を見ないと分からない。この時点まで進めてしまえば、一つ目の選択肢には戻れない。だが、自分ならできる。その程度の自負はある。

——1、2、3、4！

ストップウォッチと大差ないレベルのカウントが終わった後、全力で角から飛び出す。視界に二つの影を捕える。一つの動かない影と、それに覆いかぶさるような蠢く影。

——まだ、間合いでは無い。

瞬間的に判断し、大きく一步を踏み出す。一步、といったが、そ

れは柊をはじめ、その世界に属する者にとっての、一歩だ。参考にしては数メートル、全力を出せば10メートルに届くかもしれない。それは一流の格闘家やスタントマンを大きく上回っているのではないか、と考えた読者の方も多いだろう。それは正しい。人間が、いや普通の人間が、そんな芸当を一動作で出来るはずはない。

だが、彼らはそれができる。その説明は、もう少し先になるだろう。なぜならば、彼女が…ひいては彼らが、そのことを理解していない為だ。あのシンでさえも、多少しかそのことを理解していないシン以上に理解しているのは、この世界にはただ一人だけだ。

——まだ気付いていない、いけるッ！

もう一步を素早く踏み出し、そのまま跳蹴りの態勢に入る。彼女の服装は、スカートにスパッツ、ニーソックス。体術、特に蹴り技を重点的に用いる彼女にとって、脚部の関節は最大限動かせるのが最低条件だ。その為にシンが勧めたのだが、これを見た榎田が鼻血を出した、というのは別の話である。

——ッ！また、だ！

跳蹴り自体は完璧だった。相手が気付いたタイミング的には、防がれるはずの無いものだった。

だが、防がれた。

またしても。

自分の、完璧を。

一度目はまぐれかと思ったが、もう二度目。まぐれや奇跡では済まない。

——こいつは、本物だ。私と同じ、この世界に属する者だ。

「ぐおッ！」

防いだ、と言ったところで、全体重を乗せた跳蹴りだ。全体重を乗せた、というのは分かりやすい表現だが、この場合は適当ではない。ダメージに直結する運動量において、重量の並び変数となるのは、速度。

この速度が桁違いである以上、与える運動量はそれに比例し、やはり桁違いだ。

両手を交差させて完全に交叉させて防いだにも関わらず、結構な勢いで吹き飛ぶ殺人鬼。だがその体制は崩れておらず、すぐに次の行動が起こせる体制。

——ん？これは…？

相手が自分と同じ世界の者であることを認め、油断なく相手の動きを警戒しながら、かすかな異和感に心の中で訝しむ。

——思ったほど、吹き飛ばない？…蹴った感触が…重い？

今まで感じたことの無い違和感。疑問。それは、柊にそのまま相手を畳み掛けることを躊躇させた。これは通常正しいことだし、戦場に身を置くものとしては常識でもある。相手の武装、素性がわからない以上、突っ込んでいくのは自殺行為だ。

だが、それはあくまで、通常の話だ。

彼女らの世界のことではない。それは、彼女の大きな誤算であっ

た。

二日目（火）　　ゝ開戦ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

二日目（火）　　ゝ呪詛ゝ

「ちっ…おんなア…またかア…」

「貴様のような奴と何度も会うのは御免だ。今日で終わりにしてやる。」

とりあえず売り言葉に買い言葉を返し、通行人の意識を横目で確認する。四〇代程度の会社員だろうか。意識は完全に無いようだ。眼球運動と口の開き具合から、断定する。この技術は、シンから教わったもので、毎度、と言うほどではないが割合頻繁に使うため、かなり上達した技術だ。

「まア…その野郎はもうつまんねエしなア……」

「それについては同感だ。共感は、しないがな。」

そのまま目を戻し、相手の様子をつかがい、全力の戦闘態勢にギアを入替え、

——ッ！！！！

激しい頭痛と吐き気に襲われ、目を見開いた。

（な、なんだこの男…！！！！）

それは、彼女の『異能』による効果、もっと詳しく言えば、自爆。彼女の異能、『読心』の。

彼女の『読心』は、文字通り人の心を読む、という能力。相対した敵の行動計画思考に始め、反射的思考、感覚思考、場合によっては記憶さえも読み取ることができる。

事務所に入り、シンに教えを請い、実戦をこなしてきたとはいえ、中身は一人の少女に過ぎない柊に耐えられたのは、一分にも満たなかった。そんな自分を恥じることさえできないほど、狼狽していた。

殺人鬼が最初の行動を起こす前に、柊は背中を向け、助けるべき人と、捕えるべき相手を放り出して、逃げ出してしまっていた。

「若大しょー。そんなにきよろきよろすんなよー。かえって怪しまれっぜー。」

「てか、リヨウさんだけで十二分に怪しいっすよ。」

いや、あやしきレベルで言えば、俺の一〇倍と言わないレベルで心の友の方が怪しい。だってさあ、中学生と言われても全く違和感がないような、というか小学生と言われても誤魔化せそうな人間が、ものすごい髪染め方して、タバコ吹かしてんだから。もしかしたら傍から見たら俺は「なっていないガキの周りでオロオロする兄」みたいな感じに見えるんだろうか。

「さて、と…そろそろ時間だ。」

「あ…ポイ捨て…。」

「あ、わりー。拾っといってくれ。そろそろ…始めるからよ。」

そういつて、唇を右端だけ釣り上げ、目を凝らしたような、しかめたような、そんな表情を作りだす。…文章にすればそれだけなのだが、明らかに、それだけでは無かった。

空気が変わった。ありていに言えばそんな感じか？まるで空気が

電気を持ったみたいにな、某ビリビリ中学生と向き合ったみたいにな
レッシュャー。

「…あ、あの…」

「わり、ちよつと今は楽しくおしゃべりするヨユーはねー。車全
部見てっから。」

そついう心の友。目は、確かにすごい勢いで眼球が動き回り、顔
は道路に向かったまま一向にぶれない。…コイツ、もしかしたらマ
ジで全部車見てんのか？確かに人を傷付けるものが見分けられるん
なら、車みてりゃー事故は防げるだろーが…。きつくね？

「んー…。ねーな…。」

「ん？ちよ、オイあれ！！！」

響き渡るクラクション。明らかに違反のスピード。危なげな運転
…っておいおいいいい！！…どう考えても突っ込むのあれだろ！
？なんでこいつそんな悠長に構えてんだよ！おまえなんか分かんない
けど超能力者じゃないのかよ！？

「とりあえずあれだろ行くぞオイ！」

「おい、ちよつと待てあれじゃない、別の…！！？ッ！」

俺からわずかに、いや結構遅れて、チビガキ（心の中で格下げ）
が走り出す。かなりのスピードだが、俺の方が早い。っておい、俺
の方が早くねーよ、あつという間に並ばれたよ、抜かれるよ…。

「あの車の後ろだバカ！バーさん抑えてろ！！！」

「えっ、あ、おう！？」

は？後ろ？と思った瞬間、気がついた。暴走車は一台じゃなかった。後ろの車の影から、ものすごいスピードで出てきた車が一台。おいおい、俺の早とちりかよ！ってか、バーさんってのはアレか！？

「おk、まかせろっ！」

「うっし！全開で行くぜ！！！」

言われたことするのは得意だよ、ヘタレって！万引きは無いけどピンポンダッシュならさせられたことあるしなあ！俺の早とちり車が通った直後、一体の人形がその気流に飲み込まれ、道路に落ちる。それを取りにあわてて飛び出す少女。追いかけようとする老婆……とここまで〇・三秒。んー思考の世界は自由でいいねー。

「バーさん、ちょっと動かないで！」

「ま、孫がつ、あ、あああっ！！！」

「まかせなバーさん！！！」

バーさんのところで急停止、車道までは一五センチ。ヘタレの俺では、それで限界。ガードレール有るけどそこに突っ込むのは出来なかった。無理無理。

だが、隣のチビガキはその距離を全くビビらず、というか勢いを緩めるどころかさらに加速して、そのままガードレールを低空飛行（この場合は跳躍、かな？）で飛び越える。そのまま少女に突っ込む。え？少女を助けるヒーロー役はいいのか、って？いや自動車だよ？無理無理死ぬ死ぬ無理無理。心情的には、超絶ヒーローの力ッコよさくく越えられない壁くく身の安全、って感じだよ。これは普通だよな？

「う、うっうー！」

「じつとしてろよお嬢ちゃん！！！」

「ふ、ふあい！」

「あ、ら、よつと！！！」

右手で少女を抱え、左手を地面に伸ばして人形を拾う。そしてそのまま体を半回転、足を曲げてタメを作り…ってオイオイ！！！！そのまま走れば逃げられるだろ！！！！

「どおりやあああ！！！」

メゴキヤアッ！

まあ文字にすればそんな感じの音が響いた。何の音か、たとえばそれは見事な回し蹴りが炸裂した音。車のバンパーの真正面、ちょうどナンバープレートのあたりを盛大に凹ませた。ネジが何個か吹っ飛ぶ。ごめんね道交法。

「ちいッ！！！」

「ふ、ふあ！？！」

「え、えええ！！！！？」

蹴り足のめり込んだ個所を足場に、一呼吸ためた後、その力を開放するチビガキ…ってかおい、お前ホントに人間か？やばいよ何メートル跳んでんだよ、そのままこっちまで帰ってきてんじゃねーよ。こっちくんな。

「くそっ！若大将、ナンバーだ！！！」

「え？な、何？携帯？」

「ああ、ちがーう！！！」

なんか良く分からん指示（基本的にヘタレ、この場合はパシリかな、とかは抽象的な指示に弱いのだ。だから、パシリに言うときは「うまいもん買ってこい」とかじゃなく、ちゃんとした商品名を言おうね。お兄さんとの約束だ。）にとりあえずフリーズして、凹んだ車（多分心も凹んだだろう）を見送る。

…。

……ん？

なんで普通に見送ってた俺。いや何であれだけの事されてそのまま車が走り去ってた？普通止まるだろ。てか完全にひき逃げじゃんこれ。被害は明らかにあっちが多そうだけど。

「…わーかだいしょー、車のナンバーだよー。そしたら身元探れるかも知れないしょー。」

「あー、なるほど。把握。」

「もー。ブンブン！」

横に着地して（無傷っぽい）、少女をおろしてやりながら（やっぱり無傷っぽい）、チビガキがおどける。やべ、ちよつと似合ってる。女じゃなくても有りなんだなこのネタ。いや、俺はしないけど。と

いうか、お前は頑丈だな？未来少年なのかその体は。

「まーそれは蹴りでナンバープレートを落とせなかった俺にも責任はあるしなー。まー、おあいこってことかなー。」

「いやいやあれはアクロバットの一環だったんじゃないんかーい」

「…そのエア乾杯はウケないぜ若大将……。」

「あ、あの…」

突然割り込む声に振り向く俺ら。というか、完全に無視してたね、ごめんねバーさん。

「孫を、ありがとうございます…。なんとお礼を言っていていいか…。」

「ああ、お礼ならいつか、困ってる人でも助けてくださいなー。ウチのダンナがそう言えって言ってるんでねー。」

「あ、ありがとうございます…。」

おお、チビガキ、なんかかつこいいぞ。マンガのヒーローみてーだよ。てか、その身体スペックがあるならまあヒーローであって然るべきだな。もはや義務だな。

「んじゃ、いくぜ若大将。んじゃ、気をつけて帰れよなー！」

「あ、ああ、じゃ、ども…。」

さわやかに挨拶して歩き出すチビガキと、どう見てもおどおどで何度も頭下げてそれを追いかける俺。絵的にすごいかつこわりい。だってチビガキ見た目中学生だもん。俺の方が年上に見える分だけ俺の情けなさがアップしてるよ。

とかまあ、そんなことを考えながら、わりかしみじめな気持で初仕事が終わった。

…ただ。

「ありがとう、お兄ちゃん達…！」

最後の少女に掛けられた声だけは、ちよつと心に残った。俺はお

まけで、その9割はチビガキだろう。もつと多いかもしれない。てか「達」ってついてたことにちよつと驚いたくらいだし。

でも、この仕事は、いい仕事なのかもしれない。って。ちよつと思つた。

「うーむ、まだ俺のストライクゾーンでは無いなー。」

…こっちの一言を、黙って聞こえなかった事にしておけば、の話だが。

二日目（火）　　ゝ呪詛ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

二日目（火）　　ゝ分析ゝ

「…ああ、榎田君。お帰りなさい。」

「おおダンナ、今帰ったぜーい。で、それは？」

「後で説明しますよ。報告もその時お願いします。木林君も、お帰りなさい。」

「あ、ど、ども…」

「お疲れ様でした。今日はもう帰っていいですよ。」

「え、ええー…。」

会話三文目でこの「帰ってくれ」宣言ってどうよ。脅迫して雇ってるとは言え、もうちょつと人間扱いされてもいいんじゃないやありませんか？ 基本的人權ってこの国補償してくれてますよね？ 僕、人間ですよ？

「え、えつと…」

「もう大分遅い時間ですしね。ご飯は榎田君に…おごってもらいましたね。では。」

「その節はどうも…。」

「妹さんも心配するでしょうしね。お疲れ様でした。」

思っていると言えないのが、ヘタレの性。完全に笑顔のメガネ、楸シンに押し切られてすごすごと帰る…というか、事務所にあがらせてもらってすらいないんだが。文字通り門前払いだ。きっとこの言葉を作った人は、こんな目にあったことが有るに違いない。

「んじゃあ、これで……。」

「ええ。明日は森羅のお嬢さんとデートですね。楽しんで来てください。」

「……。」

最後に嫌な台詞（折角忘れていたのに……）を吐いて、ドアを閉める。要するに締め出す。まあさっさと帰れるに越したことはないし、いいけどね。はあ、明日もこのすごい非日常が続くんだよなあ……とか、あれ？もともと殴られたりしてるんだし、たいして変わりのないんじゃない？とか考えたり、いろいろとブルーな事を考えながら、まわれ右して家路に就く。

——振り返る動作と、閉まるドアのちょうど間に見えた、楸が意図して隠すよう、庇うようなさみしげな一人の少女の後ろ姿は、気のせいだと思う事にした。

ああ…今日は帰ったらどうなるかな…。まあ…

「あたまをすぐかばったほうがいいよ。」

今日の事務所で最後に聞いた言葉は、未来を『予感』する少女が帰っていく俺の後ろ姿に投げかけた、この上なく不吉な一言だった。

「……。」

「さて、と……。」

「ダンナ、こりゃー、どういうこった？あのレンがこんなになつてるの見るなんて、いつ以来だよ？仕事でしくっただけじゃーなんだろ？」

「ええ、まだ私も聞いていませんね。帰って来てからずっとだ

んまりでして。話してもらえますね、柊さん。」

事務所のメンバーが全員一堂に会するのは、珍しい事ではない。だが、ここまでの重苦しい雰囲気は久々のものだった。いつもは軽口ばかりの榎田が口を噤み、笑顔を絶やさないシンの口元がやや引き締まり、もう寝ている時間のパルカも起きている。

「…ああ、話す。話さなければならぬだろう。」

ぼつりと話し始めた柊の声が、少しだけ震えていた事には、全員が気付いていた。だが、この中にはそれを論う様な大人げない者は、一人もいなかった。この場にはいない某ヘタレストなどは、空気も読めずに突っ込んでしまっていたかも知れないのだが、その事を憂慮したシンによって既に帰されている。

「あんな思いをしたのは、実に久しぶりだったのでは…。少し、いや、少しとも言えないか…。取り乱してしまった。すまない、パルカ。変えられた運命を、変えられなかった。」

「ううん。れんがきにすることじゃない。うんめいって、そういうもの。」

「ありがとう。あんな、というのは、今日戦った相手の事だ……。」「

柊はすべてを話した。襲っていた相手の事。自分の攻撃が防がれた事。そして一瞬躊躇した後、自分の『読心』で読み取った、尋常ではない殺気の事。

「なるほどな…。要するに今回の敵は強いって事だな。おっけー。」

「ああ。攻撃の時も、うまく説明できないが、何か違和感があつ

たように感じる。とにかく慎重に戦うべき相手だ。師父にも注意を促されていたにも関わらず、不甲斐なくて申し訳ない…。」

「いえいえ、その事はいいんです。初めて聞くでしょうし、聞いてもあまりピンとこないでしょうから説明しなかったですが、一応説明しておくべきでしたね。私の落ち度です。」

「師父は、何か掴んでいたのか…?」

「ええ、若干、というところに過ぎませんがね。相手の中に『姓無』という集団がいる、という程度です。まあ『姓無』については、知っておく必要がありますね…。」

眼鏡の位置を直しながら、ふと思いついたように「ちょっとお茶を入れてきましょう。パルカちゃんも眠いかもしれませんが、今日はまだ起きておいてくださいね?」と笑顔で言い残し、給湯室（小さい事務所だが給湯室くらいはあるのだ）へと去っていくシン。「パルカもてつだう…」と言ってパルカもそれについて行ってしまうと、残された二人の間に、重苦しい沈黙が漂う。

「……レン…どうよ?」

「……質問は分かりやすく、具体的にしてくれ…。」

先に沈黙を破ったのは、榎田だった。曖昧極まりない質問は、彼がこういった雰囲気は苦手で、何を聞いていいか分からなかった所為だ。

だが、そんな彼が先に口を開いたのは、感じ取ったからだった。

—— シンのダンナは、ここで俺に相手の情報を聞き出しておけ、っていつてんだよね…。

柊がシンに好意を抱いているのは、誰が見ても（少なくとも榎田から見れば）一目瞭然だ。それは愛、恋というよりは憧憬に近い

ものだろう。そして柊は、その相手に対して弱みを見せることを嫌う。「自分が席を外す間に、柊の話しづらい情報をすべて聞き出してください。」というアイコンタクトは、『読心』など無くても、榎田にしっかりと伝わっていた。

「んー、じゃあ、もし『異能』無しで戦ったら、勝てたと思うか？」

「……仮定の質問には答えられないな。」

「……ははっ。どこの政治家だよおまえは。」

「……分からない。」

「はあ？分からないってどういうことだよ。」

接客用テーブルに両肘をついて、頭を抱えるような姿勢から顔を上げることなく言い放つ柊に、榎田は眉を顰める。柊は、自分より頭がいい。その柊が、「分からない」と判断した。

——つまり、なんかレンには、理解できねえコトがあるってことだな。それも、シンのダンナには言えないような、ぼんやりとしたコトが。

「蹴りが防がれた時……違和感を感じた。なにか、重い……ような。吹き飛ぶ角度も何処か異常だった。アレの仕組みが分からん。」

「見た目より重いつてコトか……。まあ、それなら俺が仕留めてやつから心配すんなやー。」

「……本当の意味で手合せしてはいないから、相手の体術の程は分からない。」

柊と榎田では、戦闘のスタイルが違う。柊は女性にしては長身で、手足も長い。それを生かした体術を使い、体重の不足分を連打で補うスタイルだ。だが、元々小柄な榎田には、それは真似できないス

タイルなため、違うスタイルでの戦闘を行う。

まあ、真に恐ろしいのは、各々に合わせた戦闘を自在に教えらるシンなのだが。

「ま、なにせよ今回の敵は厄介だなー。」

「…お前は気楽でいいな。」

「お待たせしました。では、話の続きと参りましょうか。」

シンとパルカが帰ってきたのは、柊が大きいため息をつき、それと同時に重苦しい空気が拡散したのを、ちょうど測ったようなタイミングだった。

実際に測っていたのかは、シン本人しか知らないが。

「ぐっうー！！！」

玄間を抜けると、そこは花畑だった。いやマジで。

…油断してたよ。認めますよ。「あたまをすぐかばったほうがいいよ」つつたつて、妹が突っ込んで来てからだと思うよね普通。流石の俺もさ、これは予測してなかったよ。

玄関あけたら金ダライ降ってくるなんて。

信頼と実績の金ダライだよ。確かにさ、テレビで漫画で、実写ア

二メ問わず幅広く用いられちゃいるよ。でもさ、こんな理不尽なのもってどうよ？しかもうちの金ダライテレビとかで見るほど大きくないから思いつきり角が当たってんですけど…。

「あ、あ、あ…」

「ん、んー…あ、にーさん…？お帰りなさい…。」

膝から完全に崩れ落ちてうずくまる俺の頭の上から、さっきまで寝てましたよー感バリバリで声をかける妹。何でそんな冷静なんだよ…って言うまでもないか。どうせお前がしかけたんだろ…。

「お帰りなさいはともかく訳を言え訳をー！」

「夜中に大声上げないでください…。だって兄さんが帰ってきたらすぐ分かるじゃないですか…。」

俺、沈黙。いや、ちょっとネタのために無理して（こういうときに体を張ってしまうのはいける人の悲しい性である）大声出したせいもあるけど、それよりなにより、我が妹よ、今何と申したか？しかも何ぶつぶつ「兄さんお風呂入れないと…」とか「夕飯は食べてきたんですか…」とか言ってるやがりますか。

「…お前もう寝ろ。相当きついんだろ…。」

「でも…にーさあん…」

「いいから寝ろ。」

「お風呂はいつてくださいね…ふあ…。」

パジャマに良く似合う大あくびをして、ふわふわヘアをひるがえして寝室に入っていく我が妹。ってーか足取り危なっかしいな。あいついつもあんな夜中弱かったっけ？確かに俺と違って早寝早起きの健康優良児だけどさ。

「んつと…とりあえず、今日はもう眠いな…。寝るか……。」

ん？妹が難か言ってたって？ノープロブレムノープロブレム。ノープロブレムは問題無いつて意味ですよお客さん。一日はいらなくたって死なねえって。

こうして俺の、充実していたかどうかはわからないが、人生でかつてないほど充実していた一週間の、二日目が幕を閉じた。

ちなみに、明日の人生初デート（になるかもしれない。人生ポジティブシンキングが大切だ。そこ、現実逃避とか言わない！）については、明日考えることにした。

ちなみに余談だが、森音がひたすらに眠そうだったのは、彼に作った朝食のためにいつもより早起き、さらに言えば心境的に必要な上に早起きしてしまったこと、「帰りが遅くなる」と連絡を受けたにも関わらず待ってしようとしたこと、眠気を堪え切れなくなり、それでも兄を出迎えたい、という葛藤の末に、呼鈴音代わりに大きな音を立てるようにすれば起きられると考えたこと、金盞なら漫画好きの兄の好み（？）に合うのでは、と眠い頭で必死に考えたこと、による。一重に森音の俊也に対する思いの産物なのだが、それを彼が知ることはない。

例え知っていたとしても、彼が彼女に感謝するかどうかは、また別問題であるが。

二日目（火） 〽分析〽（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

三日目（水）　　↓潜入↓

さて、やってきました水曜日。いつもなら若干心躍りますよ、俺。

…？

ああ、説明してなかったね。うちの学校、水曜日は五限目上がり、すなわち一時間分早く講義が終わるんだよ！こちら辺が馬鹿高校の有難いところだね、いやマジで。運動部（馬鹿高校の例にもれずそこそこ強い、らしい）がゆっくり練習できるように、という配慮らしいが、我ら帰宅部にとっては公然と早退できるも同然。

これだけ言えば、さぞや楽しく思えるだろうし、世の真面目な進学校に通う高校生の諸君にとってはパラダイスに聞こえるかもしれないが、ところがどっこい（死語）、そこは馬鹿高校。いわゆる「ちょっとジャンプしてみろ」とか「私刑」とか言われることはこの日に起こることが多い。みんな遊びに行くため、お金持ってる事が多いし。

だがしかーし！それさえぐぐり抜けてしまえば遊び放題！！！！おいしい一日には変わりがない！！ビバ（やっぱり死語）、水曜日。

……さて。

ここまで聞いて、勘のいい人はお気づきになられたことだろう。最初の一行に「いつもなら」って入っていた事に。

「はああ……。」

授業中、特大のため息をつく俺。今日は、遊びに行くことはでき

ない。行きつけの喫茶店で愚痴を聞いてもらうことも、ゲーセンでハイスコアたたき出す事も出来ない。まあ、それはいい。（人の人生初デートだったのに……）

そう、今日はデートの予定なのである。それだけ聞けばリア充爆発しろ、って感じたが、これはいわゆる出来レースならぬ出来デートである。だってさ、どんだけ他人が絡んでんだよ。楸のメガネからはなんかまた指令っぽいメール来てたしさ…。もうちょっと、こう、なんつーか、初めてには希望を持っていたかったんだがなあ、俺。

（まあ、ポジティブに考えて行くしかないか…）

そこ、間違っても「逝く」じゃないからね。そこ重要だよ。そんなメタなことを考えながら、昼に届いたメールを開く。

件名：今日の放課後

本文：楽しみにしています！放課後俊也さんの教室の方に行きますので、待っていてください！

「ま、美人とデートだ、デートっ！！！」

半ば…いや四分の三くらいやけくそでそう口走り…って、あ、

「キバヤシー、舞い上がっているのは分かるが授業中だー、自重しろこのやろー。」

「あ、いえ、すいません…。」

運悪く教室に残っていた不良の目つきが痛い。お迎え（地獄へのじゃないよ）が来るまでは教室でこっそり絞りあげられてしまう

んだろうな…。

でも。

もつとも鋭い視線は。

数学教師（独身・37歳男）の視線だった。

彼——楸シンの朝は、実はかなり遅い。勿論早く起きようと思えば起きれるし、二日程度であれば思考力を鈍らせること無く覚醒状態を保つことが可能だ。だが、体力の回復、仕事の能率を考えた場合、この夜型の生活が最も効率的であるためだ。

（私の、『最善』もまあ微妙なところで役立つものですね…。）

意識の覚醒と同時に平時の思考力を取り戻した頭で考える。と、同時に目覚まし時計を止める。彼にとっては不必要な大きな電子音は、彼の起床を「彼女」に教えるため。

「おにいちゃん、ごはん、できた。」

「ええ、ありがとう、パル力ちゃん。今行きますね。」

ドアの向こう側から聞こえる無機質な声。若干の胸の痛みを感じながら、それを声には出さずにいつものトーンで返事をし、身支度を整える。慣れたもので三分も掛からずにいつもの恰好を整え、事務所兼ロビーに向かう。

（あと、五日…。どこまでもがけるでしょうか…。）

完全な負け戦——例えば、変えられない運命との対戦——であれば、ある意味気軽だ。どうにもならないことが既に分かっているのだから。それに比べて、ほんの僅か勝ち目がある方が、余程の重圧がかかる。

だが、シンはその事を心地よくさえ思っていた。

（勝たなければならないのだから、勝ち目がある方がいい。）

諦める、という選択肢は、彼の中には無かった。勿論、過去の偉人のように「我が辞書に不可能の文字は無い」というわけではない。寧ろ諦めの早い、割り切った人間だと彼は自分を分析している。

だが、妹の事だけは別だ。一切の妥協を排し、常に最善のみを選択してきた。最善が気に食わなければ、それを破ろうと足掻いたことだって、何度となくある。そして、これからそうするだろう。

——五日後訪れる、その運命の時でも。

そんなことを考えながら事務所兼ロビーのドアを開け、朝食に使うテーブルを見やる。その上には、いつものようにパンとスープの朝食（パルカにとっては昼食）と、スクランブルエッグ。

「おお、今日はスクランブルエッグですか！どんどんレポートリが増えていますね、パルカちゃんは！」

「めだまやき、しっぱいして。まえにおにいちゃんがしてくれたみたいに見てみた。」

無表情、だがその中に僅かな羞恥と自慢が存在するのが、シンに

は分かる。頭をなでるときに、少しだけ顎を引き、嬉しそうに目を細める事も。

「…将来は、いいお嫁さんになるでしょうね。」

「！……。」

その瞬間、僅か、ほんの僅かだけ存在していた感情が、スイッチを切ったように抜け落ちる。そのまま無言になり、撫でるシンの手を振り払ってテーブルの席につく。

「ぱるかは、あといつかしかいられないから。およめさんにはなれない。」

「そんな事ありませんよ。まだ僕を信じてくれませんか。では、いただきます。」

行儀よく挨拶して、食べ始めるシン。同じように合掌し、食べるパルカ。二人は無言のまま、テーブルを囲んで朝食を食べる。お世辞にもいい雰囲気とは言えないが、だからといって先の会話をしない訳にはいかない、とシンは考える。

（パルカちゃん自身に、生きる意志がなければ、どうしようもない。）

彼にしては珍しい、なんの根拠もない理屈だが、ある意味真実だろう。だから彼は何かにつけて、彼女に対して将来の話をするようにしていた。そして、ほんの僅かでもその運命の情報を手に入れようとしていた。

「んーそれにしてもおいしい。流石はパルカちゃん。料理を教えた甲斐がありましたねー。」

「……じかん、いっぱいあるし。」

パルカは、例の運命を見た日以来、学校を休んでいる。その為時間が空いてしまい、その暇つぶしに、と教えたのが料理である。最初のころは包丁を使う時など危なっかしい時も多々あったが、数週間もすればそれも無くなり、今ではシンは任せて寝ているだけで料理が出てくる、という有様である。才能、というやつだろう。

（まあ、時間ばかりあると人間ロクな事を考えませんしね。）

その作戦、というか思惑というか、は、成功だと言える。料理は彼女の生活の、事務所メンバーとの関わりに次ぐ楽しみになっている。事務所のメンバーと関わると嫌でも『予感』の力を思い出させられるため、それをひと時だけでも忘れられる時間は、彼女の精神を保つ上で大きな意味を持っていた。

ちなみに、シンが早く起きない理由の一つも、シン自身が、自分が暇があればロクな事を考えないと自覚しているためである。

「さて、と。ごちそうさまでした。」

「おそまつさまでした。あとかたづけ、する。」

お粗末さま、なんて教えたかな？と若干首を傾げながら、地下の機械室へと向かう。一つは、『姓無』の情報を、少しでも仕入れるため。本人たちの足跡が見つかるとは思えないが、もしかしたら被害者の話くらいなら何処かに転がっているかもしれない。二つ目は、前日と同様、決戦の場の情報の仕入れだ。

「おっと、決戦の場と言えば。指令を忘れていましたね。」

ふと思いついて、携帯電話を取り出し、一通のメールを打つ。

件名：無題

本文：今日のデート、楽しんで来てくださいね。それと、楽しむのはいいのですが、できれば森羅のお嬢さんのお家まで入って、いろいろ見てきてください。親御さんがいないなら好都合です。後でいろいろと教えていただきますので、話した内容一言一句、見た内容は天井の染みの数まで覚えてきておいてくださいね

最後ににこやかな顔文字を加えて、送信。

「さて、今日は、榎田君、柊さんと特訓ですね…。二人との稽古は久しぶりですねえ…。」

シンはそう呟いて、パソコンの電源を入れた。

「木林さ〜ん、お待たせしました〜、ってうわ〜！」
「あ、ど、どう…も…。」

ちょうどルリ女史が教室に入ってきたとき、俺は不良のリーダーに胸倉掴まれて持ち上げられて足ぶらぶら状態だった。ちなみにほぼ無抵抗。あの状態って、動くと余計に痛いんだよね。

放課後、ソッコーでトイレに立て籠もろうとしたが、努力空しくあっさりと捕まってしまったんです、ハイ。ちなみにその時先生まだ教室いたんですが。「はは、ざまあ」みたいな目して何も言わずに職員室に帰って行きやがった。

「も。リュウさん、なにしてるんですか、弱い者いじめは駄目ですよ！」

「あア？ってルリお嬢、どうしてここn」

「木林さんとこの前のお礼に、ってリュウさん！」

「てめえ、どういっつもりだコラア！！！」

「あ、いえ、その、ふぐっ！」

某毒入り高級魚の名前は、お腹に一発貰った音です。いいパンチしてるじゃねえか。でも、これ以上はやめときな。死ぬぜ。主に俺が。

「とくに、かく、今日は木林さんにお礼をするから、皆さんは帰ってくださいな！」

「…ちっ、じゃあな。変なことしたらタダじゃ済まさねえからな！」

「あ、ちよ、ゆっくり、いてっ！」

からな！らへんで釣り上げてた手をぱつと離され、そのまま尻もち着地。結構痛い。

「大丈夫ですか？も、リュウさんも悪い人じゃないんですけどね。」

「ええ、あ、ありがとうございます…。」

あれが悪い人じゃなかったらいったい誰が悪い人なんだよ、と心の中でツツコミ、そもそも今の宙づりの計もあんだのせいじゃね！？とも心の中でツツコミ。いや、別に宙づりはこの娘の所為じゃ無くな？という君にもツツコミ。それでも口には出さないのがヘタレクオリティ。

「で、あの…。」

「はい、では、さっそくいきましょう！」

「え、どこ？」

「もちろん、私の家です。」

「……。」

いや、あの、親御さんたちいないかも、とか言ってますでした？いいんですか俺なんか上げちゃって？というか、不良さんたちの目線的に出来れば上げないで頂けると嬉しいんですが…いや、イケメンメガネの指令的には上がらないとまずいのか？

「では、出発です！」

「え、あ、ちよちよちよっ！」

ほわほわげげけオーラに似合わない早さで俺の手を取って、そのまま歩き出す…てちよっと待って、腕は組まなくてもええまず？見つかるかとホントに殺されかねないので。とりあえずしっかりつないだ手を離す気は無いらしい。ああ、見つかったらフルボッコだろうな…とか思いながら、俺は手を振りほどく事が出来なかった。

もしかしたら、やわらかいその手の体温が、ほんのちよっと気持ち良かったからかな、とか、柄にもなく考えてた。

廊下の角をまがって不良がみえた瞬間、速攻で振り払っちまったけど。

三日目（水）　　〵潜入〵（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

三日目（水）　　〈特訓〉

「はああ！」

「ッ！」

裂帛の気合を込めた回し蹴りは、柊。シンの頭部を狙う、強力な一撃。そしてそれに対処するその隙を狙うのは、榎田。滑り込み、短いロッド――20センチ程度だろう――で脇腹を刺突しようとする。……だが。

「うあッ！」

「甘いですね。柊さん、上段の回し蹴りは確かに必殺ですが、防ぎ易く、足も自由になる。榎田君の援護を狙うなら中段か下段がベターですね。」

「くっ、まだ！」

「榎田君、そこは引くべきです。『異能』相手は一撃が命取りの可能性も考えられますからね。」

回し蹴りを両手を交差させて受け止め、柊を前蹴りで吹き飛ばす。その反動を利用して跳び退り、小柄な体格を活かして懷を狙った榎田から距離をとる。榎田のロッドは空しく空を切る。

武器の空振り、という行為は、実は常人が思う以上に大きな隙となる。短いロッドという武器のチョイスはそれを最小限で抑えるためのものだが、それでも隙が生じない訳ではない。

「いつて！」

「榎田君はこればかりは何度言っても治りませんねえ。」

空振りの隙にシンが投擲したゴム玉が、榎田の額を打つ。ちなみ

にシンが本来武器として用いるのは鉛玉であり、使いきれば硬質な物を探して用いる。ここでは訓練だから、ダメージが残らないようにしてある。

「くうう…。」

「おおおッ！」

「当たるかも、で攻撃をしないでください。空振りには命取りですよ。鉛玉なら死んでいます。」

痛がる榎田を横目で確認しつつ、柊の跳躍りをサイドステップで回避する。ちなみにシンの鉛玉、所謂指弾は本気になれば銃弾並の速度、威力を出すことが可能だ。死んでいます、というのは、決して誇張表現では無い。

「まだまだッ！」

「おお、いい感じですが、もう少しキレが欲しいですね。」

跳躍りのまま蹲る様な体制から、続けざまに足払いを放つ。が、一呼吸早く跳躍したシンは、そのまま壁に垂直に着地し、反転して柊に跳躍りを返す。両手で防いだにもかかわ変わらず、体重差で圧倒されて吹き飛ぶ柊。

「さあ、もうギブアップですか？まだ二時間も立っていないですよ？」

息を切らして立ち上がる柊、榎田。

「まだまだ…」

「無論。」

ここまでのやり取りで十分分かっただろうが、彼らの身体能力は、常人を超えている。シンの考察によると、能力に目覚めたものは、何か別経路で体にも変化が生じるのだ。恐らく、脳に存在する体のリミッターが外れるのだろう、と彼は結論していた。

この考察は百点満点ではないが、概ね正解である。彼は間違いなくこの世界では最も『異能』に対して理解が深かった、と言えるだろう。

そして、「敵の殺人鬼が柊の攻撃を防いだ」という事から、今回の敵——『姓無』も、『異能』の使い手である事まで、推測していた。

だがしかし、シンは知らない。柊の感じた、「重い」という違和感の事を。

だから、『異能』とは、完全に精神的、つまりは質量的に関与しないものだと考えていた。精神的な能力の戦闘に於いて、柊の『読心』は、最強。なぜなら、先に相手の『異能』を心の声から読み取ることができるのだ。どんな『異能』が存在するか分からない以上、このアドバンテージの大きさは計り知れない。

だが、それは精神的な話だ。質量的——例えば『体の好きな部分を自在に重く出来る』や『体の好きな部分を自在に硬く出来る』などの能力が存在すれば、その絶対的な身体能力に屈するしかない状況が考えられるのだから。

やばいよ。まじっすか。

どのくらいやばいかって言うと、もうやばい。まじやばい。やばいしか言えないくらいやばい。

だってさ、このテーブル、あれだよ。なんか良く読めない横文字のブランドだよ。で、ティーカップ。ちよつとセンスを疑う様な装飾過多な感否めないが、アンティークですよあんていく。なんでも。定団オープンザプライスっ！って感じ。極めつけは、上。上。上。あれですよ。シャンデリア。超豪華キラキラ。キラッ みたいな？

結論。…この娘、大金持ちの娘だよ。

「では、のんびりどうぞ。」

「…あ、ども……。」

どうしてこうなった。どうしてこうなった。

いや、分かってるよ。俺も。

まあ、話数挟んじやったから簡単に説明しちやおうかな。某有名掲示板風に三行で。

女の子、俺の手掴んで疾走。

電車で町はずれに移動。

でっけえ工業団地（みたいな建物）の横にある、大豪邸に躊躇なく連行。

…こんな感じ？

ちなみに、ちよつと思ひ返すと看板あったね、「森羅電気」って。はいはい、納得…は出来ないが、理解はした。ルリ女史、社長令嬢

ですよ。高根の花もいいところ、別世界の住人ですよ。勝ち組ですよ、ほんわか美人だし。

「…？どうされました？紅茶、お嫌いですか？」

「いえいえいえ慎んでお頂き申し上げますっ！！！」

「また」。そんなに緊張なさなくていいですよ。今日はお礼なんですから。」

慌てて紅茶を飲む俺。ころころと鈴が鳴るように笑うルリ女史。俺も一応笑っておく。頬が引き攣ってるの、自分でも分かってる。顔面神経痛みたいになってるね。

でも、そんな俺の微笑み（笑）にも、ルリ女史は満足してくれたようだ。ありがとう天然。華やかに微笑み（これが正しい微笑みだよ、うん）、自分も紅茶に優雅に口をつける。すげえよ、なんかお嬢様オーラだね。ってか、紅茶うめえ。ウチの妹の入れてくれるお茶も不味いわけじゃないが、何というか、ランクが違う。主に値段的意味で。

「さて、今日は是非何かお礼を、と思ったのですが、あいにく私、男の人にプレゼントとかした事が無くて。どうしようかと思っただんですが」

「いえ、迷うならしないでいいですよそんなの！」

「いえいえいえ！そうはいきませんよ！命の恩人なんですから！」

「！」ってついてるけど、お互い微妙なびっくり具合。ってか、ルリ女史すげえ。間延びした声を出しながら驚く、というなんか未知のテクニクじゃね？リト。スのこまりんみてえだ。ほわあ！みたいな。あ、俺はあのゲームプレイしてないけど。

「あいにくと家の影響で機械関係しか詳しくなくて…。バイトもそれですし…。」

「し、しん…じゃなくて、ルリさんは、バイト何なさってるんですか？」

しんら、と呼びかけたときに一瞬眉が顰められて、慌てて言い直す俺。なんか今機嫌損ねたら横に控えてる人に殺されそうだし。

…？

……！

よ、横にいつの間にか人が！こ、これ何て言うんだ、メイドさんじゃなくて、えっと、お手伝いさん？使用人さん？みたいな。やばいよ着物にエプロン。和製メイドだよ。でも何がやばいって、目つき。俺の横の人もルリ女史の横の人も、すげえ目つきが鋭い。多分ボディーガードとか兼ねてるだろこの人たち。てかいつの間に横に？紅茶持ってきたとこまでは分かってたけど、そのあと気配感じなかったんだが。

「バイトですか？バイトはですね。ウチの仕事のお手伝いみたいなものですよ。ちよっとネットワークの管理と、セキュリティチェック、パスワードロックの定期変更とかですね。えへへ、これだけは得意なんですよ、ってあれ？どうしました？ユキさんミキさんがどうかされましたか？」

「い、いえいえいえ？なんでもないですよ？」

「あ、お気になさらないでください。二人ともすごくお仕事できる人で、私と違ってしっかりされてるんですよ！」

につこりと微笑むルリ女史。会釈するユキさんミキさん。息ぴったり。なんか、某完璧で瀟洒なメイド和製版、って感じ。迂闊なことしたらおぜうさまのご飯にされちゃいそうな雰囲気。

「私のバイトの話とか聞いてもつまらないですよ〜、すみませ
ん〜、喋りすぎちゃっ」

「いえいえいえそんな事無いっすよ！？俺機械とか好きだし！昔
工場見学とか楽しんでたし！！！」

なんか俺必死なんだが。なんでお礼に連れて来られてこんな拷問
みたいな事されにやなんだクソ…とか思ってたら、唐突に顔が
ぱあつと輝くルリ女史。

ざわっ…ざわっ…じゃなくて！なんだ、何俺なんか地雷踏んだ！
？なんかおかしいこと言ったか？このまま命の危険なく帰れるんじゃ

「いいですね〜！それなら折角ですからウチの工場見て行っても
らいましょ〜！いろいろつくってるし、発電所もありますし！」

「いえ、なんかそういうのって不味いんじゃない？」

「私一応バイトだけ関係者ですし〜！大丈夫ですよ〜！」

あ、あー、また引つ張られるよー、走ってるよー。連れてかれる
よー。なんか和製（以下略）さんたちがお辞儀して見送ってるよー
…。

ふっと、ちよつと頭の中に響いた。

——話した内容一言一句、見た内容は天井の染みの数まで覚え
てきておいてくださいね

メールの文字が、まるで読み上げられたようにイケメンメガネの
声で再生される。ああ、アイツならやりかねん、ような気がする。
ホントに覚えんのかな俺。

——そういうことd

あーあーあー分かってる分かってる、人質は分かってるから！もーいーいーち脳内再生されなくていいっての！まあ、頑張つて覚えりゃいいんだろ覚えりゃ！それで人の命助かるんだっいたらやってやるうじゃねえか！

…。

「…ひ、ひろい…。」

「ここが入口からすぐ、一般人も見学可能の、第一区画の直接販売品の生産場です！」

「だ、だいいち…だと…！」

「はい！奥には工業用の第二区画、原発兼ねてる第三区画、立ち入り禁止区域の第四区画までありますよ！第四区画は無理ですけど、関係者なので第二、第三区画まで行けますよ！」

「……………」

え、これ全部？第一区画だけで体育館もはだして逃げ出すくらいあるんですか？

…挫折。頭の中の根性が、がつくりとor z字型に崩れ落ちた。

「さて、と…。」

タオルで汗を拭いながら、訓練場（実はあまり広くない。事務所のロビーよりも狭いくらいだ。その程度の限られた空間での戦闘が、一番応用が利く、と彼は考えている。）を後にする。ぐったりと倒れ伏した二人は放置だ。急所は外しているもののある程度のダメージは蓄積しているし、時間的にももう四時間にもなっている。だがまあ、放っておいてもそのうち回復するだろう、と彼は判断した。

（んー…そろそろ二人がかりでは私に勝って欲しいのですがね…。）

一応シン自身は一对一で自分が負けとは思わない。だが、『姓無』を要するテロリストと、その標的となる工場の警備部隊、三つ巴の戦いになった場合、自分は恐らく機械類の操作というバックアップに回る事になるだろう。その場合、直接『姓無』と対峙するのはあの二人なのだ。

（さて、一応『姓無』について今日も調べておきますか…。）

そのまま地下のコンピュータルームに向かい、電源を入れて、デスクにつく。昨日一応は調べつくしたのだが、もう一度調べて頭に叩き込んでおくのも悪くはない。

「……………」
「……おい、レーン、生きてるかー？」
「……………」

「へんじがない。ただのs」

「うるさい。」

「なんだ起きてんじゃねーか。」

床にへばりついたまま会話を交わす二人。横たわる一人はショートカットの中に一房の長髪を束ねた、スタイルのいい女性――柊。仰向け大の字になっているのは、ものすごい髪の色をした小柄な少年――榎田。

「…やっぱ、ダンナはつえーな。」

「ああ。師父だからな。」

「……お前の『読心』でも、やっぱ無理か？」

「……師父は、そうしてくれているからな。」

柊の『異能』は、『読心』。相対した相手の脳内を読み取る能力。一時期はその力の制御が分からず、道行くすべての人の声を無差別に聞き入れてしまい、ひきこもる様な生活になった事もある。だがシンと共に過ごして、彼によって、ある程度その仕組みを説明されたのだ。

『読心』で重要なのは、読み取る相手との距離感。単純な距離ではなく、心の距離感なのだ。相手をより近く感じるほど、深く強く心を聞いてしまう。相手との心の距離を一定に保つ事が、彼女の能力を制御する唯一の方法だという事を、シンは発見した。それによって柊は普段通りの生活に大きく近付いたのだ。

（師父には、感謝してもしきれない…。）

それを実践するにあたり、シンは柊を一度完膚なきまでに叩きのめした。単純なゲームから実際の戦闘に至るまで、ありとあらゆる手段で、だ。心を読まれながらも、シンはただの一度も負けなかった。

た。その結果ある時、柊は突然シンの心の声が聞こえなくなったのだ。

この人は、遠い。雲の上の存在だ。

そう認めさせたのだ。それは、柊を救い出す光となった。元々感情の起伏の少ない方だったが、このときだけは号泣してしまったのが気恥ずかしい。

（だが、今は…。）

それを逆手に取られている。相手を遠く感じるがゆえに、心を読めない。だがそれは、心の声に頼らずとも戦う練習にはなる…とはいっても、やはり一度くらいは勝ちたい。もうあれは何年も前の事なのだから。

いつかは、横にならんでいきたいから。

「んまー、別にダンナと直接実戦に行くわけじゃねーしなー。」

柊は隣に寝そべる榎田を見る。それは同時に榎田の心の声を無理矢理柊の脳に送り込む。

（んまー、別にダンナと直接実戦に行くわけじゃねーしなー。）

（実際の声とそのまんまだな。）

心の中で苦笑する。この少年（実際は柊の方が年下なのだが）は、所謂考えた事がそのまま口に出る性質だ。心を読もうが全く関係ない。組み手でも、「今からここに打ち込むぞー！」とどう見ても分かり切った体制で突っ込んでくる。それを読ませて尚防げない

速度を目指すのが彼のスタイルだ。

「いつか、勝とうな。」

「おおっ！レンさんやる気じゃないですか！いいですね！その意気だぜ！」

恥ずかしげもなく親指を立てる榎田。その仕草があまりに子供っぽく、だがやけに様になっていて、とうとう堪え切れずに柊が噴き出す。

この幸せを、絶対に守って見せる。

二人で寝そべったまま、柊は心に強く誓った。そしてそれは榎田も一緒だったはずだ。『読心』し

なくても、柊は確信を持ってそう思った。

三日目（水）　　〈特訓〉（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

三日目（水）　　く違和く

「ただいまっ！紙とペン！！！」

「いきなりなんですかにーさん。こんな時間に。」

「いいから紙とペン！」

なんかぶつぶつ言ってたっぽいけど、その中になんか放送禁止ワード混ざってた気もするが、とりあえずきちんと持ってきて来てくれたっぽい。おお、四色ペンとは気がきくな、さすがは我が妹。まあ別にいらないんだがな。その気持ちはありがたく頂いとくよ。

「えっと、ここにコンベアーがこう走ってて、機械の配置はこう、ドアはこことこと…」

「デエトはどうだったんですか？上手くいったんですか？」

「ちよつとまって今話しかけないでマジで死ぬから」

「……頭大丈夫…じゃないのはいつもの事ですな。終わったら呼んでください。」

またなんか言ってた気がするが、気にしない。そんなものに気を取られたら最後、今の頭に無理矢理詰め込んで表面張力ばりのギリギリ感にあふれてる記憶の映像があつという間にこぼれてしまう。命がかつてるんだから勘弁してくれ。

「そんで話した内容は……」

おお、意外と出てくる！人間命がかつてると出来るもんだね、と再認識。え、なんで再認識かって？そんなの決まってるじゃないか、俺を誰だと思ってるんだい？命の危険感じたことなんか一度や二度じゃないよ、俺くらいのヘタレになるとね。まあ今回はちよつと危

機レベル違っけどね。

「おしっ！完璧！やべえ俺ブック。ンの後継なれるんじゃね！？」
「終わりましたか？その様子でしたら晩御飯は食べていませんね。」

「おお、ああ、まあ。」

「レンジで温めてます。さっさと食べてください。片付けるの私なんですから。」

ああ、作っててくれたのか。気がきくな、さすが我が妹…というか、おい、何で俺が晩飯食って来ないって予想してるんだ？デート（異論は認めない）だったんだぞ、普通相手と一緒にディナー（ちよっと気取ってみた）じゃね？

「にーさんに女性をエスコート出来るとは思えませんから。」

「うおビビった！！！」

「温まりました。さっさとテーブル付いて食べてください。」

なんか心まで読まれてるんだが。俺そんなに顔に出てたかな？まあいいや。ちなみにテーブルの横に救急箱が用意されていた。俺どんな状態で帰ってくるって思われてたんだオイ。

「で、外傷は見当たらないようですが。デエトの方はどうだったんですか？」

「いやいや外傷ってコラ。ふっーだよ。ちょっとお茶したくらいだ。」

「にーさんが女性に好かれそうな喫茶店とか知っているとは思えませんかね。」

「いやそれは相手の家で…ってオイ、なんだその目は。とうとう気が狂ったかコイツみたいな目で見んじゃねーよ。こっちみんな。」

「見ていませんが。まあそう仰るならいいです。」

相変わらずにべもないな我が妹よ。もう少し愛想とか身につけて
いけないとこの先人生大変なんじゃないかなー、とか考えてる俺っ
て兄っぽくね？

「おまえさあ、もうちょっと愛想とか愛嬌とか身につけてみたら
？俺の妹だけあって顔はいいんだし、髪ふわふわもいい感じじゃ
ん。それだけで絶対モテるって。無愛想だと生きてくの大変だろー。」

「にーさんは人の人生心配する前に自分の人生を心配してくださ
い。土下座外交でなくてももう少しプライドと節度ある人生になるよ
うに。それに恋愛関係に関しても、まずはにーさんのヘタレを直し
てもらうのが一番です。あの兄の妹、という評価が無くなるだけで
周囲の認識がだいぶ変わるでしょうしね。」

「……すみません。」

「謝るなら普段から気をつけてください。」

「はい。」

すみません調子乗ってました、見取り図と会話完璧に書けたので
ちよつと浮ついてました。でもさ、一応ちよつといいこと言ってる
っぽいんだし、そこまでバツサリグツサリ滅多打ちしなくてもいい
んじゃないかな？かな？

「まあいいです。食べ終わったのなら片付けますよ。」

「お、サンキュ。ごつそさん。うまかった。」

「お粗末さまで。で、まだ起きてるんですか？それならお茶で
もいれますが。」

「お、頼む。」

うーん、もうこのおかしな生活始まってはや三日目。これが意味するところは、俺の連続遅帰り三日目。今のところ記録タイ。記録樹立の時には不良の集団に負けず劣らずの殺気で睨みつけられ、フライパン攻撃の回数は二桁に達したんだっただな…。

「あのさー、森音ー。」

「なんですかにーさん。」

「明日も遅くなるって言ったら怒る？」

返事は、ガチャンという嫌な音だった。まあ割れてはいないだろうけど、欠けたくらいはしたかもしれない。ごめんな、名もなき皿A。君の雄姿は忘れないよ。

「何日目ですか？連続。」

「四日目。」

「記録更新、だな…。」

「前回どうなったかは、覚えていますよね？」

「…刻まれております。この体に。」

質問の答えは？とかいうことは思わない。だって明らかに声が怒ってんだもん。怒り堪えてる感じの声だよねどう聞いても。

「理由は、教えてくれないんですか？」

「駄目。……ごめん。」

「不良、関係では、無いですよね？」

「ああ。」

不良関係ではない。嘘はついてない、はず。いやでもルリ女史絡んでるし、不良関係なのか？いやいやバイトの事は関係ないから違うだろ。多分。ま、いっか。もう言っちゃったから訂正すんのはめ

んどくさいしな。

「……私も人間ですので、我慢の限界がありますから、それをお忘れなく。許可します。」

「…ありがたきしあわせー！」

お？おおおお！よっし、なんとか首の皮一枚つながった！思わず深々と頭を下げる俺。情けない兄、とか言わない。これでも強く生きてるんです。

「危険な事は、しないでくださいね。」

「ああ、分かってる。森音に迷惑はかけねーよ。お茶、ごっそさん！やっぱうちのお茶はいいな。」

そのまま駆けあがって自分の部屋に駆け込む。よしよし、脱出成功！これ以上長々といるとなんかボロ出しかねえしな。そこ、逃亡とか言わない、転進と言いなさい。

ま、森音に迷惑はかけねえよ。兄らしくない兄だけど、まあ妹の命がかつちやってりゃ、流石に頑張るわ、とかまあ、柄にもなく考えて恥ずかしかった、ってのも無いわけじゃないが。

「おまえさあ、もうちょつと愛想とか愛嬌とか身につけてみたら？俺の妹だけあって顔はいいんだし、髪ふわふわもいい感じじゃん。それだけで絶対モテるって。無愛想だと生きてくの大変だろー。」

何をアホなことを言っているのだ、と森音は思う。森音は自分の外見、内面について大部分において正しい認識をする事が出来る人間だ。だからそういった所謂「見栄え」や「外面」を気にしていないのは、男友達を作る必要性を感じていないからであるし、その余裕もない、と考えている。大部分において、とつくのは、兄が絡んだ時の事の所為であるのは言うまでも無い。

「お、サンキュ。ごっそさん。うまかった。」

兄は、ほとんどいつも合掌の後に自分の料理を褒めてくれる。それはおそらく無意識であって、お世辞とも呼べないようなものだ。頭では分かっている。が、それでも嬉しく感じてしまう。まあ嬉しいのならいいか、と彼女は深く考えることなく納得している。

時間が遅い事を除けば、久しぶりのいつも通りの会話。兄ぶろろとする俊也を、自分がバツサリ論破する。この時間が、森音は割と好きだった。

——だが、その時間は、俊也の一言で崩される。

「明日も遅くなるって言ったら怒る？」

当然だ。さっきまで考えていたことを口に出しはしないが、声に怒りが籠っているのは相手も気付いているだろう。そこで委縮してしまう兄に、情けなさを感じない訳ではないが。

「理由は、教えてくれないんですか？」

「駄目。……ごめん。」

珍しく即答の兄に、若干驚き、というか、違和感を覚える。そう

いえば、帰ってきたときの必死さも何かいつもと違ったように感じる。

（なんていうか……いつもと違って……かつこよかった？真剣だった？）

何とも言えない違和感に、森音はなにか胸のざらつきを覚える。兄は、頑丈だ。それこそ普通の人間なら病院直行のような事態で笑いながら帰ってきた事だつてある。だが、今回ののは……何か、一線を画しているように感じる。

「……危険なコト、しないで、くださいね……。」
「ああ、分かっている。森音に迷惑はかけねーよ。……。」

震えを必死で抑えつけた、森音の声。俊也はそれには気付かなかった。そのまま自室にこもってしまう。

——わかってない。ちっともわかってない。

一人台所に残された森音は、きゅっと唇をかむ。

——私は、にーさんのことを心配してるのに。

少女は、夢を見ていた。『予感』の力は、夢の中で作動することが多い。

——また、このゆめ……

ウンザリするほど見続けた夢に、少女は嘆息する。引き摺るようにして連れて行かれる自分。周りに並ぶのは、武器、武器、武器。引き摺るリーダー格の男が手にしたボタンは、町を——いや、ダメージで言えば国そのものを滅ばす最悪の兵器の発射装置。自分の見た未来を聞き、その通りの扉を開けて進む迷彩服とマスクの男達。

「おい、次は……とつと……オラア！」

頬に鈍い衝撃。現実ではないと分かっているけど、決して慣れることのない痛み。そして自分の言うとおりに進む男達。両手を縛られて、自分で自分の命すらも断てず、為す総べなく引き摺られる自分。

——ああ、もうみたくない……

ガシャンっ！——ドアが蹴り開けられる音。

「なんだあ！？」

マスクの男たちの、一瞬の油断。

ドアの方に気を取られた男の手にある、ナイフ。

男の手の高さ……引き摺られて前かがみになった自分の、ちょうど目の前にある、ナイフ。

選択の瞬間。

このナイフに、自分の首筋を押し当てるか、否か。

——もう、さめてもいいのに……

押し当てれば、ここで楽になり、男たちが油断した隙について、

ドアの所の人がマスクの男達を全員を倒して、ボタンは押されずに済む。この町は、助かる。

押し当てなければ、ボタンが押される。それは、もう止められない。町が、国が滅びる。

——さめよう…

少女は目を閉じ。首を押し出す。出来れば一生経験したくなかった感触と共に、一気に意識が遠のく。

——きつとめがさめたわたしは、ひどいかおをしてるね…

冷めきつた心でそんなことを考えながら少女の意識は遠のいていった。

三日目（水）　　く違和く（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

四日目（木）　　ゝ異能ゝ

「……！！！」

「ん、おお、おはよ、森音。どした？すんげえ顔してっぞ？」

「や、やっぱりおかしいです！にーさんが私が起こす前に起きてるって！」

「え、ええー……。」

そんなことでそんな驚くなよマイシスター。すげえよ、素で「な、なんだってー！」な顔してたぞオイ。というか、いくら駄目兄貴でもたまには早起き（と言うほど早起きでは無い。今だってベットで上半身起こしてるだけだし。）くらいするよ。

「三十八日ぶりです。」

「……。」

「三十八日ぶりです。」

「……いつもご迷惑をおかけしております……。」

いや、何その意味の無いカウント。やめてよなんか責められてるみたいな感じになってんじゃん。いや、リアルに責められてるのか。そうか。今度から頑張るよ。明日から本気出す。

「まあ、いいです。とりあえず朝食は出来てますから、さっさと食べちゃってください。」

「んおー、サンキュ。」

「いつも通りの時間ですから急いでください。」

「ん？いつも通りな」

「その「いつも」が遅刻ギリギリだからです。」

「モウシワケゴザイマセン……。」

ささやかな抵抗も空しくさつさとベットから引きずり出される。着替えを投げつけて出て行く妹。うーん、なんかいつもよりもバタバタしてんなあ。なんか今日あんのか？そういえば「やつぱりおかしい」とか言ってたし。なんか俺おかしいか？そこ、頭とか顔とかいわない。

「ま、気にしてもしょうがないか。」

とりあえずごそごとと着替える。うん、今日もそこそこのラップタイム。俺のこのスピードはヘタレ人生で養われた（体育の後の購買とかね！）もんだけど、そういえば妹も結構早い。…遺伝？

とりあえずいつも通りの朝食を頂く。ちなみに我が家は朝はパン派だ。豪華な時はサラダに目玉焼きがついたりもするが、パンにバターだけでもなかなか美味しく感じる。うん、便利な舌だ、と自分でも思うよ。

「…連続殺人…犯人は未だ…複数犯…被害者は…フリーター…工場で働いていた帰りに…」

「遅くなるのは昨日聞きましたが、気をつけてくださいね。」

「ああ、まだ物騒みたいだな。」

「分かってるならいいです。」

テレビの中で、アナウンサーが無表情に口を動かしているのを見る。続いて、何処かで見たとのある道にブルーシートと黄色いテープがかけられているのが映る。

「…町では…夜中の外出を控えるよう…警官の巡回…増員し

…」

「まあ、心配すんなって。」

「……。」

「え、いや、そこは「心配などしてません。」じゃね？」

「…はあ。まじめに考えるのが馬鹿らしいですね。まあいいです。とにかく気をつけてください。もう私は学校に行きますから、食器は水張って流しに置いてください。失礼します。戸締り気をつけてください。」

「あ、おう、いつてらっしゃーい…。」

なんかあつという間に会話を切り上げて、さつさと行ってしまう我が妹。なんか俺、避けられてる？ 貶されたり殴られたり怒鳴られたりはあるけど、避けられた事はなかったような…。反抗期？ いや違うか？ なんていうんだこういうの。

「なんという疎外感。」

とりあえず飯食つといた。さつきまで美味しく感じてたのがなんかウソみたいに味気なかった。さみしくなんか、ないもんっ！ 自分で考えてキモってなった。

「…… なんか釈然としねえ…。」

愚痴っても仕方ないので、さつさと支度して登校。ちなみにここで「さつさと」していなかったら遅刻していただろうことを補足しておく。けっこう危なかったぜ。

兄の様子がおかしい、と昨日から数えて何度めだろう、森音は思う。なにか、隠されている事は分かっている。何か危ない事をしていいるのも分かっている。以前に万引きの手伝いさせられそうになった時がそんな雰囲気だった様に記憶している。

——でも、今回は、それよりももっと…。

何か、今回は、拙い。具体的には分からないからこそ、漠然とした不安は際限なく大きくなり、森音を押し潰そうとする。慌てて駆け出してきてからずっと続いていた、無意識の早足が、徐々に重くなる。

——私が、ちゃん見てなくちゃ…。

今まででもかなり過保護と言っていていいレベルの世話を焼いてきたにも拘らず、そんな事を思う。

——にーさんは、私を守るんだから！

自分の中で、無理矢理に結論付けて、重くなっていた足取りを意識的に力強くする。

彼女は知らない。自分の事が、言ってしまえば人質的な位置にある事を。そして彼が関わっている危険が、自分の考えているものとは桁違いに大きいもの、ともすれば町一つ、最悪国を壊しかねないような事件である事。

精々「遅くまで不良の勢力争いにでも駆り出されて、その結果町の事件に巻き込まれるんじゃないか」程度が、彼女の考える「最悪」

である。

——今度は、定時連絡でもお願いしようかしら……。包帯の買い置きは…。

自分は、兄がどんな状態でもきつちりと助けられるように準備している、というのが、森音のひそかな自慢である。今回の不安も、得体の知れなさはあるものの、その自信を頼りにすれば、すぐに元の生活に戻る、と考えていた。

森音は、本気でそう考えていた。

いや、正確には、漠然とだが上手くない、それこそ命や将来に関わりはしないと楽観していた。

だが、その見通しは甘かったと言わざるを得ない。

最も、彼女がそれを知るのは、もう少し先の事だが。

b r r r …… b r r r ……

授業中のメールのバイブレーションで、俺の安眠はあっさりと妨害される。朝こそ弱い、基本的に他の時間は睡眠は浅い方だ。まあ何時殴られるかも分からないような生活を送っているせいで、安心して眠れるのが家だけ、というのが現状だ。なんか眠る時も常に刀を手放さない某幕末の頃の維新志士みたいだ、っていうところか？ いい、かもしれない。

まあ、そんなネガティブな妄想は置いておいて、メールを開く。

件名：本日のバイト

本文：今日は柊さんと一緒にバイトに行ってもらう予定です。確か木曜日、君はすべての科目を置き勉強して帰る曜日ですからそのまま直接バイト先に向かって貰っても構いません。あまり時間があるわけではないのでそれもいいかな、と思っています。その場合はまた校門のところに柊さんを待たせておきますが、どうします？

……分かって言ってるよなこの人。中身と身体能力はどうあれ、怪力女はとりあえず美人だ。俺内順位でも結構上、というかルリ女史と共に一位を争う位置だろうな。怪力女は凛々しい系、ルリ女史は癒し系でそこも双壁って感じ。え？森音？いや妹だし。まあ顔だけならそこそこ、トップ五くらいなら入るかなレベル。何分性格がねえ？ん？パルカ？あの美少女？いや、俺口リコンじゃないし。

…話が脱線したね。とりあえず見かけはSランクおねえさんが校門で俺を待ってる、ちなみに二回目とかはヤバイわけよ。何がヤバイかは察してくれ。

となると、俺の選択肢は一つ。

件名：Re：本日のバイト

本文：まず店に向かいます。急いでいくので迎えはいりません。

送信。いや、普通に早く来いっていいじゃない、って思うけどね。

b r r r : : b r r r : :

返信からおよそ三秒。オイオイオイ。

件名：了解です

本文：助かります。あまり遅い今日でしたら柊さんを迎えにやりますね。すれ違ったら大変でしょうから、早めにお願ひしますね

で、最後に楽しい顔文字。すんげえケータイへし折ってやりてえ気分になったが、そんなことしても何も解決しないし、数秒後に自分が後悔するだけだろう。そのくらいは分かってるし、実際そんな事が出来ないヘタレだって自覚もある。いや、ケータイへし折れたらヘタレじゃない、ってわけじゃないが。

（ぜってえこのメール元から作ってただろ…ったく。）

まああのニヤけメガネならそのくらいしそうだよなあ…。

b r r r … b r r r …

（んん？）

さっきのでもう終わったと思ったら、もう一通きやがった。やっぱりニヤけメガネだ。

（えーつと…！？）

件名：追伸

本文：今日は君の『異能』が必要になります。よろしくお願ひします。

（『異能』って言われても…）

俺自身どうすればいいか全く分かっていないのだが、どうしろと
いうのだろう？そもそもそんな御大層な力が自由に使いりゃもうチ
ヨイまじな人生送ってるんじゃない？

（ま、とりあえず行ってから考えつか…。）

ただまあ、割とあきらめはいい方だ。いいか悪いかは別にして。

四日目（木）　　ゝ異能ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

四日目（木）　　く救助く

「今日もやるぜハナ。チ！」

「おうリョー。君！」

がっちりと肩を組む俺とチビガキ——榎田。うーん分かる人万歳！

「……貴様らは何をしているんだ。仲良くなったのはいいが……若干気色悪いぞ。」

「あ、スキんシップの一種だから気にしねーでよ、レン。」

「そしてあわよくば引かないでください。」

だがまあ、分からない人から見ればちよつとそうなるよな。怪力女——柊さんはこういうの興味なさそうだしね。いたしかたない。うん、オタクには行きづらい世の中だしね。こういうの分かってくれる女の子って貴重だよな。いないかな、げんし。んの大野さんみたいな人。

「はあ、どあほうが二人に……は、置いておきまして。早く来てくださって助かります、木林君。ではパルカちゃんのところに行つて、今日の仕事を軽く説明を受けてください。」

俺とチビガキが超反応する台詞を吐いたのは、イケメンメガネ、楸シン。こいつ、漫画の知識もあんのかよ。でも、GJ……！！

「というこつた、若大将。どうせいつもの休憩室だ。ちよつと行ってこいや。俺は多分、もう別の仕事に行ってるからよ。」

「私の方はもう聞いている。待っているから早くいつて来い、ヘタレ。」

二人からの励まし（ポジティブに生きるって大事だよ！）を受けて、休憩室に向かう。口ぶりからやっぱり今日は怪力女と一緒に仕事らしい。まあいいけど。

「…こんにちはー…。」

「こんにちは。」

恐る恐る（ヘタレの性だ）ドアを開けると、休憩室でお茶を飲んでいた、人形風の外見の美少女——楸パール力が、ぺこりとお辞儀をする。うん、本当にぺこりって感じ。動作がいちいち人形っぽいよ。

「で、今日の仕事の事を…」

「ひいらぎさんといっしょ。ばしょは、ひいらぎさんにきいて。」

なんか、うん、なんでここに来たんだろうね。怪力女に全部聞けば解決だったんじゃない？俺。

「ないようは、いう。えっと、とおりまがでて、ひとをおそう。そこで、ふたりのひとがあぶない。」

「…それはまた物騒な。」

「ひとりは、ねらわれてる。もうひとりはとおりがかり。でも、このひとは。」

「ん？この人は？」

「……ううん。いい。どちらかひとりがじゅうしょうのうんめい。だから、たすけて。」

「…どっちを？」

「それは木林君が決めていいですよ。今のところの運命の道はどちらか、あるいはどちらにも重傷、の三パターンが大筋です。気に食

わなければ君の『異能』を発揮してください。」

いきなり話に割り込んできたのは、イケメンメガネ。だからその『異能』ってのが使いりゃは苦労しねえっての。なんか美少女の話になんか引つかかりを覚えなくはないが、とりあえずはまあ大丈夫だろ。

…ん？

ちつと待てよ。ちよつとキーワード抜き出してみましようか。と
おりま↓通り魔。ひとをおそう↓人を襲う。あぶない↓危ない。じ
ゆうしよう↓重傷。

…。

……。

………結論。

全然安全じゃねえじゃねえか！？おいおいおい。なんか全部ひらがなだったからあんまり危機感感じてなかったけどこうして漢字に変換してみるとヤバイだろオイ！

「ちよ、まてy」

「お前は安全だ。私を守るからな。」

「…なんというアヤナミ。」

「……お前のような輩がいるから『読心』が辛いんだ。」

怪力女の分かってるのか分かってないのか良く分からんフォロー。まあ、良く考えれば、実際に戦うのは怪力女の方だし、俺はとりあえずその場にいればいいんじゃない？的な感じで。

「ならば仕方ない。」

「うむ、では、行くぞ。」

「ちよ、行く、行くから引つ張んなああ！」

話すや否や俺の手首をひつつかんで走り出す怪力女。なんだお前はいつもいつも俺を引き摺って。好きなのか俺の事？

「そんな訳があるか。」

「ですよー。」

あつさりと心を読まれ、引き摺られたまま玄関口まで連れて行かれる。靴を履く間くらいは勘弁してくれるらしい、と思っただけなら履き終えた瞬間また引き摺られる。

「師父、行ってくる。」

なんか遠くて、「いつてらっしゃーい。」と「がんばれよー」が聞こえた。既に遠くだったのが若干怖いのだが。

「なあダンナ。」

「なんです、榎田君。」

俊也と柊が台風のように去って行った後、二人はぼんやりとそれを見送る。

「レンの奴、若大将と一緒に行くときはやたらと手をつなぐよな。あれなんだ？」

「おやあ、榎田君？もしかして嫉妬ですかあ？」

「か、勘違いしないでよねっ！そんなんじゃないんだからっ！」

「そうですねえ……多分、近く感じたいんでしょう。」

微妙な小ネタ（実はなかなかの洗練具合である）を完全に無視して、シンが答える。榎田はそんな事を考えるタイプではない、と彼は思っていたし、榎田自身も、柊は気の合う仕事仲間、といった感じだったから、小ネタに使うくらいは何ともない。スルーされた事は些かシヨックだったようだが。

「近く？」

「彼女の『読心』は、対象を近くに感じれば感じるほど深く心を読むことができます。恐らく彼女は彼女なりに、『運命を捻じ曲げる』能力を解明しようとしているのでしよう。行動パターン、反射的思考、感覚の具合、記憶さえも読むことで、なにか、ほんの僅かでも手掛かりを探そうとしているのでしょねえ。頑張っていますよ。」

「若大将のプライバシーガン無視だな。」

「まあ、彼女がそれだけ必死だという事です。そのくらいは、多目に見てあげてください。」

「で、そこからなんか手掛かりが見つかる事はあるのか？」

「んー、結論から言えば、限りなくゼロに近いです。が……」

「ゼロでは無い、ってか。ははっ。」

榎田は苦笑を洩らす。恐らく楸は見つからないと思っている。でも、完全な無意味でない限り、いやもし完全に無意味なものであったとしても、柊に出来る限りの事は、好きにさせてやろうと考えているというわけだ。

「完全に保護者だな。」

「まあ、第二の保護者的なポジションになつてしまいましたからねえ。そんな年でも無いんですが。」

「レンは、子供扱いされたくないと思うぜ。」

「そうですね。そろそろ巣立つて貰わないと。」

「そうじゃな…いや、いや、まあいいや。ダンナなら言わなくても分かつてるだろうし。」

柊はシンのことが好きだ、と言いかけたのを、かろうじて榎田は飲み込む。これはシンだつて薄々（もしかしたらハッキリと、かもしれない）気付いているだろうし、そうでなくても自分から伝えるべきことではないだろう。

「榎田君。今日の任務は…」

「んー。一応帽子かぶつてくからそんなに目立たないと思う。」

「つかこつちレンの方が良かったんじゃない？俺偵察なんて柄じゃねえよ。」

「ま、今日まで頑張れば明日は榎田君と柊さんは休養日です。決戦に備えて。」

「…んじゃ、気合入れて行きますか。なーに、工場見学に紛れ込むガキになりすまשיいだけだろ？任せとけて！」

なかなか頼りがいのある笑顔を見せる榎田に、ふっとシンは微笑む。榎田はもう自分のすべき事が分かっている。柊も、自分の出来る限りをしようと頑張っている。上手いけば、今日の柊と俊也の仕事が上手いけば、パルカも少し前進する。

——あとは、勝つだけですな。

心の中で、シンはつぶやく。

——運命という、強大な敵を相手に。

「という段取りだ、分かったな。」

「わお、すげえ省略。作者楽しすぎだ！」
「イタイイタイ痛いって

！」

「訳の分からん事を言うからだ。」

ものすごい力でほつぺた抓り上げられた。超痛いかった。

「分かったか？」

「分かりました。とりあえず俺は、襲われてない方を助け起こして、落ち着かせます。慌てて逃げ出さないように見張っておきます。」

「

「そうだ。貴重な情報源だからな。そして……」

「十五分たって柵さんが帰ってこなかったら、そのまま事務所に連絡。助けを待ちます。」

「よろしい。」

どうやらご満足の様子。鋭い目つきと動かない表情からは、怒ってるのかどうか分からないからヘタレとしては危機察知が出来ずにちょっと困るんだが。というか、外見から得られる情報が少ないよな。美人ってことは分かるが。

「怒ってはいない。心の中でまでお世辞はいらない。情報とはなんだ？年齢か？それなら17だな。」

「え、えええ！！！！同年！？うsへブアアッ！！！！」

「…ヘタレ、貴様はその発言が非常に失礼だと自覚しておけ。…全く、敬語だからそう勘違いしているのではないかと思っ**て**はいたが…。」

「…すみません。ボディーは後に響くんで勘弁してください。つてか、学校は？」

「通信制だ。この『異能』では何十人もいる教室には入れん。」

「大変なんですね…。」

「敬語でなくてもいいぞ。」

「…どうも。これは体に染みついたヘタレの習性なんで。」

「私は自虐癖のある奴は嫌いだ。めんどくさい。」

「…どうも。」

とりあえず雑談しながら歩く。そのうち何回かツツコミが入る。最初のうちは強すぎて結構なダメージだったが、それを察してくれたらしく、途中からちよいどいい痛さ加減になった。あ、俺はそういう性癖は持つてないよ？念のため言っとくけど。

「おおおっ！！！」

現場に着いた瞬間、柊（怪力女、は頭の中でもNGにされた）がいきなり走り出す…てかおい、すげーよ、カタパルトでもついでんのかあんだ。

まるで弾丸打ち出したように突進する柊にビビったのが襲っていた男がはじかれたように逃げ出す。襲われていたのは、30代くらいの男。スーツ姿からして、会社員だろうか、そいつも転がるように起き上がって逃げ出す。

「大丈夫ですかっ！！！」

俺は予定通り、残った一人、襲われてない方の一人…というか、倒れている人に駆け寄る。全く動かないから意識はないんだろう。とりあえず駆け寄って脈を…

「とおお〜。」

取ろうとして、ちよつと出血が多かったのにビビった。

ちなみに、これはビビった、で済むレベル。普通の人が見たらくらつとくるかもだが、俺はあいにくふつーの人間じゃない。このくらいの出血は良くあることだぜベイベ〜。天下のヘタレを舐めて貰っちゃ困るぜ。あれ、なんか目の前が滲んできたんだが…とか言ってる場合とちゃうな、手当て手当て。

手足と、頬に切り傷。でもまあ、これは浅いっばい。頬が一番出血してるからハンカチ（柊持参、柄無）で抑えて、捻挫してるっばい足をタオルで簡単に固定する（俺持参、枕用）。

で、ここまでして一段落。うん、日頃からこういうのを見慣れるといざ自分がするとなっても割とスムーズにいくもんだね。ちなみに見学するのは妹の手際。つまり、されてんのは自分。あれ、また目の前が…。

そんな事を考えながらちらつと倒れてる人の様子を見る。

中学生くらいの女の子だろうか。どこにでもいそうな感じ。しいてキヤラ付けするなら図書委員っぽいオーラな感じ。

「ん、んん……。」

「お、起きた。」

「私、なんで生きて…。」

「ああ、俺が助けた。っていうかまあ、ちょっと成り行きで…と
いうかその…。」

「ッ！…何でそんなことしたのっ！？」

はい？あれ、なんだこの雰囲気。何で俺助けたのになんか悪者な
感じ？一応ヒーローじゃね？実際大したことなんもしてないけど。
多分ほつといても死ななかつたろうし。

「いや、その…」

「死なせてよッ！！私なんかッ！生きてても虐められるだけで
ッ！！！！」

「は、はあ…」

「靴は三日に一回はドロドロでッ！机はズタズタでッッ！！」

「ほ、ほお…」

俺、一時期毎日。机、ちっさく「ヘタレ」で大きなヘタレを描い
てあつた。

「私だけプリント回ってこないし！！そんな私なんて、死ねば
いいんだああアア！！！！生きててもいいことなんか無いいいい
い！！！！！！」

なんか超ヒステリック。すごい、涙と鼻水一緒に流す女の人初め
て見た。ヤバイこの人自殺志願者だったのか。あー美少女言い淀ん
だのこの事かな。とか思ってたらなんかどんどんもつと叫んでる。
やばいかな？

「だから、だからあ！！！！」

あ、すごいこの人カッターナイフ出した。やばい、とは思ってた。多分俺顔真っ青じゃね？とか思ってたし、刃物こええ！（慣れてても怖いものは怖いのだ）とかも思ってたが、口を突いて出たのは別の言葉だった。

「え、え、ええと、別に普通じゃ…？」

「何ですってえ！！あんたに、あんたなんかになにが分かる」

「だって、俺、プリントって先生にもらいに行くもんだし、靴がボロボロなんて毎日だったからもう靴箱自体をドロドロにしていじめっ子が開けるのを躊躇うようにしてるし。」

「……………」

「机は、もう彫るとこないし、最近は新しいのが隙間見つけて彫ってあると「おお、まだ彫るスペースあったのか！」って感じだし。」

「

「……………」

「二日に一回不良に呼び出されるし。このくらいの傷つくし。」

「……………」

あ、あれ？なんか俺おかしいこと言った？ああ、一般人から見れば普通じゃない事なのかこれって？というか、なんかさっきまでヒステリックてたのがなんか嘘みたいな落ち着き方なんです。カッター持ったまま固まってるんですが。というか、なんかどこことなく憐れむような目になってませんか？

「え、えつと……………」

「……………」

「あの……………」

「……………生きてて、楽しいですか。」

「……………まあ、それなりに。」

「……………辛くないですか。」

「いや、けっこう。」
「……。」

なんだこれ。なんで俺自殺志願者から憐れまれてるんだ？え、俺の人生って自殺志願者が不憫に思うほどひどかったのか？確かに普通じゃないと思うが！

「ヘタレ。終わったぞ、そっちはどうだ。」

「あ、ああ…大丈夫っぽい…。」

「…普段からヘタレって呼ばれてるんですか？」

「…そうですが何か？」

「…いえ、別に。」

いつの間にか現れた柵は、別にどこも怪我している様子はない。というか、汗一つかいていない。ホントに人間かコイツ。

とか思っている間に、女子中学生の目が、なんか、ますます目つきがかわいそうな人を見るものになっていく。中学生相手にこれ、どうよ。ちよっと拷問臭くね？

「ああ、捻挫しているようだな。私が送っていく。ヘタレ、三分で戻る。」

「…へ、あの、キャッ！」

軽々と人一人抱え上げて走り出す。というか、こういうのって普通肩を貸すとか、おんぶするとかじゃね？米俵でも持つみたいに肩に抱え上げるってどうよ。

…。

ホントに三分で帰ってきた。何なんだ全く。

「帰りながら、今日の仕事の情報交換をしておこう。とその前に。」

「なんでしょう。」

「あの女の子から伝言だ。」「手当、ありがとうございました。強く生きてください」だそうだ。」

「……。」

「歩きながら、と言ったろう。足を止めるな。」

なんか、さあ、俺。頑張ったよね？俺、悪いことしてないし、最善尽くしたよね。その上で聞いてくれよオイ。

なんで俺が一番かわいそうな感じになってるんだよ!!!

四日目（木）　　ゝ救助ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

四日目（木）　　理想

「了解です。では…」

「…ああ。俺の方が、それで。普通に柊が送って帰ったよ…」

「お疲れ様です。では、後は柊さんに聞きますから、もう帰っていいですよー。」

「…ども。お疲れ様でしたー…。」

どこことなく落ち込んだ様子の俊也を、事務所から帰す。どうやら流石のヘタレストとはいえ、自殺志願者からの「強く生きてください」はちよつと堪えたらしい。要精神力強化、とシンは心の中でメモしておく。

「ああ、木林君。最後に一言。あの人は、助かる運命はありませんでした。君は『運命を捻じ曲げる』力で、あの子の命を助けたんですよ。」

その一言は、泣き出しそうな俊也の目に一瞬だけ、悲観以外の色が混じったが、「そんなんでもやっぱあれはないでしょ…」とやっぱり悲観的な目に戻り、彼はそのまま事務所を後にした。

そのまま、ドアが閉まるのを待って、シンは話を切り出す。

「では、柊さん。」

「分かっている、師父。まずは、今回の相手の事だ。師父の言う『姓無』では無かった。殺意はあったが、単なる通り魔のそれを超えるものではなかった。『姓無』以外の実戦担当だろう。やはり思考を読む限り、国際的なテロ組織が雇い主のようだ。」

「ちゃんと殺さないでなんとかしましたか？」

「……最初は、その、『姓無』と思つて全力で攻撃してしまつたが……。命に別状はない、はずだ。…多分。ちゃんと応急処置はしたし、眼球運動もあつた。」

「ああ、ならいいんですが。次からは氣をつけてくださいね？」

「……すまない。」

余談だが、柊は最初の一撃を完璧にクリーンヒットさせてしまい、そのまま吹き飛ぶ相手を見て慌てて応急処置に走つた、というエピソードがある。さらにもうひとつ余談を話せば、それによって恐怖心を植え付けられた通り魔が、やや錯乱してしばらく警察の事情聴取ができなかつた…という事もあつた。

「いえいえ、いいんですよ。で、もう一人ですが……」

「ああ、フリーターの男だと言つていた。最初は単なるフリーター、今は遊びの帰りだと言つていたが、違った。『読心』で聞き取つて、問い詰めたら白状した。やはり、裏の社員だそうだ。」

「動機に心当たりは？」

「有りすぎて絞れないそうさ。ただ、今月の殺人事件の被害者は、ほとんどが裏の社員だつたそうさ。まあ仕事上あまりおおげさにボディーガードをつけるわけにはいかないだろうしな、その隙を狙われたのだろう。」

「その線で概ね正解でしょうね。相手は恐らく、工場の『新兵器』の作製を知つたのでしょう。それで、ゆさぶりに掛かつている。まあアレ一つあれば国一つ脅迫するくらいは出来るでしょうね。」

シンが『新兵器』の存在をさも当然のように知っている事には、別に今さら柊は驚かない。寧ろこの世の何処かに何か知らない事があると言われた方が彼女は驚くだろう。

「私は、次に何をすればいい？」

「んーそうですね…。特に今のところは、ありませんね。今日はお疲れ様でした。」

「いや、出来る限りのことは、しておきたいんだ。だから…」

「でしたら、今日と明日、ゆっくり休んでください。決戦は明後日の予定です。」

「だったら…。」

「期待していますよ、柊さん。貴方は、強くなりましたから。」

「／／／っ！」

シンは、唐突にこういう事を言う。何度も聞かされてはいたが、それでも柊は赤面してしまう。ほとんど表情が揺るがない（内面的には割と表情豊かに生きている）柊が、こんなにも表情も豊かになるのはこのときだけだ。

「レン、貴方の思うようになさってください。私は、応援していますから。」

「あまり不吉な事を言うものではないぞ。」

「ははは。そうですね。」

そういつて笑うシン。その後ろでばけーっところらを見つめるパル力。斜め後ろにいる榎田の必死に笑いを堪えている顔から読み取れる「ぷぷーっ。顔真っ赤だぜお前！」の心の声。にらみを飛ばす柊。

「では皆さん、今日はもう解散しましょう。明日のうちに情報収集と作戦計画を済ませておきます。集合は明後日。よろしく願いますね。」

「若大将はどうすんだ？やっぱ休みか？」

「いえいえ、彼は特訓です。まあ一般人相手に後れを取らないくらいにはしょうかと。」

「なるほど。確かに俺らじゃ、教えるまでは無理だしなー。」
「まあ、日にちがあれば榎田君にも出来るとは思いますがね。」

そんな会話をしながら。彼らの木曜日は、過ぎ去っていった。四人全員が、このような時間が永遠につづく事を願って。

「はああ…。」

「お帰りなさい。帰ってきたらまずはお帰りなさいだと思いますよ、にーさん。」

「ただいま…つかれた……」

「お疲れ様です。とりあえずさっさとご飯の準備をしましょう。」

「……頼む。」

そういつてだらしくソファーに寝っ転がる。いつもは「いきなりだらだらしないで、洗濯物出して着替えてください。」という我が妹も、流石に空気を読んだっぽい。というか、不良（複数）から逃げまくって日付変わるまで走り続けた日でも言われたんだが。今俺そんなひどい顔してんのか？

「さて、出来ました。ちゃっちゃと食べてください。」

「さんきゅ。頂きます。」

直ぐに出てきた夕飯（時間はもう夜食って感じだが）を頂く。心なしか食欲がない気がする。食べ終わるラップタイムはいつもと一緒にだった。うん、どうやら気のせいだったらしいね。心だけだったね。体は正直、ってこういう事かな？違うかな？

「ん、ごちそうさまと……。」

「お粗末さまでした。なにしてきたか、聞いてもいいですか？」

「んーまー、ちよつとなら。なんつーか、あれ、ちよつと自殺しようとしてた子助けてきた。」

「……言い辛い事ならそういつて頂ければ。下手でベタな嘘はいらないですよ。」

「……俺のこと話したら「強く生きてください」って言われた。」

「……。」

「……。」

「心無い言葉を言つて申し訳ありません。事実ですね。」

「いや、それもちよつと傷つくが。」

我が妹よ。理解が早いのは助かるが、それは少しはや過ぎやしな
いかな？偉大なる兄としては、それも作り話なんじゃないかと疑つ
てほしかったところだよ。

「ま、とりあえず助けたよ……。」

「その子、生きていけるでしょうか？」

「大丈夫だろ、多分。なんか俺見て「こいつでも生きていけん
らダイジヨブじゃね？」みたいな目えしてたし。」

正確に言えば、可愛いそんな人を見る目で見られた。

「……。まあそれは分かりました。で、いったい何をしていて巻
き込まれたんですか。」

「うん？いや、それをしに行ったんだが。」

「……話通じてないですね。」

「……ゴメン。ま、とりあえずバイト？みたいな？」

「……ますます分かりませんが。」

うん、まあ、俺もよく分かってないしね。仕方ないね。俺よりもはるかに頭の回転のいい妹だけど、説明している本人も分かっていないことは流石に分かんないよね。

「ま、気にしないでいいよそんなの。」

「そうですか。まあ、人さまの役に立っているようなら何よりです。私も兄として誇らしいですね。」

「……なんか、まあ、ありがとよ。」

「……普段が普段ですから。」

「……。」

俺、沈黙。なんか、もう、いろいろね。疲れたよ……。マジで。

「もう、寝るから……。ちょっと今日は疲れた……。明日も遅くなると思う……。」

「……。そうですか。では、明日はいつも通りに起こします。」

「おやすみなさい。」

「……。おやすみ。」

自室に入ってそのままぼったりと倒れ伏す。パト。ツシュ、もう疲れたよ……。なんだか、とつても、眠いんだ……。

そんなくだらない小ネタを考えながら、俺の意識は夢の中に落ちて行った。

森音は、驚愕していた。もつと難度の高い語彙を用いるなら、怪訝、不穩、といった言葉がより適切だろう。兄が。あの兄が。ヘタレの、ヘタレストのあの兄が。

「んーまー、ちょっとなら。なんつーか、あれ、ちょっと自殺しようとしてた子助けてきた。」

寧ろ兄の方が心を病まないかと少し心配していたほどのだ。一応兄の精神力は驚嘆に値するレベル（だと森音は感じている）なので、大丈夫だとは思っていたが、気に止めておいたのは事実だ。

「心無い言葉を言って申し訳ありません。事実ですね。」

冗談を返しながら、冷静に考える。

（兄が、人を、助けた…。）

当然、困ってる人を見れば助けるのが礼儀だし、森音は実際にそうしている。だが現在の世界において、その当然の事が出来ない人が大勢いるのも事実であり、兄は（森音としては残念極まりないが）そちらに属する人間だ。

（その兄が、人を、助けた…。）

兄が、成長している。

「私も兄として誇らしいですね。」

そう、誇らしかった。ヘタレになる前の、格好いいとは言えないまでも、優しかった兄、今の卑屈な自嘲の笑みではない、本当の笑

顔を浮かべた兄の姿が思い出される。その姿に、だんだんと近づいていつている、或いはそれを追越していくような気がして。

その姿が、嬉しくて。

本当は抱きしめてしまいたいほど嬉しくて。

だから森音は。

「そうですね。では、明日はいつも通りに起こします。おやすみなさい。」

認めてしまった。兄がまた遅く帰る事を。しばらくそうでいいと思った。そうすれば、兄を昔のように、いやそれ以上に慕うことが出来る。そうなれば、そうなってくれればと。

それが、兄が何をしているのか、どれほど危険な事なのかを知らないままで。

四日目（木）　　ゝ理想ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

五日目（金）　　～森羅～

「俊也さんは、土日も、お暇ではないのですか？」

「は、はあ、ちょっと用事がありました。」

「残念ですね。良かったら遊びに来ていただきたかったです
が……。」

「ぜ、是非またの機会に……！」

背後からの殺気のこめられた視線に、とりあえずルリ女史との有効な会話を演じているようにする。だってさ、ちょっとルリ女史の眉がちよつと顰められた途端にすごい視線感じるからね。いくら大企業のお嬢様だからってちよつと過保護じゃね？

「そうですねー！そーゆーときはなんにも気兼ねしないで行くほーがいいですよー！」

「は、はいっ！気兼ねない時には是非とも……！」

軍隊チックに返事する俺。その途端にルリ女史の顔がぱあつと輝く。それだけで後ろの視線が満足そうなものになる。というか、なんで俺そんなに視線に敏感なんだ？確かにヘタレの特殊能力として視線には敏感だが、こんなに研ぎ澄ませるとは。俺がヘタレ道を究めるのも遠くなさそうだな。……言つて泣きそうだが。

……。

ああ、説明しようか。今は、昼休み。場所は、体育館裏。前にいるのは、ルリ女史。後ろから感じる視線は、不良。多数。まあ、とりあえずルリ女史が笑顔でいるうちは、大丈夫っぽいね。

どうしてこうなったか、って？それはまあ、一件のメールから。

件名：こんにちは（絵文字付、結構多いので本文のは略）

本文：俊也さん、こんにちは！ルリです！今日は昼前の講義が早く終わりそうなので、私は少しはやくお昼休みを取ることができそうです！

そこであなたにビッグチャンス！なんとわたしは今日はお弁当を二人分作ってきています！よろしかったら、一緒にませんか？な、な、なんと、無償で差し上げます！わたしは体育館裏にいますので、よろしかったら是非いらっしやいませ！

あ、何かご用事がありましたら無理はされなくて大丈夫です！他の人をお呼びしてお弁当は食べて貰いますから！俊也さんのご予定優先でどうぞ！ご返事、待ってます！

…。

うん、なんていうか、メールだと印象変わる子っているよね。俺も何人か知ってるけど、これはすごいわ。劇的。ビフォーアフターもびっくりだよ。おっとりばやばやツ子が、チャキチャキのスポーツマン、って感じだよ。

まあ、それはこの際置いておくとしても、だ。問題なのは内容だ。まあ、翻訳してみようか。

翻訳：意味のない挨拶略。今日は早く来れるから、お前も来い。弁当作ってやったから有難がるよーにな。来れなかったら、おまえらの代わりに不良達呼び出して説明すつから、お前なんかぼこぼこだからな。

読み上げソフトとしては、不良さんのお声でよろしいかな？当然、慎んで伺わせて頂く旨をご連絡申し上げた。昼休みに提出物があつたような気もするが、気のせいだろう。きっとそうだ。

…。

で、今に至る。今日はなんかルリ女史もバイトがあるらしく、家には呼べない、と言っていた。正直に言おう、助かった。今日の用事も外せない以上、呼ばれないのは非常にありがたい。というか、今日は柊が迎えに来られない以上、不良を一人でまくのは少々しんどい。いやこれも正直に言おう、むりぽ。

ああ、ついでにこいつお紹介しておくか。メガネからきたメールだな。

件名：無題

本文：今日は夕方に来てください。その際、動きやすい、破れてもいい服装を用意しておいてくださいね。あと、土日は決戦になりますから、そのつもりで。

以上。まあとりあえず俺がなんかさせられるということは分かっていっても、俺に出来ることなんて、ヤバイヤバイと思っとく事しかないんだが。

「では、いつでも言うてくださいね！今日は特別に外せないバイトなんですよ。」

「外せない？」

「ええ、ちょっと最近バタバタしてまして。すみません。」

「いえいえいえいえ！俺もちょうど今週は忙しくて！」

なんかもう、国民性バリバリの譲り合いの精神。互いにこの会話のうちに何回ぺこぺこしたんだろうかね。俺はそのスキルは自信ある（涙）けど、ルリ女史もなかなかだね。

「バイトは、大変なんですか？」

「ん、そんな大変というわけではないですよ。」

「コンピューター系、なんすよね？どんなことしてるんすか？」

「あゝまあ、セキュリティ管理とかですけど、詳しい事は言えないんですよ。」

「あ、守秘義務とかつすかね？」

「…ん、そんなとこです。えへへ。俊也さんのほうは？用事、つて？」

「あゝ、こつちもちよつと。」

「あれ、彼女さんとかですか？」

「……だったらどんなにいいか。まあ、こつちも守秘義務みたいなもんつすよ。」

「あらゝ、だったら、私達、守秘義務仲間ですね！」

「は、ははは。」

「俊也さん、彼女とかいらつしやらないんですか？」

「……いたらもうチョイ楽しい人生送っているかと。」

まあ、そんなどうでもいいことを話しながら、昼休みは過ぎていった。幸運だったのは、ルリ女史がずっとにこにこしてくれていたおかげで、後ろの不良の視線がしばらく収まっていた事。ついでに、その太陽のような笑顔が、ちよつと俺のすさんだ心を癒してくれた様な気がする。不幸だったのは、その笑顔が素敵過ぎて、途中から不良の視線が先より倍化して殺気を放っていた事。うん、気付いたおかげで今回は逃げ切れたけどね。

放課後、まっすぐ帰宅した瑠璃は、すぐにバイトに呼び出された。

ちなみに、バイトとは名ばかりである。実際には、部署の監督者、室長ランクの権利を有している。さらに言えば、それは彼女が森羅電気総帥の娘であるから、では無い。彼女は若干高校生にしてこの部署の誰よりも能力を有しており、それを以て室長の地位を得ている。

「今日と明日は、なるべく職員を早めに返しておいてください。幹部階級の方々は勿論、現場の作業員も全員です。その上で管理システム、セキュリティの強化を行います。」

「はっ、了解です、室長！」

「では、皆さんは現在の作業と並行して、セキュリティのパスワードの総変更をお願いします。私は管理システムのデータのチェックを行います。」

「し、室長一人ですか？」

「ええ。大丈夫ですよ。」

どうでもいい話をしながら、そう、瑠璃にとっては、どうでもいいことだ。寧ろそれ以下、どうにでもなっただけのいいものだと思っっている。

（作っているものが、作っているものですから…。関わるものが命を狙われるのも、当然と言えば当然なのかもしれませんね…。）

彼女は他の職員を圧倒する速度でキーボードをたたき、作業をみるみる進めていく。だが、考えるのは、データの事でもセキュリティの事でも無い。奪われた職員の命ですらない。自分がこの仕事に関わることに、それ自体である。

（いつから、私はこんな事を、人殺しの助けとさえ言えるようなことをするようになったのでしょうか…。）

バイトとして働くようになった時からだろうか。仕事を理解し、把握した時からだろうか。室長に抜擢された時からだろうか。それとも、もっと幼いころ、誕生日に父から初めて自分のパソコンを貰った時だろうか。

だが、そのことを疑問に思う事さえなく生きてきた。今までは。

（いつから、こんな事を考えるようになったのでしょうか…。）

こちらは、問うまでも無く瑠璃にも答えが分かり切っている。あの男…俊也に出会ってからだ。もっと言えば、あの時、人生で初めて死ぬかも知れないと思った、あの夜。

死ぬ、と、思った。

怖い、と、思った。

死ぬという事が、こんなにも怖いという事を知った。

そして、その恐怖を、何の自覚も無く量産する自分たちを、怖いと思った。

（柊さん、と名乗っていた人は、違う。でも、俊也さんは、同じだ。）

柊は、あの世界、死の恐怖を乗り越え、死を受け入れた者たちのいる世界に生きる者だ。一目で分かった。何故かはわからないが、感じ取った。ああ、この人のような人たちが、自分たちの作るものを扱うのだと。それに相応しいのだと。

だが、俊也は違う。

だらしなく腰を抜かし、みつともなく悲鳴を上げた。…自分と同

じように。だからこそ、知りたいと思った。自分のように、何の覚悟も無くその世界に関わってしまったものとして。

（あの人といると…、楽しい…。）

話せば話すほど、惹かれる。恋、とはこのようなものなのか、と真剣に考えてしまうほどだ。彼の頑丈さ、頭の回転の速さ、視点の面白さ。そして、普段の卑屈な性格に隠れているが、確かに感じる優しさと強さ。

（あの人の卑屈さは…、私の鈍さと、同じ…。）

親近感を感じてはいるが、そう思えば思うほど、自分はこれでいいのかも、と感じてしまう。瑠璃はそれが甘えである事を十分自覚しているが、俊也と共にいる、この甘えた、甘い生活もいいのではないかと思ってしまうのだ。

（でも……。あれ？）

ふと、手が止まる。見ているのは、管理のうち、最重要とも言える『新兵器』の管理データ。そこに見つけた、僅かな足跡。楸が、自分にしか見つけられないと考えて、そのまま消し忘れた、テロ組織の痕跡。

（このデータは、まずい！）

慌ててデータ、履歴から抜き取られた情報を吟味する。と、同時に、背筋が凍りつく。抜き取られたデータは、『新兵器』の管理情報、すなわち、完成、搬送、使用法。これがあれば、『新兵器』を一介のテロ組織にでも扱うことができる。

そして、その搬出予定日は——明後日。

（時間がなさすぎる……！予定日は、ずらせない。なら、警備を増やして警備会社に……いや、警備会社では、あの世界にいる人たちとは渡り合えるとは思えない。）

間違いなく、瞬殺されるだろう。警備会社とはいえ、命を奪われるつもりで警備に当たるものは少ない。いや、皆無と言っていいだろう。さらに言えば、銃や剣といった、実際の武器を扱った事のある人間も、である。それに対して、柊の動きは見事に洗練された、実戦のそれだった。ならばこちらもそうしなければならぬ。

「ちよつと出かけますね。お父様のところへ。」

「え？何をなさるんですか？」

「森羅特殊警備員の緊急配備を。」

「なっ！？彼らを！？」

うろたえる職人を無視して、瑠璃は普段の彼女からは想像できない、焦った様子で父のもとに急ぐ。同時に連絡を行う。

（ここを守らなくては……。これが知られたら、森羅は終わる……。

そうなれば……私はもう、元の世界には戻れない……。それは……いや……）

恐怖に急かされながら、瑠璃は携帯のボタンを打った。

警備員の変更、という瑠璃の判断は、間違っではない。確かに一介の警備員にテロリストの進行防衛、ましてや『異能』の持ち主を相手に戦うのは、自殺行為以外の何物でもないし、警備会社から死人が出たとなれば森羅の名前に傷がつく。ほんの僅かとはいえ、そこから森羅の裏の顔が暴露されてしまう可能性も、無いわけでは

ない。

だが、その見通しも、間違いではない、であり、満点の回答では無い。この場合、満点の回答は、「警備員を全員引き揚げる」であった。相手がただのテロリストであつたなら、確かに森羅特殊警備員は守り切るだろう。

彼女の誤算は、『姓無』。

その最強の殺人鬼の集団の脅威を、彼女は知らない。

五日目（金）　　ゝ森羅ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

五日目（金）　　（特訓）

「こんにちは……。」

「こんにちは、早く来ていただいて助かります。さて、木林君。早速ですが、とりあえず着替えてきてください。」

「……ホントにさっそくですね……。」

さつさと事務所から追い出される。まあ、事務所、つつつても単に一軒家の広いロビーに仕事机いくつか置いてるだけだが。で、通された部屋は、おんなじ位の広さのある部屋ではあるのだが、こっちは机とかがない分えらく広く感じる。まあ具体的に言えば教室の半分くらいか。なんもないとえらい広く感じるもんだ。

で、とりあえずジャージに着替える。あ、ちなみにジャージは普通の人は一組しか持つてないだろうが、俺は3組持つてゐる。なんでって？俺だからだよ。

「着替えたようですね。では、訓練を始めます。」

「……着替えてる途中だったらどうするんですか。訓練って何ですか。そもそも何で着替えさせられたんですか。」

「うーん、ツツコミは一つにまとめてほしいものですね。」

いや、それならツツコミどころは一つしかない様に話題を進めてくれよ。

「何故着替えたか、これから体を動かすので、動きやすい服装がいいからです。訓練とは何か、戦闘訓練です。着替えてる途中の可能性、僕は普通に女の子の方が好みなので別に君の裸を見ても苦しむのは僕です。」

「……僕も苦します。」

ではなくって……！ツツコミどころはそこでは無い……！

「戦闘訓練ってなんですか！？俺一般人ですよ！？」

「君はかなり特殊な部類ではありますが、一応『異能』の持ち主です。なので、ある程度の身体能力の上昇がある……要するにこちらの世界に入れるはずなのです。」

「……はつきりいつて入りたくありません。」

「却下です。」

ニツコリ笑顔で却下される。なんかこいつほど脅迫っていう言葉が似合うやつもないと思うんだ。まあ逆らうことはできない訳だけど。否、逆らおうとは思わないけど。

「では、内容を説明します。今から僕がB B弾を指ではじき出しますから、それをひたすらに避けてください。まあ、簡単に言えば逃げ回ればOKです。」

「なんだB B弾なら」

ヒュゴツ。メゴツ。

俺のセリフを遮る不吉な音。前者は風切り音。後者は破壊音。……俺の後ろの、アスファルトの壁の。耳元を掠めたB B弾は、髪の毛を吹き飛ばし、そのまま壁にひびを入れていた……っておいおいおいおい……！

「ひ、ひよえ……！」

「B B弾とはいえ、私が全力で打ち出せばこのくらいの速度が出ますね。当たれば痛いと思いますので、頑張って避けてください。」

「ひゃ、ひゃいいい！！！」

いやいやいや遺体で済むわけねえだろ！無理無理無理！死ぬ死ぬ死ぬ！いやだつてBB弾で壁にひび入るってどんだけだよ！俺の頭蓋骨は多分アスファルトよりは脆いよ！

「まあ心配しないでください、いきなりあのスピードで連射したりはしません。もうちょっとゆっくりめから慣らしていきましょう。」

「いやいやいやそれでも見えない！速い！死ぬ！」

「まあ一応急所にあたれば死ぬかもですねー。」

「なんでそんなにのんきなんだよこっちは命かかってんだよ！あ、こら、打つな、いだ！！！」

「はははー。」

打ちこまれた弾丸が顔を庇った左腕を直撃する。折れたんじゃないかってくらいの衝撃。軽い分腕が弾かれたりはしないが、何発も防ぎ続けられるものじゃない。やばいやばいやびあ！あ、舌嚙んだ！

「とりあえずしばらく逃げ回ってください。連続十分間避け続けられたら次のステップに行きましょう。まあ、これはすぐ終わりますから、とりあえず殺されない様に頑張って逃げてくださいねー。」

「殺そうとしてる本人がなにをいうだー！！！」

うん、こんな時にまでネタが出るとか俺もすごいなー、とか思う。うん、あれだね、人間ホントに追いつめられると思考は妙な所にトんでいくもののかもね。

とりあえず、こうして俺のデ。ゲームが始まった。

シンは笑顔のままBB弾を乱射し続ける。いや、乱射、というのは場合間違いだろう。彼の持つ『最善』の異能を用いて、俊也の生命、運動能力に異常をきたさないポイントを正確に狙い続けているのだから。もちろんその内何発かは俊也が下手に避けようとしたせいで出血や筋を痛めるのに繋がっているのだが。

（ふむ…。柊さん、榎田君に比べても遜色無い成長速度ですね…
…。）

内心で舌を巻く。実は彼の射撃は、最初の一発を除いて本気のものではない。最初の一発で「当たれば死ぬ」という意識を刷り込んだだけで、後は彼がギリギリで回避できる速度で撃っているのだ。のだが。

（既に拳銃くらいの速度は出てるんですがね…。）

ここまで掛かった時間は、およそ一時間。ペースだけなら柊、榎田を上回る。だけなら、とつくのは、回避の姿勢が二人に比べてあまりに悲惨で、余裕が全く以て無い為である。それでも避け続ける分には避け続けているのだから、凄いやえば凄いかもしれない。

「ひいっ！死ぬっ！あぶっ！」

「んーもうちょっと余裕が欲しいですねえ。」

「うおっ！つてぎゃふ！」

なんとか回避した弾丸でバランスを崩し、避けられなくなった一

撃が額に直撃する。一応弾速はやや抑えてあったが、頭が仰け反る程度の威力はあったようだ、俊也が額を抑えて蹲る。

「一応一時間ほどやってますしね。少し休憩しましょう。」

「目が、目があああ」

「目には当ててませんよ。ちょっと使いどころが違う気がしますね。」

そう言い残して訓練室を後にするシン。逆にそのままぱったりと後ろに倒れこむ。俊也。ほんの一五分ほどの休憩に過ぎなかったが、相当に疲れていたのだろう、そのまま眠りに落ちてしまった。

額へのBB弾の一撃で起こされ、直後右耳と左耳にそれぞれあと一センチずれたらピアス穴が空く弾丸が放たれたのは、多分彼のせいではないだろう。

「十分、避けられましたね…。」

「もう駄目…死ぬ…無理…。」

「普通はもう少し効率的な避け方を身につけていくものなんです…。いいんでしょうかねえ…。」

「いや、もう許して…。」

「…ま、いいでしょう。次に行きましょう。二分で終わります。」

「はいい？」

俺、とりあえず立ち上がる。まあ、二分で終わるつつってんだか

ら逆らう理由は無い。この時、俺は気付くべきだった。イケメンメ
ガネが、なんか不自然な態勢をしていた事に。具体的に言えば、ち
ようど懷に右手を入れるような感じ。

ちようど懷に右手入れるような感じ。

うん、この段階で気付くべきだったね。

ああ、もう、ね。この状況でこいつだったら当然だよ。うん、
出てきたのは、やっぱり銃だった。てかおい、でけーよ、こついよ。
なんか護身用って言えないレベルじゃね？

「コート社製の45口径の最新型、の改造型です。まあこういう
ときにしか使いませんしね。火薬の分量を調整してあり、通常35
0 m/sの弾速が800 m/s出ます。まあ、ホントはライフル弾
の1500 m/sが理想なのですが、あれはかさばるんですよ。」

「あ、あの…それってやっぱ…」

「はい、撃ちます、勿論。」

「えっと…」

「君に向けてですよ？」

「……。」

殺人予告ここに極まり。もうちよつとなんか言い方無いのかよ、
とか言ってる場合じゃねえ！マジで死ぬ、さっきまではBB弾だっ
たよ！？何いきなり超レベルアップしてるんだよ！俺逃げて！超逃
げて！

「さて、これを、君に向けて撃ちます。君はそれを避けてくださ
い。」

「いや無理ですよ。」

「出来ます。覚悟を決めてください。」

「いやいやいやいや。」

「では、いきます。」

「話聞けよてめえ！」

タンツ。

軽やかな音。固まる俺。揺るがない笑顔のメガネ。

撃ったよ。床にだけど。こいつ…本気だよ。

「信じてください、って言ったら信じますかね？」

固まったまま動けない俺。てかもうあきらめた方がいいかも。あ、儚い人生だったな…。

「君は、避けられます。君は、こんなところで死ぬような人ではありませんから。」

そういったメガネがゆつくりと手を挙げ。
半泣きで動けない俺に銃口を向けて。
ゆつくりと引き金を。

引いた。

タンツ。

――。

それは、俺の頭蓋を砕いた音、ではなく、後ろの壁に弾丸がめり

込んだ音だった。

不思議な、感覚だった。弾丸が見えた。というか、遅かった。なんか、さっきまでのBB弾の方が早かったような…。なんか、キヤッチボールの球を避けたみたいな感じだった。

「さっきので、800m/sです。まあ空気抵抗とかでもうちよつと速度は落ちるでしょうが、概ね銃弾はこの半分くらいの速度です。マシンガンと同程度でしょう。」

「あ…あの……。」

「ちなみにさっきまでのBB弾は1000m/sででたかもしれませんね。」

「……。」

俺はぺたりと尻もちをついた。やばいちょっとめれそうだった。危ない危ない。せふせふ。ホントに腰が抜けた。腰が抜けた事は人生で数え切れないほどあるが（ホントに数え切れないな。ハハハ）、これは抜け具合的にトップスリーだよ。

そのままぱったりと後ろに倒れこむ。休憩の前後の一時間は動きっぱなし、最後はホントに命かかってたし。疲れてもおかしくないだろJK（常識的に考えて）。

「ま、これでちょっと拳銃向けられても頑張れば死なないですよ。頑張ってくださいね。しばらく休憩したら、帰っていいですよ。パルカちゃんに飲み物を持ってきてもらいましょう。」

「……どうも。」

「では、明日は、朝十時くらいですかね、事務所に来てください。まあ、突入は夜になると思いますが。では、さようなら。」

「……。」

「君は、強く「は」になりましたよ。あとは、覚悟をするだけです。」

なんか最後に厭味ったらしい台詞といつものニヤけ笑顔を見せて去って行った。そのまま天井を眺めながら、ゆっくりと目を閉じる。あ、なんか一時間前におんなじことした気がする。デジャヴ？

あーピアス穴が開くー…

ピト。

「ひゃあうん！」

「ひゃあー！？」

前者、俺。かわいくもなんともない。後者、美少女パルカ。超可愛い。お持ち帰りしたいくらい。やったらイケメンメガネに生まれてきた事を後悔させられそうだからしないけど。

「あ、あの…」

「あ、飲み物持ってきてくれたの？ありがと。」

「はい。」

手渡されるコップをそのまま口につけ、一気に飲み干す。うん。

おいしい。なんか久しぶりに水を口にしたような感じ。でもね、そんな事よりも大事なことが一つ。

「なんか俺に言いたい事あるの？」

「え…うん……。」

そのままもじもじし出す美少女。とりあえず飲み物飲みながら待

つ俺。待つ、つつーか息が結構まだ乱れてるからあんまり急いで喋りたくないんだよね。もじもじする美少女の横に座り込んで乱れた息をしている俺…ちょっと、いやすごく絵的にやばいが、腰が抜けて立てないのでそのことは考えないようにする。

「あの…ね。」

「うん。」

「きのう…どうだった…？」

「昨日？ああ、アレ。落ち込んだ。」

「…。」

「え、それじゃなくて？」

「たすけるの、いやじゃなかった？」

「んー、折角生きてるんだし、生きてた方がいいんじゃない？」

とりあえず脊椎反射で答える。

「たとえ、しにたくても？」

「まあ生きてりゃいい事あるんじゃない？」

「…いいこと、なくても？」

「きつとあるだろ、いつか。」

これも脊椎反射。まあ、これはおれの人生のモットーだし。大体こんな人生、何時かいいことあると思っただけでやってられっかつての。

「しにたい、とおもったこと、ある？」

「…あるよーな、ないよーなんだな。ま、誰でも一回は思った事あるんじゃない？」

「めいわくかけるとしても？」

「さあ？生きてりゃどっかに迷惑掛けるだろ。気にしてもしゃー

ない。」

「それが、どんなにおおきくても？」

「？ま、それでも生きてくんذارーな。生きてなきゃ謝れねーし。妹に申し訳ねーし。」

「……………」

まあ、普段からそこまで深く考えてるわけじゃねーけど。

「いいんじゃない？生きてたかつたら生きていて。それは誰も文句言えないだろ。」

「そう？そう、かな。そう、なんだ。」

「そんなもんだろ。深く考えてもしょうがねえよ。」

そんなもんだと、俺は思ってるし。よっ、と気合を入れて立ち上がる。うん、なんか銃弾避けるとかとうとう人間やめちゃった感があるね。こういうのも、深く考えない様にしてる。考えない。考えてはいけない。

「んじゃ、とりあえず、今日はもう帰るわ。お疲れ。」

「うん。ありがとう。」

「なんかした覚えは無いが。こちらこそ飲み物ありがとう。」

「うん。また、いろいろはなそうね。」

「おう。んじゃ、乙。」

そんなどうでもいい会話をした後、訓練室（と呼んでいるらしい）から出て、そのまま家路につく。いや、長袖に隠れて見えないけど、結構腫れてるところとかあるんだが、「帰って妹にでもしてもらえや」的な目でメガネに見られたしね。

——この時、俺はまだ覚悟なんて出来ちゃいなかった。
まあ、していたら何か変わったか、と言われると変わらないのだ
が。

これが、平穩の終わりだとは、全く思っていなかった。

五日目（金）　　〽特訓〽（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

六日目（土）　　ゝ離別ゝ

「……は？」

「何度も言わせんなよ……。」

何が起こったのか分からなかった。

ただ、いつも通りに今日も過ぎるものだと思っていた。あの、巻き込まれながらも、騒がしくも、充実した日常が、ちよつと逸脱したけれど、それでも日常が、続くと。決戦と言っても、自分の知らないところで起こって終わっていくものだと。

それは、間違いだった。

思い知った。俺が甘かった。

「ダンナが…、シンが、殺された。」

「うそ、だろおい……。」

「……。」

「だって、おい、昨日まで……。」

「ダンナは、昨日何か言ってたか？」

「い、いや、特には……おい！うそだって言えよ！ドッキリしろ！」

「ならいい。信じられないなら、地下のダンナの仕事部屋にいてこい。柊もそこにいる。」

「なんで…」

「俺は、柊になんて言っていいか分かんなかった。だからここに
いる。」

榎田が壁に凭れかかったまま呟く。その顔にあるのは、隠しきれない焦燥。苛立ち気味に頭を掻き毟る。苛立つ、ということ自体がそもそも彼にとっては久しぶりの事である。その事にさらに焦りを覚える。

（今、全体の指示は、俺が出さなきゃいけない…。柊は、あんな
だし…。）

年長者の責任、というわけではないが、彼はそう考えていた。彼は口ではどうでもいい、職を失う程度だと言いながら、内心では分かっていたのだ。この事務所無しでの生活などもう出来ない事を。

（どうすればいい？どうすれば、この事務所を続けていける？）

必死に考える。彼の『異能』は、差し迫った危機しか助けてくれない。『最善』の能力のようにこんな状況を打破する方法を教えてはくれない。

（若大將は何も聞いていない…。柊は動かない…。くそっ！）

頭をガシガシと掻き毟る。彼の苛立った時の仕草。この事務所でシンに出会い、『異能』の付き合い方を知って、柊やパル力達と出会ってからは、全くする事がなかった仕草。

路地裏でチンピラ達相手に殴り合いばかりしていた時期の仕草。

あの頃には、戻りたくなかった。

（あのダンナが、何も残さず死んだはずがねえ…。何処かに後から俺達の助けになる様なものを残してるはず…敵の素性や、場所の見取り図、やるべき事とか。例えば、事務所のディスクや、ロビーの予備ノートPC。携帯…。）

そうだ。あのシンなのだ。何か手を打ったはず。ならば、それを探すのは、自分の役目。

いや。

役目ではない。そんな責任感や義務感でやっているわけではない。

（俺がやりたいから、そうするんだ。）

榎田は、覚悟を決めた。それは事務所の人間の中で最も早く、ただ一人己のみの力でたどり着いた覚悟でもあった。

「あ、あつ…っ。」

入った瞬間、吐き気がした。地下室に張り付いているのは、血、血、血。

文字通り血溜まりができているところもあれば、飛び散ったもの、引き摺ったような跡もある。この前見たものとは、比べ物にならない量。確かにこの量が一人から出たなら確実に死んでいるだろう。二人でも重傷は間違いない。

(う、うプっ！)

戻しそうになるのを、必死にこらえる。俺が今吐くわけにはいかない。それは、目の前にいる柊への、ひどい裏切りな気がした。

「く、はあ、はあ……。」

そう、柊は目の前にいた。ひときわ大きな血だまりの中に、ぺたりと座り込んでいた。普段の凜として毅然とした姿が嘘のように、女の子座りで。体のいたるところに、血の染みが付いているのに構いもせずに。

「つつ！」

その理由は、すぐに分かった。顔を見ようと横に並んだら、すぐに分かった。俯いて顔は見えないが、その両手が大事そうに抱えているものは見えた。

それは、左脚。

見覚えのある服は、間違いなくメガネの来ていたモノ。

それが、膝の部分で無残に千切れていた。

ハッキリ言ってしまうおう。切断面のぐちゃぐちゃになった様子を見るに、俺はとても触れない。近づく事も出来ないだろう。

だが、これを抱きしめる柊を、蔑むことはできない。出来るわけがない。

だが、尊敬するわけにもいかない。それは何か、ひどく歪んだも

ののように思えた。

「柊…。」

「全部、聞こえている…。」

「そうか…。」

「恨めしいものだな…この『読心』は…。」

「そっか。」

「分かっている…。だから…一人に…してくれないか…。」

それは、出来ない。そうするわけにはいかない。それは、俺までひどく歪んだものの一つになってしまっようだった。だから、俺はふざけた。

「だが断るっ！」

ふざけるべきだ。ここで自分も悲しみに暮れていても、どうにもならない。俺はここは嫌な奴になって、殴り飛ばされればいい。それで柊が立ち上がるならば。だから、ふざける。

「ああ、聞こえなければいいのにな…。この声が。」

「あ…。」

「…気持ちだけ、貰っておく。…ありがとう…。」

俺、大馬鹿野郎じゃねーか。こいつ『読心』持ってるじゃんか。俺の考えている事お見通しじゃねーか。

やっぱ、慣れねーことなんかするもんじゃねえな…。俺、ヘタレだし…。普段は励ますどころか憐れまれてるしな。俺なんかには、手に余る事なんだよな…。

「外、出てるから。」

「……。」

「じゃあ、な。」

「……。」

「な、なんにもないよな……？」

「……師父は。」

「はいっ！？」

「師父は、最後に何と言っていた？」

「……えと、……あの、……強くなった、って。あとは、覚悟をするだけだ、って。」

「……。そうか。私の事は、なにか言っていたか？」

「え、あ……。」

「そうか。分かった。」

「……。……んじゃ。」

心を読まれ、何一つ励ましの言葉をかけられないまま、俺は地下室を後にした。ヘタレだ、ヘタレストでも当然だ、なんだよ俺、こんなに駄目な奴かよ、そんな事も知らなかったのかよ、身の程知らずが。そんな自分への口汚い罵声も聞こえただろうに、柊は何も責めなかった。

「おお、若大将。」

出たところで、チビガキに話しかけられた。というかおい、チビガキ、なんかすげえぞ。ものすごい勢いでロビーの机やら棚やらを漁りまくってる。なんかキヤラ違うね？ご、御乱心！？

「なんか、どうにもならなかった…。すまん。」

「いや、気にすんなって。若大将のせいじゃねえよ。俺も何も出来なかったしな。」

「で、えっと、何やってんだ？」

「あ、ああ。ちよっと、調べ物をな。多分ダンナが資料を残してるだろうと思って。敵の素性とか、森羅電気の内部情報とか。」

「ああ、なるほど……お？」

嫌なワードが耳をよぎる。以前は雲の上の巨大企業で、ここ数日でずいぶん身近に感じていたワード。

「森羅、電気？」

「ああ、今度の事件は、森羅電気にテロリストが夜襲する、という流れで起こるらしい。だから敵のテロリストの素性とか、森羅電気の詳しい工場の間取りとか…ってオイ、どうした、若大将？頭なんか抱えて。猫のクソほどもかわいくねーぞ。」

「いや、すまん。ちよっと混乱しててな。」

「森羅電気は、裏で武器の生産、輸出とかしてるらしいからな。その辺も踏まえて、っておいどうした？オーオールゼットみたいになってんぞ？」

「いや、すまん。ちよっと絶望しててな。」

ああ、そうかよ。どこまでも俺の日常を壊すかよ。くそつたれ。この一週間全部真っ黒じゃねえかよ。そう言えばルリ女史とデートの時、間取り覚えとけって言われてたのはこれかよ。全部計算ずくだったってわけだ。

「あー。うー。」

「おい、しっかりしろ、本題に入るぞー。」

「おう。」

そういつて立ち上がる。ヘタレを自覚した俺にとって、切り替えはたやすい。いつまでも引き摺っても仕方ない。…だから、この胸の痛みも嘘だ。切り替えられる。

「で、なんだって？」

「おう。あの、な。」

この段階でやっぱり俺は気付けなかった。チビガキの目が、異常なほど鋭い事に。

「パルカの嬢ちゃんが、攫われてる。胸糞悪いが、予定どおりっちゃあ予定通りだ。俺は、これから助けに向かう。…だが、シンが、俺達の中で最強の実力者が、殺された。これからは、命の安全を誰も保証できないんだ。だから、ここで、引き下がってくれないか？」

「……え……。」

「俺やレンは、もう引き返せない。ここできか…ここを守ってしか、生きられない。だから、最後まで戦う。でも、若大将はそうじゃねーだろ？他に帰る場所も、待っている人も、戻るべき日常だってある。俺達と、命を懸けて関わる必要はねーんだ。」

「あ……。」

「だから、少し早いが、バイトは、今日で終わりだよ。ほら、封筒。さつき見つけた。」

「……。」

「わりーな。…最後に、こんな事になってよ。」

俺は、おれは。どうするんだろう。昨日、ほんの昨日までのイケメンの笑み。圧倒的な力で、揺ぎ無い自信と余裕で、俺と戦ったシン。よぎる、「覚悟」の言葉。

俺は。

おれは。

「あ、ありがとう……。じゃあ……。」

「おう。達者でな。」

ヘタレだった。どこまでもヘタレで、どうしてもヘタレで。

ドアを音も無くくぐった俺は、みつともなく泣いた。自分への嘲笑を隠しきれず、醜く歪んだ顔で。涙を、ぬぐうことも出来なかった。

ドアが閉まった時、全てが遠くなった。チビガキとの馬鹿な会話。柊の怪力と天然。イケメンメガネの脅迫。パルカの上目づかい。

（もう、何も考えたくない……。）

俺は、歩いた。なるべく人気のない道を、死んだように。

六日目（土）　　ゝ離別ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

六日目（土）　　（瑠璃）

（ああ、明日だ……。）

瑠璃は、ゆっくりと目を覚ます。普段は弁当を作るために早起きする瑠璃だが、本来低血圧の彼女にとって、休日は惰眠をむ貪るためにあるといっても過言ではない。

この日も、瑠璃が目を覚めたのはもう日が傾き始めていた。これは珍しい事ではない。が、

（今日と明日くらいは、何も考えずに眠っていたい……。）

この土日は、森羅にとって特別な日。森羅の所有する最強にして最凶の兵器。『新兵器』の完成と、出荷の日。今日の夜までには完成しているだろう。そして明日、極秘に出荷される。管理データを見るに、遅延は無い。今日、完成するだろう。

そして出荷され。

たくさんの人を、殺す。

未来永劫にわたって、殺し続ける。

（もう、何も考えたくない……。）

布団の中で寝返りを打つ。自分がそれに、間接的には言え関わっている事が、ひどく醜い事に思える。自分がこの手で人を殺している様な錯覚に襲われる。一番最初に見た悪夢は、まさにそれだった。

（『新兵器』…。大規模設備を持つ、森羅だから可能な兵器…。）

『新兵器』には、まだ名前はない。使われて初めて名前がつくだろう。悪魔の兵器として。あえて呼ぶならば「誘導ステルス核砲弾」。大陸間さえも横断しうる、尚且つ炸裂するまで相手には存在を示さない兵器。ステルス、という特性上、抑止力には向かない。使うための核兵器だ。世界に流れた数だけ、大都市が消えるだろう。

（なんで…。こんなことに……。）

なぜ森羅が、実の家族がそんなものを作ろうと思ったのかは分からないし、分かりたくもない。その血が流れている事が苦しい。自分にも、罪があるように思う。いや、様に思う、ではないか。自分も同じであろう、と。

（逃げてしまおう……。）

ちつとも帰って来てくれない眠気に、二度寝を諦めた瑠璃は、枕元の携帯電話に手を伸ばす。開いた画面には、いくつかのメールの着信。そっけない仕事のメールばかり。それらをまとめていらぬフォルダに放り込み、メールの作成画面を呼び出す。

「ん」。まるで付き合っているみたいですね。ふふ！」

少しだけブルーな気分から抜け出し、常人とは一線を画する速度で携帯のボタンを打つ。逃げてしまえばいい。今はまだ、逃げられない境地では無いのだから。

件名：こんにちは！

本文：お忙しい、って言ったのにメールしてすみません！起きたらこんな時間で、ちょっと俊也さんとお話ししたくなってしまいました（笑）今日と明日は私でござるところにいるだけです、もし時間が空いたり、聞きたい事があつたらいつでもメールしてくださいね〜！

さて、本題です！本題と言うか、これも雑談なんですけどね（笑）月曜日もお弁当を作っていくつもりですが、バイト代が入りまして、私のお財布に少し余裕があります！なので、な、な、な〜んと！！リクエストを受け付けます！

なにか好きなもの、食べたい物とかありましたらメールしてください！無くてメールくださいな（笑）

あ、忙しかつたら、返信は後でいいですよ〜！

一気に打ち込んで、そのまま送信。タイプミスをしなくなつてからも随分経つな、と瑠璃は心の中で呟く。

（このまま、ふたりで甘えていたい…。逃げられるところまで逃げて…。）

そんな甘い幻想を抱く。お互いに甘え合つて。醜いところを隠し合つて。傷をなめ合つて。でも、支え合つて。

センスのいい明るいう着信音。予想より遥かに早い返信に心を躍らせて画面を見る。

だが。

その返信は、彼女の甘い夢を、あつさりと砕いた。

件名：Re：こんにちは！

本文：森羅電気の、武器工場の事、どこまで知ってる？

大した意味はない。ハッキリ言おう、大した意味はない。大事な事だからな。

届いたメールを見た時、いらついた。俺を巻き込む真つ黒の一人が何を言つかと。だから、ついむしゃくしゃしてやってしまった。

件名：Re：こんにちは！

本文：森羅電気の、武器工場の事、どこまで知ってる？

これで、もうメールは帰ってこないだろうな、と思った。数少ない友達の一人を失ったわけだ。ははは。なんかね、もう。自暴自棄、つてこういうのを言うのかもね。いや、知らなかったら、「何ですかそれ？」って返信来て、「なんでもないよ、ははは」で済むのかな？良く分らんが。

~~~~~

だが、きた返事は、無情だった。

件名：無題

本文：どこで聞かれたんですか？それを。教えていただけるなら、教えていたきたいです。質問には、お答えします。答えは、すべ

て、本当にすべて知っています。私は、森羅のセキュリティ管制室室長ですから。

ああ。やっぱりそうか。あんたも、そっち側の人間だったのか。もういいや。話すことなんてない。俺は返信を打つことなく、ケータイを閉じた。そのまま歩き出す。

くくくく

が、またケータイがズボンのポケットで震えだす。

件名：無題

本文：軽蔑しますか？

ああ、なんだろうな。こんなに気持ちは荒みきっているのに、機嫌とらなきゃ、って考えてる自分がいるね。ヘタレだろ、女の子をふっ切る度胸も無いってことだ。

件名：無題

本文：いや。俺もおんなじだし。自分にできることに自惚れてさ。覚悟も無い癖に関わって、怖くなったら逃げ出して。おんなじだよ。

打ちこみながら、また泣きそうになった。なんか今日は涙腺緩いのかもな。どんな返信来るんだろうかな？「いっしょにすんな」とか？

♪♪♪

はは、ルリ女史もヒマだな。こんな奴の鬱話の相手なんかしてさ。

件名：無題

本文：逃げませんか？一緒に。

はは。なに言ってるんだよ。もう逃げてるよ。

♪♪♪

件名：無題

本文：覚悟の無い私達は、もともと関わるべきじゃなかったんですよ。だから、一緒に逃げてしまいませんか？私と俊也さんと、二人で。どこか遠くで。のんびりと。

♪♪♪

件名：無題

本文：私は、俊也さんと一緒です。だから、俊也さんを助けたい。そして、俊也さんに助けてほしい。甘えて、逃げて、でも支え合って。それでは、駄目ですか？

ああ、面倒くさい。この時の俺は、そう思ってしまった。俺は普段の冷静（ツツコミはもういい）な頭の回転を失っていた。もし冷静なままだったのなら、気付いただろう。ルリ女史がどんなに俺

の事を心配していたか。俺を気遣ってくれていたか。どれだけ涙を流しながら、痛みに耐えながらこのメールを打ったのか。そして、どれだけ俺に助けを求めていたか。

冷静さを失った俺は、そのままメールを作って送ろうとした。

件名：無題

本文：そうだな。ヘタレだし。この m

♪♪♪

メールを作っているときに、割り込む着信。それは、妹から。

ただ一人。真っ黒な世界に染まらない、染まらせてはいけなかった妹。その表示を見ただけで、また涙が溢れそうになる。

件名：無題

本文：夕飯はどうしますか？最近にーさんは、なんか変わりましたね。いつもは「怖いから外出ない」とか言ってるのに、今日はえらく社交的ですし。

行動も、なんだか良くなっているように思います。だから、無理に帰って来いとはいいません。この調子で頑張ってください。夕食の返信は忘れずに。

ああ。それは勘違いだよ、森音。それで、取り返しのつかないとこに足突っ込んだじまつたんだよ。だから今から俺は…。

俺は。

俺は、逃げられるのか？

逃げて、いいのか？この、自分を信じている妹を残して？

心が、揺れた。返信を打つ手が止まる。

♪♪  
♪♪

続けてなる着信音。登録外のメール音。

開けたメールの最上段に書いてあった文字は。

題名：遺書

これ以上ない分かりやすいタイトル。

それは、事務所の三人あてに送られた、死者からのメッセージだった。

六日目（土）　　く 瑠璃 く（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

## 五日目（金）　　しん

時は少し、遡る。そう、サブタイトルの通り、五日目の終わりへと。

ガタリ。

ドアの開く音がする。シンの鋭敏な聴覚がそれを捕える。ゆっくりと枕元から立ち上がる。時刻は深夜だが、元々丸二日徹夜するつもりだったシンにとって、体力と精神力、集中力は十分に維持されている。

部屋を出る直前、ちらりと部屋を…ベットで蹲るように眠るパル力を、最愛の妹を見やる。

（かならず、守ってみせます。）

そう決意し、気配を消して相手の動向を察知するのに専念する。

トツ、トツ、トツ…。

限界まで消された足音は、相手が相当の強さを持つ事を物語っている。だが、この音は、階段を降りる音。

（という事は、地下室に行くようですね…。好都合です。）

気配を消したまま、ゆっくりと地下室へと向かう。住み慣れた自分の家だ。目を瞑っていても余裕でたどり着ける。閉めるときに鳴る音を警戒したのか、僅かな隙間を残したドアをゆっくりと開け放

ち、

「こんばんは。こんな夜中にウチの事務所に何のご用でしょうか？」

電気を灯して侵入者たちに陽気に声をかけた。

「おお、あんさん、ずいぶん気さくなやつだな。ワイらの事、知らへんわけでもなかるーになー。」

「楸シン、だな。」

「どんな時も挨拶は欠かさない様に気をつけてるんですよ。」

（相手は二人、か…。）

素早く目線を走らせ、相手の情報を少しでも得ようとする。シンの能力『最善』にとつて、敵の情報は生命線である。少しでも集めておくに越したことはない。

一人は、長身細身の黒ずくめ。深く被った黒のニット帽と、黒のタートルネックの高い襟元のせいではほとんど顔が見えていない。というか、長袖長ズボン、極めつけは黒の革手袋と、肌の露出がほぼ無い。顔が見えない、即ち表情が読めないというのは、情報戦においてやや厳しい。

もう一人は、方言の混じった言葉遣いの大男。無駄のない筋肉を見せつける様なランニングのTシャツに、頭には柄物のバンダナ。顔には榎田やシンとは違うタイプの笑い顔が張り付いている。嗤い顔、とでもいうべき顔が。

二人とも完全に季節感無視だが、そんなことにいちいち突っ込むほどシンは酔狂ではない。

「ええ、仰る通り私が楸シンですが。なにかご用ですか？」

「君に用は無い。未来予知能力のある、君の妹の居所を教えても  
r」

「まーまー。ゼツやん。そんなに力ツカすんなやー。ワイは、あんさんにも用事があんねん。えーかな？」

「なるほど。そう誤解したせいでパルカちゃんを狙おうと。情報源は、いままで助けた人たちですかね…。納得です。で、私に用事ですか？何でしょう？聞くだけ聞きますが。」

「ウチの…『姓無』の一人、ジユウってえやつがこの人と戦つて、結構つよかったゆーとったんや。それはあんさんか？」

（やはり、『姓無』。しかも、ここにいない人間が最低一人、恐らく柊さんが相手取った者…。）

『姓無』については、確認にすぎない。この自分がすぐむほどの、これだけの殺気、単なるテロリストのはずがない。だが、人数は、有力な情報だ。

この後の、この二人を片付けたあとの作戦に関して。

「私ではありませんねえ。」

「そーんなや。残念やなー。んじゃ、質問変えたつたるわ。」

そう言つて、ニヤリと、嗤う。さっきまでの殺気が、さらに倍増する。歪んだ嗤いのまま、最強の殺人鬼『姓無』は告げる。

「あんさんは、そいつよりつよいんか？」

「ええ。私の教え子ですから。」

「…カカカツ！即答かいな！ええで、あんさん、気にいったで。  
…そやから。」

そう言つて、より一層嗤いを深める。目が、喚起と狂気に妖しく輝く。

「ワイと、殺し合おう。この『姓無』最年長の、コウト。」

言つや否や、真正面から打ち出されたような速度で、殺人鬼が飛びかかる。人間の常識の壁を越えた、向こう側の世界の戦闘…、いや、殺し合いが、始まりだった。

「ッ！…！」

横に跳び退つて回避するシン。

ゴゴバツ！

派手な音をして、砕け散る。

コンクリート作りの、床が。まるで隕石でも落ちた後のようにクレーター状に抉れた破壊痕を見れば、避け切れなかったらどうなっていたかは一目瞭然だ。凄まじい破壊力、人間離れしたスピード。

だが。

（勝てない相手では、無さそうですね。）

見栄でも虚勢でもなく、シンはそう思った。確かに人間離れたスピードだが、辛く採点しても自分と同程度でしかない。破壊力は自分よりはるかに上だろうが、これは回避できるのなら問題ないのだから。

そして、見たところ、武器の類は、この男は持っていない。ならば、自分の指弾を使って距離を取りつつ戦えば、負けは無い。

（あとは、もう一人の動きに気を配って、）

「よそ見はナシやでえ！これはタイマンや！ゼツにも手出しはさせへん！」

ザリツ、という嫌な音と共に、シンの凭れていた壁に爪痕が入る。前屈みにかわしたシンにそのまま打ち下ろしを狙う。

「だから、ワイだけに集中せえ！」

が、間一髪で横っ跳びに回転し、距離を取る。と同時に、

（この一撃で、決める！）

両手に握った鉛玉を、手加減なしの全力で打ち出す。狙いは、こちらを向いた顔のうち、さらに急所である、眼球。

左右一発ずつの指弾が銃火器をはるかに上回る速度で打ち出され、正確に殺人鬼『姓無』の目玉に吸い込まれていった。

カランッ。

「なっ！！！！」

狼狽した悲鳴は、シン。彼には、その前の音が、何の音かを考える余裕さえ無かった。

（指弾が、効かない！？弾かれた！？なぜ？）

確かに急所に打ち込んだ。スナイパーの常識にもれず、しっかりと着弾を見届けた。見届けなくても、避けられなかっただろうタイミングで撃ったし、見たところ避ける素振りも無かった。

避ける、素振りも無かった。

避けようと、しなかった。

（なぜ！？威力だけならライフル弾と比べても遜色無い指弾が、なぜ効かない！？瞼など、鍛えようのない部位のはず……！？）

「あんさん、やっぱえー腕しとるでー。あの一瞬でワイの振り向きを計算、しかも的確に目ん玉狙うなんてのー。やけど、おしいな。」

「……。」

「今、必死に考えとるんちゃうん？なして効かへんのか。何が起きたんか。なんならおしえたったるか？」

「……ッ！」

話し込む殺人鬼を遮って数発の指弾を放ち、それを目くらましに懷に飛び込む。狙いは、鳩尾。的確に計算された蹴りが的確に胴体

に吸い込まれる。体重の乗った、威力だけなら先の指弾を大きく上回る一撃。

ガキンッ

発されたのは、肉と肉がぶつかり合う音では無かった。まるで…。

そう。

まるで、金属音のような。  
金属を蹴りつけたような。

「なっ…。」

必殺の一撃を守る動作さえ無く防がれたシンに、動揺が走る。そしてその動揺は、一瞬の隙を生む。ほんの一瞬、しかし取り返しのつかない一瞬。

「ほか、聞きとーはあらへんか。なら、よつと、いくでえ！」  
「っ！」

蹴りこんだ左脚の足首を捕えられ、接近戦からの離脱を封じられる。と、同時に、見上げるような姿勢から見えるのは、

不気味に笑う殺人鬼と、

大きく振り上げた右の拳だった。

「はあっ！はあっ！はっ！」

「あんさん、ずいぶんと頑張るのー。そろそろ失血きついんじゃないんかい？」

「そっちこそ、全部防ぐのは出来ないみたいですね…。」

シンの言うとおり、殺人鬼、コウも無傷では無かった。着ていたTシャツは指弾で穴だらけになり、その内いくつからはしっかりと出血している。だが、いずれも急所を外したもののばかりで、致命傷には至っていない。

それに対して、シンは間違はなく致命傷だった。ダメージを受けているのは、左脚。一撃、ほんの一瞬の隙を突かれた一撃以外は、すべての攻撃をかわしている。

だが、その一撃は、シンの左脚を文字通り吹き飛ばしていた。

振り下ろされた右の拳を、体幹の筋肉だけでかわしたが、捕えられている左脚はどうにもならなかった。膝を砕かれ、文字通り砕かれた為に左脚が千切れ跳んでいるのだ。

それから、シンは片足だけで全ての攻撃を避け切っていた。時に転がるように、時に左腕を足の代わりにしながら、全力で避け、その合間に指弾で反撃を続けた。もう一撃くらえば死が免れないのは分かっていたが、逃げていては勝てない。シンはまだ、勝ちを諦めてはいない。その過程で、情報を得、『最善』の能力につき込む。

（恐らく、コウと名乗ったあの『姓無』の異能は、人体硬化、とでも言うべきものだろうね……。ダメージをたまには与えられていますし、交錯の瞬間のみ『異能』を使っているのでしょうか…。）

今ならば、恐らく互角以上に戦う事が出来る。『最善』で見えるのは、避け続けながら、「相手が知覚出来ないような攻撃を仕掛ける」、あるいは「相手が硬化させるであろう部位とは別の個所を狙う」。この二つなら、簡単ではないが、不可能ではない。

もし自分の体が万全の状態であつたなら、の話だが。

（…駄目だ。相手のミスに乗じるこの方法では、時間がどれだけかかるか分からない。それに…。）

必死にかわしながら、足から噴き出る血を撒き散らしながら、視線を素早く走らせる。

もう一人の『姓無』、黒ずくめの男に向けて。

（もう一人がいる。今のこの男を倒したところで、こいつに殺されては意味はないんだ。）

心の中で舌打ちする。数少ない前情報が彼を追い詰める。『姓無』が二人一組で行動するのは、殺人衝動の暴走した仲間を止めるため、という情報。

（要するに、黒ずくめは暴走したこいつを止められる程の実力者……くそっ！）

（どうする？）

（どうする？）

（どうするのが最善だ？）

（何を目指すのが最善だ？）

掠めた打ち下ろしがシンの頬を裂き、また血が流れ出る。転がるように距離を取り、時間稼ぎにかならない指弾を放つ。痛覚と焦燥に、頬から汗が滴り落ちる。

（最善…私の、最善は。守るべきものは。）

脳裏に浮かんだのは、一人の少女の笑顔。必ず守ると誓った、少女の笑顔。

（そうだ。私の目指すべき最善は！）

その瞬間、シンは「覚悟を決めた」。「最善」の基準が変わり、人間の限界を超えた思考が走り始める。彼の選んだ『最善』は、パル力を、これから連れ去られるであろう最愛の妹を助け出すためにできる『最善』。

たとえそれが。

自分の命を棒に振るものとしても。

加速した思考に導き出された結論に従い、懐のポケットから携帯電話を取り出す。幸いまだ機能しているようだ。それを開き、常人にはあり得ない速度で、尚且つ殺人鬼の攻撃を回避しながらボタンを打ち込む。

メール三つ。件名は、全て統一して、遺書。パル力を助けるために必要なそれぞれに、一通ずつ送る最後の言葉。

「おお！？失望したで！？この期に及んで救援かいワレエ！」

「私がそんな非生産的な事をするとも？」

「うおっっ！ククツ、やっぱあんさんおもしろいでえ！」

突っ込んできた殺人鬼に数発の指弾を左手で打ち込む。片足代わりの手を攻撃に用いたことで回避能力が落ち、右足一本で転がるようにすれすれで横薙ぎの一撃をかわす。

それでも、携帯を打つ手は止めない。

思考も減速しない。

（榎田君にはヒントを、残り二人には…。届けばすぐに皆動くでしょうから予約送信で…。）

回避、攻撃。体が傷つき、そのキレは徐々に落ちていく。

だが、瞳に宿る光は、ますます鋭さを増していく。

「うおおっ！」

「あああ！！！」

壁が抉れ、機械が砕ける。だが、そんなことはもう、どうでもいい。

（完成！、送信、本サーバへ接続、受け取り完了！よし！これで端末が破壊されても送信はされる！）

成し遂げた…。

そう感じた瞬間、一気に体の力が抜けた。疲労と痛覚、失血が一気に押し寄せたようだった。そのままがつくりと片膝…もはや片方しかない膝をつく。それは、二度目の致命的な隙を作った瞬間。

（だが、もういいんだ。）

為すべき事は、為した。後は、自分が死ぬこと。この死が、他のメンバーの闘志につながり、勝率を…パルカを助ける可能性を高めてくれる。それが己の『最善』の導き出した答。

（私は、満足です…。）

シンは、誇りに思っていた。

未来を託せる仲間に恵まれた事を。  
託す道しるべを示せる己の『異能』を。  
守ると誓った妹を、最後の瞬間まで、いや最期を超えて守れる事を。

その誇りを、胸にしまつて。

顔には、血塗られ、困憊しきっているにも関わらず、普段と同じ微笑を浮かべ。

振りかぶった殺人鬼の拳を見届けて、目を閉じた。

五日目（金）　　ゝｼﾝゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

六日目（土）　　ゝ森音ゝ

（どれくらい、時間が経ったのだろう……。）

血溜まりに座り込んだ状態のまま、柊はふと考えていた。第一発見者だった柊は、朝、この惨状を発見して、震える手で落ちていたそれを掴み、ぺたりと座り込んでしまってから、そのままの状態だった。

榎田が入って来るまでは、何も考えられなかった。というか、榎田に声をかけられるまでの記憶が抜け落ちていた。その後、しばらくして、俊也が訪れて。何を話したかは、はっきりしなかった。まるで頭の中に靄がかかったように、思考が働かない。聞こえる『読心』も、呼びかけられる声も、自分自身の声さえも遠くから聞こえるような錯覚。

柊には、分かっていた。  
なぜそうなっているのか。  
何がそうさせているのか。

（考えたら、私は、きっと壊れてしまう……。）

霞んでいたかった。  
この現実を、受け入れないまま。  
そのまま、果ててしまいたかった。

b r r、b r r、b r r

だから、メールの着信なんて、取るつもりは無かった。その、遠

くから聞こえるような着信。  
短く三回バイブレーション。

だが。

b r r

「!!!!!!」

弾かれたように柊が顔を上げる。鳴るはずの無い、もう二度と鳴るはずの無い、四回目の着信音。唯一特別に設定した、シンからの、メールの着信音。

「つ!!!!!!」

慌てて携帯をスカートから引つ張り出す。慌てていたせいで震える手が上手く携帯を掴めず、床に取り落としてしまう。完全に固まった血液の上に、カラリと音を立てて携帯が転がる。

「師父っ!!」

涙声で叫び、携帯にすがりつき、両手でメールを開く。生きているのではないか、その最後の望みを、限りなくゼロに近い可能性に賭けて。

だが、最初に飛び込んできた文字は、無情にもその可能性を打ち消した。

件名：遺書

「あ、っああ。」

柊の喉から、嗚咽が漏れる。紛れも無い、シンの死を示す証拠。シン本人が、生きる事を諦めた証。その言葉は、部屋中に飛び散った血液よりも、柊が抱えている無残に千切れた左脚よりも確かな、シンの死の証明だった。

絶望に崩れかけた柊。

その心を繋ぎ止めたのは、次の一行。

本文：私は、自分でこの道を選びました。柊さんに、『私』を引き継いでもらえると信じて。ですから、絶望してはいけません。なぜなら、私なら絶望しないからです。

絶望にぶれた柊の目の焦点が、急速に戻っていく。

説教くさくなりましたね、申し訳ありません。しかし、私は絶望して打ちひしがれて、座り込んだ柊さんなんて見たくないですねえ。いつもの、凜として毅然とした貴方の方が何倍も輝いていて、格好いいですからね。

弾かれたように立ち上がる。呆けた顔を引き締める。

（師父が望むのなら。師父が、そうだと教えるなら！）

さて、長くなりましたがここからが本題です。既にパルカちゃん攫われてしまった後でしょうね。私が、楸探偵事務所の所長として行う最後の指示です。今日のミッションは、彼女の救出。他の事は、何も考える必要はありません。私がそうであったように、彼女を助けるための最善を尽くしてください。

力強く柊が頷く。さっきまでの様子が嘘の様に、力強く。

そして、これは指令では無く、希望です。願い、といってもいいですね。『私』の代わりを、お願いしたいのです。昔に、柊さんを助けたように、『異能』に苦しむ人達を、助ける役目を。

シンの、いた場所に。その場所を、守る、守り続けるために。

柊さんから見た『私』は、どうだったのでしょうか？

恰好良かった。強く、頼もしく。ずっと憧れていた。

これから、あなたがそうであってください。大丈夫です。あなたなら、私の事をずっと見てくれていた柊さんなら、きっと私と同じように、そしていつか私を超えてこの役割を果たせます。私が保証します。『私』を、よろしくお願いしますね。

——私の大切な仲間にして自慢の教え子、柊さんへ

少し、ほんの数秒だけ俯く。知らぬ間に濡れていた頬を拭う。

そして顔を上げた時には、もう、その面影はなかった。  
強い意志を秘めた瞳と、引き締まった表情。

シンの求めた、凜として毅然とした柊の姿。

柊蓮は、こうして、覚悟を決めた。

「くっそ、パスワードつつたら愛する人の名前だろうがよ……。  
その辺は抑えといてくれよなダンナ……。」

榎田涼は、行き詰まっていた。

覚悟を決めてからの彼の行動は、迅速だった。彼の事務所の予備パソコンの中から見つけ出したデータファイル。フォルダ名、「決戦」。間違いなくこれだった。他のPCからは見つからなかったことから、これが重要な、今こそ必要なフォルダだという事が分かる。

だが、パスワードが設定されていた。

「ちつくしよー。どうするんだってばよ……。」

幸い打ち込み回数制限は無かったので、思いついたものを片っぴしから打ち込んでいくが、どれも当たらない。当然、パルカの名前は一番に打ち込んだ。

♪ ♪ ♫ ♬ ♧ ♨ ♩ ♪ ♫ ♬ ♧ ♨ ♩ !

「んあ？メール？」

某有名ゲームのレベルアップ音が流れる。俊也ならば超反応した  
 だろうが、この場には彼一人だし、ツツコミを入れる人間は存在し  
 ない。

頭を抱えたままで、片手で携帯電話を操作して、メールを開き、

「っ！」

絶句し、

「ははっ！はははっ！……傑作だぜ。」

笑いだした。

画面には、開かれたメール。

件名：遺書

本文：君には余計な励ましなど不要でしょうね。パスワードは、「Parca」。ローマ神話、運命の女神の名前です。君の事だからパルカちゃんはParcaで打ち込んだんでしょう。では、事務所をことをよろしくお願いしますね、新所長。

言われた通りに打ち込んだフォルダの中には、『姓無』の考察や森羅電気の予想見取り図と『新兵器』の詳細、そして、事務所の詳細。

「そうかよ、丸投げかよ。…だが、それも、悪くない。なあ、レ  
ン。」

笑いを噛み殺しながら、音も無く後ろに來た柊に、唐突に声をかける。

「……良く分かったな。」

「分かるさ。そんなバリバリの闘志を放ちまくってたらな。行けるか？」

「当然。作戦を説明してくれ。」

「ははっ。やっぱレンはこうじゃなくちゃな！」

向かい合い、ニヤリと笑う。

二人の闘志は、最高潮。

今なら誰にだって負ける気がしない。何だってできる。シンの予想は、欠片も間違っていないかった。

「あ、ああ……。」

件名：遺書

本文：逃げるのなら、私は止めません。流石に私も死んでまで脅迫はできませんしね！。

なんだよ。なんでそんなにあんたは呑気なんだよ。てかあんたも  
う死んでんじゃねーかよ。

あなたは確かにヘタレです。拳銃だって避けられる程には  
強くなりましたが、それでも弱いままです。ヘタレのままです。

分かってるよ、そんな事。いちいち言われなくても、俺が一番。

まあ、言わなくてもあなたが一番分かってるでしょうが。

……。

ははは。

：死人に腹たったのはこれが初めてだよこの野郎。一瞬でもあん  
たに同情した俺が馬鹿だったよ。というか、そんなに俺をからかう  
のが楽しかったのかこいつ。

まあ、楽しいですが、いいんですか？それで。あなたは、強くならず。妹に守られ、下らないことで虐げられて。なにより、自分自身を蔑んで。

いやだよ。嫌は嫌だが、これはそう簡単に変えられるもんじゃねーだろ。

変えられるんですよ、今。もう、今しか無いでしょうね。今なら、簡単な事で変えられます。私が、そうなるようにこの一週間で育てましたから。

…。お前はわしが育てた、かよ。

下らない事は言いません。必要なのは、「覚悟」だけです。

……。

このまま、何も知らずに妹と共に死ぬか。それとも、「覚悟」を決めるか。

……………。

一週間。もし、この一週間が、楽しかったなら。少しでも私達に、共感していただけたなら。そして、もし、こんな私の願いがかなうならば。

——運命から、パルカちゃんを、助けてください。よろしくお願いします。

分かったよ。分かりましたよ！やればいいんだろっやれば！俺はお前が大っ嫌いだ！！ツンデレだか何だか知らんが、お前は大嫌いだ！！！！

でも、でもなあ！

楽しかったよ、認めるよ！！！！この一週間、ホントに楽しかったよ！！！！共感したよ、あんたらの、好きな人を守ろうとする姿に！！憧れたよ、あんたらの生き方に！！！！

なりたい、と思ったよ、そんなふうに！！！！

だから、だから！

件名：無題

本文：今日も帰れない。済まないな。ありがとう。

妹への返信を打つ。

件名：無題

本文：ありがとう、ルリさん。でも、ごめん。俺、覚悟、決めたから。だから。ルリさんに、助けてほしい。お願いだ。一緒に、戦ってください。

ルリ女史への返信も、続けて打つ。

そして、顔を上げる。

ぐしゃぐしゃになった顔をあげて、前を見つめる。

変えるべき、運命を、未来を見据えて。

♪  
♪  
♪

先に返信が来たのは、ルリ女史。メールの文面を見て、ふっと笑う。

件名：無題

本文：分かりました。私は、俊也さんと一緒ですから、俊也さんが覚悟したなら、私も覚悟します。助けあって、支え合いましょう。私の出来る事なら何でもします。遠慮なく言ってください。何をすればいいですか？

ははは…。

これで、もう逃げ道は無いな。啖呵切っちゃったからには、逃げるんねえしな。やるっきゃねえよな。ここに来てまだ逃げ腰の俺は、やっぱりヘタレだな。

♪♪♪

若干遅れての着信の電子音は、我が妹。流石にルリ女史はタイプピ  
ング速ええんだな。

件名：無題

本文：何かあったんですか？ありがとうって？

見た瞬間、やっぱり笑ってしまった。情けない泣き笑いだ。や  
っぱりお前は、俺には出来すぎた妹だよ。このメールの文面だけで  
察するなんてさ。そんなこと出来んのは世界でお前だけだろうな。  
検証した事はねーけど。

件名：無題

本文：なんでもないよ。頑張ってるからさ。

次は、電話だった。やっぱりなんか勘付いてんだな。だが、取れな  
かった。そのまま着拒する。いや、申し訳ないとは思ってる。

でもだつてさ、今とつたら俺凄いい声だよ？涙と過呼吸とヘタレの  
震えだよ？そんな声、聞かせたく無いじゃん？

——自分を信じてくれる、妹にはさ。

だよな？シン。

「分かったよ。覚悟、決めたよ。」

決まった覚悟を胸に、俺はルリ女史への指示をメールにして打ち込み始めた。

「出ない…。出て、出て……！」

繋がらない携帯電話を、森音は一人家で握りしめていた。兄の変調を敏感に察知した彼女は迷わず電話した。いつだって兄は電話に出てくれた。時には口が切れてまともに喋れないときにさえ、電話に出てくれた。

それは単なる偶然に過ぎないのかも知れなかった（当然俊也も殴られている真っ最中に電話には出れない）が、森音にとっては密かな自慢の一つだった。

その自慢が、失われる。

「どうして…？どうして…？」

声が震える。知らぬ間に、涙が流れ落ちる。どうしようもなく悪い予感が胸から離れない。兄が、頑張ってきて来る、などと言うのは、不吉な感覚しかもたらさない。

「にーさん…。」

最近、確かに兄が恰好良かった。そんな兄が、誇らしかった。いつか兄の存在を隠すのでなく、胸を張って紹介できるような日が

来るかもと思うと、本当に夢のようだった。

でも。

「にーさんがいてくれれば……。いて……。さえ……。くれれば……。！」

そんなのは望まない。

いてくれるなら、それでいい。それだけでいい。

単身赴任の父に母について行く、と聞いた時、森音が言ったのは一言だけだった。

「にーさんは？」

あの時から、もうすでにあの時から、兄がいることが、兄と共にいることが当たり前だった。学年差で通う学校が別々になった時も、兄がヘタレになった時も、なにも変わらなかった。それが無くなるのは、考えられない。信じられない。

「わたし……わたし……。」

涙が止まらない。

覚悟を決めた俊也に対して、森音が出来ることは、

「信じてます……。にーさんを、にーさんは私をおいてったりしないって……。ちゃんと帰ってくるって！」

祈る事だけだった。

そんな彼女を守るために。  
俊也は一人、深夜が近付く夜の街を駆け抜けた。

六日目（土）　　ゝ森音ゝ（後書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

七日目（日）　く　榎田く　（前書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

七日目（日）　　（榎田）

「マジかよ……。」

マジだよ。うわ、一人突っ込みキモ、とか考える、余裕はない。だつてさ、これ。

「血……。だよなあ……。。」

森羅電気工場区域入口。当然こんな時間（賢明なる読者のみなさんはもう日付が変わっている事にお気づきだろう）、入口には警備員がいる、はず。

そこには、誰もいなかった。  
人、と呼べそうなものは。

「う、うえっぶ……。。」

涙と吐き気を必死にこらえ、なるべく下を見ない様にする。それでも、飛び散った血が、原型がなんだったか分からない、分かりたくも無い塊。それでも、進む。足取りは重く、引き摺るようにしかない。

覚悟は、した。

でもさ、足りなかったよ。

ありつただけの覚悟をしたけど、それでも足りなかった。

ヘタレごときの覚悟では、キリッ！と進む事は出来ない。

それでも、進む。それが、覚悟だから。

工場、第一区画入口。やはりここにも、人はいなかった。つぶりたい目を、根性で抉じ開け、こぼれおちそうな涙を気力で堪える。根性、気力。いったい何日、いや、何カ月ぶりに使っただろう。もしかしたら年かもしれない。

入口の扉の前に立つ。本来なら当然ロックがされているはずだが、ルリ女史にお願いしておいたため、平時の時のように自動で開く。

ルリ女史に頼んだのは、二つ。

一つ目は、この工場地区のオートロックの解除。今時のオートロックは、無理に開ければセキュリティが働いて、警備会社に連絡がいつてしまう。こんな化け物相手に戦っても、犠牲者が増えるだけだ。

二つ目は、工場内の警備員の即時撤退。森羅の特殊警備兵だかソルジャーだか知らないが、勝ち目なんかあるわけがない。それに、逆に自分たちが戦闘になってしまう可能性もある。

開いたドアの中に見えるのは。

惨劇では無く。

元凶。

黒ずくめのニット帽の男と、白虎柄のバンダナの男。  
何の証拠も無い勘で、でも絶対の自信で断言できる。あれは、こいつらのせいだ。

だから俺は。

ヘタレだけど。

声も震えて、泣きそうで、吐きそうだけど。

「ば、ば、パルカを、俺達の名、仲間を、か、返せ……！」

そう宣言した。

相手がこちらを見る。それだけで、寿命が縮む感じがする。ヘタレの本能が言ってる。こいつはヤバイ。例え銃弾避けられても、殴られ慣れてても、こいつとけんかしたら死ぬ。勝ち目は完全に0パーセントだ。漫画風に言えば、アレノマエニテハイケナイ、って感じ。

「あんさんが最初やな！。もつときよーさん警備員とか来るおもーとったんに。」  
「とても我々と戦える人間とは思えないが。それでヒーロー気取りか？」

馬鹿にしたような笑い混じりの声と、冷たく尖った言葉が刺さる。  
ああ、俺やつぱここで死ぬかも……。

絶望。反省。

でも、反省はしているが、後悔はしていない。

だから。

死ぬ覚悟を決めて前を向き、

「ヒーロー気取りじゃない、ヒーローになるんだ。だろ？若大将！」

「ふむ。ヘタレにしては格好よかったぞ。」

後ろから不意に掛けられた言葉を聞いた。

「おお、まとめて三人。なかなかえーなー！」  
「実質戦闘員は二人、か。」

二人の殺人鬼『姓無』が油断ない視線を向ける。

（こいつら、つええ…な…。）

榎田は心中で呟き、横を見る。予想通り柊がしつかり頷くのが見える。『読心』は実は密談にもかなり有効に使える。だが、横を見たのは一瞬で、すぐに視線を相手に…『姓無』に戻す。

一瞬でも目を離しておくのを、危険だと判断したからだ。

白虎柄のバンダナ男。シンや榎田とは違う、肌がざらつくような嗤い顔は、危険な人物である事をこの上なく強調している。

黒ずくめの男。殆ど顔が隠れて表情も分からないが、それでも伝わる凍りつくような鋭い視線。

そして何より。

榎田の持つ『害意』によって見えるぼんやりした光が、二人が危険過ぎることを物語っていた。

（ダンナをやったのは、こいつらか……。）

その心の中の一言に、傍らの柊がビクツと震えたが、そこはあえて無視する。

「で？どーするんや？あんさんら。二対二でやるんか？ワイは一対二でも構わへんで？」

白虎バンダナが場違いに明るいい声で言う。だが、それは、戦闘を望む言葉。間違いなく、殺人鬼の言葉。榎田は必死に考える。今は、シンはいない。『最善』に頼ることはできない。

（レン…、この中に、お前が戦ったってやつは？）

柊が首を小さく横に振る。いない。ならば、この先最低でもあと一人は『姓無』を相手にする事になる。

ここまで考えて。

榎田は。

決断を下した。

（レン、若大将をつれて先に行け。ここは多分、俺の方がいい。俺が出来るだけ時間を稼ぐ。だから、その間にパルカの嬢ちゃん連れて脱出。運命に逆らうだろうから、若大将の力は、命は最優先。お前は先にいるだろうもう一人の『姓無』を倒してくれ。あとの単なるテロリストくらいは若大将に根性出してもらおうぜ。）

「馬鹿を言うな…。お前を、見捨てるというのか…？」

声が、聞こえた。

頷くだけだと思っていた榎田は、虚をつかれる。

「ま、あんさんらあのメガネのあんちゃんの弟子なんやろ？ジウの相手したのもあんたらのどっちかやろーし…。あのあんちゃん一人でも楽しめたんやけど、まだまだワイの敵やなかったんやし。」

柊の顔がさつと青ざめ、直後に紅が差す。冷静さを失っているのは明らかだった。この状態で戦って、シンをも倒す敵に勝てるはずがない。もっとも、シンが勝てない相手なら、自分らがどう足掻いても時間稼ぎにしかないのだが。

「二対一でええで？かかってきいや。」

（ちえっ…。しょうがねえ…。）

更なる挑発を受け、柊が唇をかみしめる。榎田は諦めた。一つだけの心残り。

「といっても、この上なく下らないことなので、どうでもいいと言えはどうでもいいのだが。」

「レン、おm」

「チビガキ、お前、ここであいつらの足止めをしてくれないか？」

榎田の台詞を遮ったのは、

俊也。

いつものヘタレが嘘のようにはつきりした声で、榎田に言う。それは、相手にもしっかりと聞こえたのだろう、白虎バンダナが眉をひそめる。

「おいヘタ」

「柊の様子から、その『姓無』ってのはこれで全部じゃないんだろ？ だったら柊は、そいつに再戦させた方が勝率が上がるだろ。どの道ここで時間食ってる暇はないんだ。」

詰め寄った柊の台詞を遮り、淡々と告げる。そして、柊の手首を掴む。

「行くぞ、柊。」

「お、おいっ！」

「ククツ、はっはっは！ いいぜ若大将！」

榎田は、それを笑って見つめる。恐らく柊はこちらに集中していて、俊也の思考に気付かなかったのだろう、焦る柊は見ていて笑えた。図らずも彼の作戦は実った。

そして。

彼の心残りも無くなった。

「別に足止めするのは構わんが……」

数歩前に出て、二人が彼の背中を見る位置に立つ。

（ふふ、若大将……。シュチュエーションだったら、言っしかないよな？）

「べつにアレを倒してしまっても構わんのだろう？」

隠しきれない笑みに片頬を歪めて、榎田は立ち塞がる『姓無』を、最強の殺人鬼を睨みつけた。

「オオオツ！」

チビガキが弾丸のように、いやそれより更に上の速度で飛びかかる。バンダナ野郎とチビガキが交錯し、ガキッ！という嫌な音が響く。それを見たと同時に柊の手をつかんだまま全力で走り出す。

目指すは、第二区画への通路。

チビガキでも、二人を妨害は出来ないだろう。もう一人、黒ずくめの男（某組織の人じゃない）の攻撃が絶対来る。それをよけにやどうにもならん！

全力で走る。後ろへの警戒も怠らない。

怠らない。

怠ら……あれ？

来……ない？なんで？もう第二区画入っちゃったよ？

でも、後ろは振り返らない。こえーもん……とか考えてて、やっと気付いた。俺柊の手首引つ張りっぱなしだ。やべえ殺されるかも。いくら咄嗟だったとはいえ、怒ってるよね絶対。いつも引き摺ってる人間から引きずられたらそりゃ屈辱だよ、というかこれ心読まれてるよね、ごめんなさいごめんなさいごめんなさい

「怒ってはいない。呆れているだけだ。ちょっとはヘタレで無くなったかと思えば……。」

「え、マジで？だって、」

「榎田の心は、歓喜していた。倒しても構わない、と言った時、  
の奴の高揚感、きつと何か策があるのだろう。」

「……」

「貴様の言う事も、一理あるしな。ほら、急ぐのだろう？」

そういつて俺の手首を掴む。俺も手首を掴んだままだから、お互いに手首をしっかりと握りあった様な状態になる。瞬間、俺が引き摺るようにして走っていた重みが消える、ってえおいおいおいおいいいいい！！！！

ものすごいスピードで走りだす柊。

イコール、ものすごいスピードで引き摺られた俺。

ああ、やっぱり怒ってたんじゃないかな……。――。

下手に暴れるよりも為す術も無く引き摺られてた方が速い気がする  
るので、とりあえず無抵抗に引き摺られていく。

「そんな事はない。もうちゃんとある程度走れるはずだ。怠けな  
いでやれ。」

「イエス、マイマスター。」

「で、なんでゼツやんあの二人通したん？」

「……奴に、通すべきだと言われた。」

「なるほ、どっ！」

跳びかかった榎田が吹き飛ばされて床に転がる、様に見えて、間一髪で後ろに自分から飛び、致命的なダメージを避ける。それでも消しきれなかった衝撃が体に走る。

「へへへ…。こりゃ、ダンナでもきつかったろうな…。」

ホントは、震えていた。

足がすくんでしまつて、今にも膝が笑いだしそうだった。

柊の『読心』での高揚感は、単にネタが使えた為の喜びだった。勝てるわけがない事も、分かつていた。

だが。

（間違いなく、時間稼ぎは俺が一番向いている。）

「あんさん、なかなかやるやんけ。見えとるんやな？」

「スタンド使いだしな。」

「？なんやそれ。でも、あんさんも変わった『異能』をもつとるみたいやなあ。」

そう言つて、両手を横に広げる、バンダナの殺人鬼。

榎田の目には、その両手が徐々に輝きを増していくのが見える。

『害意』の力では、それが人体硬化である事までは分からないが、それが致命傷を与える力を有する事だけは、ハッキリと分かる。

（こいつが相手で、もう一人が手出しする気が無いなら、やれる…。いや、やる、だな。）

榎田の『害意』では、二人の光は違つて見えた。バンダナの方は、攻撃や防御の際の一瞬、正確に言えばインパクトの直前に向けて、

一点に集まっていくな。これははっきり言って、かなり榎田との相性がいいと言える。逆に言えば、この力無しに戦うのはかなり苦戦を強いられるだろう。シンが負けたのは、そのせいだろう、と心の中で当たりをつける。

自分なら、今の自分ならば、シンと互角以上にこいつと渡り合えるはずだ。例え渡り合えなくなつて諦めるつもりはないが、勝算があるに越したことは無い。

…だが。

（問題は、もう一人……。あいつは、なんなんだ…？）

直立不動のまま静かにこちらを見続ける、黒ずくめの男。ニット帽と高い襟元のせいで表情がほとんど見えず、考えが読めない。

『害意』で映って見えるのは。

体中が、隙間なく光っている。

目が眩むほどの強い、不気味な輝きを放つて。

まるで、存在自体が、『害意』であるかの様に。

あれと戦つては、いけない。逃げることさえ、出来ない。

瞬殺されて、終わりだ。

ならば。

抜き出した、榎田の愛用の武器は、やや大ぶりのバタフライナイフ。小柄な体格を生かして懐に潜り込み、その鋭く研ぎ澄まされた刃で、必殺を狙う武器。

（こいつとの戦いを長引かせて、パル力を連れて帰ってきた皆と離脱、がベスト…。）

覚悟を胸に秘め、刃をきらめかせて、

「うおおッ！」

再び跳びかかる。

最強の殺人鬼を相手に、恐怖を振り払って。

力強く。

## 七日目（日）　　く榎田く（後書き）

さて、ここまでお読みいただいてありがとうございます。

ヘタレスト、残すところあと一日、話数にしてあと4、5話でしょうか。

ここから少し、あとがきで世界観やキャラクターを紹介していこうと思います。

ネタばれはないですが、面倒な方は読み飛ばしてください。

く「ヘタレストの一週間」についてく

小説を書く、と決めた時、この作品はプロットがありませんでした。あったのは、異世界召喚が一つ、超能力学園ものが一つ、ゲーム突入が一つでした。ですが、いざ書こうとなった時、これは盛り上がりまでが長すぎないか？という問題にぶつかりました。

そこで、一本読み切りを書こうと思ったのですが、あれよあれよと設定が生まれて、この「ヘタレスト」が生まれました。なので若干SF考証などは甘いかもしれませんがね。

この作品は後から見直して、反省点　（記号の使い方、人称、行間とか）を見る用にしよう、と思っています　（笑）

く楸シンく

内面的なモチーフは、まずは某有名小説の殺人鬼の一賊の長男ですね。主人公を非日常に誘い込む手口、シスコン、にやけなどはここに由来しています。あとは、かっこいい面として、R.O.V.Eの大魔導師ジーク。未来を見通した最後などは、彼から借りました。

外面的なモチーフは、この「ヘタレスト」では意図的にできる限り排していますが、どうでしょう？彼については、メガネ、だけでしたね。それぞれ皆さんの中でのかっこいいメガネが思い浮かべば、と思います。僕の中ではやはり長男ですね。

ふと思いましたが、今思えば設定が死亡フラグだなこいつ。

では、また近いうちに…。

## 七目(日) 〃 終〃 (前書き)

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。



まるで象にでも踏みつぶされて様に、所々が平になって息絶えた、人間の死体。

あるものは恐怖に顔を引き攣らせ、またあるものはその必死に腕を突っ張り。

「……うっつ！」

「先に、行け。ヘタレ。こんな奴とつと片付けて、すぐに後を追う。」

「……く……。」

「こいつの足元。制服姿で無い人間も混ざっている。恐らく無差別に、味方のはずのテロリストまで惨殺しているのだろっ。先の人数も減っているはずだ。お前一人でもパル力を救い出せるだろっ。」

必死に吐き気を堪えている（できればみつともなく頬を膨らませるのは勘弁してほしい、と柊は思っただが）俊也に、小声で指示を出す。俊也は青ざめた顔で前を向き、相手を睨みつけながら言う。

「……勝算は？」

「愚問だ。私を誰だと思っている。師父の、シンの後を継ぐ者だぞ。」

「……分かった。俺だけじゃ、不安だから……。早めに頼む。」

「訂正してやろっ。お前は、きっと大丈夫だ。」

「なぜそう思っ？」

「勘だ。」

身も蓋も無い返事に、少しだけ俊也が苦笑いを洩らす。『読心』から感じるのは、ホンノすこし持ち直した心と、再び灯った、強い覚悟の光。この男は、強くなったのだな。心の中で呟く。師父は、師父の思いはちゃんと自分たちに宿っている。その事が感じられたのが、柊はひどく誇らしかった。

「頼む！」

そういつて走り出す俊也。目指すは、第四区画。武器開発・製造区画。瑠璃曰く、「至る所に火薬の仕込まれた、迷路のように入り組んだコンベヤー地帯」だそうだ。その先にある、『新兵器』の保管部屋。すでに完成し、出荷を待つ悪魔の兵器。

「ひひ……させるかよオ！オオ！」

跳びかかろうとした『姓無』が、横薙ぎに放たれた後ろ回し蹴りに吹き飛ばされる。

放ったのは、勿論、柊。

一瞬で、自分から敵の注意がそれたほんの一瞬で相手の進路に立ち塞がり、その勢いを利用した強烈な一撃。

だが、いつかと同じく、やはり思ったほどに吹き飛ばない。それどころか、自分の足が若干痺れるほどの衝撃。

（やはり、「重い」。これがこいつの『異能』だな。）

『姓無』が空中で猫のように体を反転させて着地し、柊を睨みつける。その目に宿る狂気と殺意をますます強め、恐ろしいほど開かれた瞳孔が柊を射抜く。

その心に宿るのは、全てを塗りつぶす殺意。

だが。

その目を見つめる柊に、恐れの色は無い。

以前の恐れ、みつともなく狼狽した面影は、彼女にはもう無い。

自分をはるかに上回る敵を相手に、果敢に立ち向かった榎田。  
心に恐怖を抱えながらも、それでも覚悟を決めた俊也。

そして。

自分を、こんな弱い自分を、自慢の教え子と言ってくれた、シン。

皆の顔が、脳裏に浮かぶ。

迷いは、無い。

自分に向けて、凄まじい殺気を放ち、一気に襲いかかる『姓無』  
の腕を体をひねってギリギリでかわし、カウンターの回し蹴りを深  
々と叩き込んだ。

「次はどっちだ？」

「……」

「早く言わねえかッ！」

「ううッ！」

「ったく。どっちだ!？」

「……みぎ……」

「最初から素直に言う事きいてりゃ、痛い目見ねえんだよ、った  
く……」

ベルトコンベヤーと重機械の迷路の分かれ道で、数人の男のうち  
一人が呟く。男たちは皆そろいの迷彩柄のジャケットにゴーグル、

数人の左手には拳銃よりはるかに重量級のマシンガン。ステレオタイプな、まるでお手本のようなテロリストファッション。

そしてリーダー格の大男の腕に引き摺られているのは、まるで人形のような外見をした少女……パルカ。普段のきれいすぎるその顔が、今は青痣と苦痛に歪められている。

（どちらといっても、かわらないのに……。）

パルカは、適当に答えているだけだ。男たちはパルカの力を『未来を予測する能力』と考えていたが、実際は『予感』、分岐点を捕えるというだけの力だ。だから正確な意味では未来を予測する事は出来ないのだが、この場合はすこし場合が違ってくる。

つまり、この先に、『分岐』が見えているという事は、それは不可避なのだ。それは、例えどのように行っただころで、最終的にはそこに辿り着く、辿り着いてしまうという事。だったらどう道順を説明しても変わらず、最深部まで辿りつける事になるのだから、さつきから言っている道筋は完全に勘なのである。それがまるで予言のように行き止まりになることも無く進めるのだから、男たちが勘違いするのも無理はないのだが。

（もう、いい……。どうなっても……。）

パルカの心は、もう、壊れた、といってしまうといい状態だった。運命が刻一刻と迫ってくる今。死を選ぶ、もう心は決めているとはいえ、自分を殺すその未来。

そして何より、昨日の深夜。

——楸シンは、死んだ。雇い主の願いにより、君を連れて行かせてもらう。

黒ずくめの男が言った言葉。

兄が、もうこの世にはいないという事を示す、無慈悲な言葉。

（もう、おにいちゃんに、あえない。）

その事は、彼女の心を深く傷付けた。攫われる事に対して、全く抵抗できないような思考の停止を引き起こすほどに。いまでも、半分眠ったように、周りの全てがまるでテレビの映像のように、現実感がなく、白黒の無味乾燥なものに感じるようになるほどに。

（おにいちゃんに、「ありがとう」、いってない…。）

もう何度めだろう、ループし続ける思考を走らせる。

（なんでもおしえて、なんでもくれたのに。なにもかえせなかった。おれい、かえせなかった…。）

自分が、死ぬのだと思っていた。痛いのを、耐えればいいだけだと思っていた。

甘かった。

そんなものじゃなかった。

近しい人がいなくなる、その恐怖を、全く覚悟していなかった。

絶望で、今にも壊れそうな心の中で、うわごとのように繰り返す。

「…いつ！おいッ！つぎはどっちだって聞いてんだよッ！―！」  
「あうっ……。」

呼ばれていたのに気付かなかつたらしい。腹部を、膝で蹴りあげられ、くぐもった悲鳴を上げる。

「おら、起きたかよ！？どつちだ！？」

「……ひだり……」

殴られても、蹴られても、まるで人ごとのように現実感がない。心の無い、無機質な痛みは、彼女を現実に取り戻すことはできない。

彼女の心は、蝕まれ続ける。

絶望と、後悔で。

「つつぎはあ！？」

「右です、えつと、そのあとの三差路は直進です！」

携帯電話に対して怒鳴るように……ってか、完全に怒鳴り声で指示を仰ぐ。怒鳴ってる事に対して、特に理由はない。特に理由も無く怒鳴りつけられるルリ女史はたまったもんじゃない。怒鳴り返すこともなく俺に指示を与えてくれる。

「つでえ、直進の次は！？」

「左に曲がって、あとは道なりに行くと、『新兵器』の保管庫です！あ、直進のこの横の銃火器は火薬入ってるから気をつけてください！」

「うおばええあ！」

加速のために横のコンベアにつかまろうとした手を慌てて離す。  
あぶねえなオイ、先に言えよそれ！…というか、ちょっと待てよ？

「このまま着くまでにテロリストと会えない事ってあんのか！？」  
「は、はい？一応第四区画最奥部、『広域兵器保管庫』への道はこれだけです？」

おいおいおいおいどうなってんだよ、もう敵さんどっかいつちま  
ってんじゃねえのか！？

「えっと、あー、あー、うー！」  
「だ、だいじょーぶですか？」  
「だ、だいじょばない……。」

んな事言ってる場合じゃねえ。  
考えろ、考えろ。

ヘタレにとって思考を止めることは死を意味するんだろ、俺。

『姓無』とかいう奴らがまだ入口を守ってた、という事は、まだ  
奴らは脱出してはいない。

つまり、最悪の事態にはまだ至っていない。  
けれど、入口からここまで真っ直ぐ来た俺と出会っていない。  
なら、別の脱出ルート、とかか？

「ルリさん、その保管庫から外に出る道の最短ルートは！？」  
「えーと、それでしたら、搬出口がありますね、それは保  
管庫の奥のドアからです。」

「あるのかよ！その道は！？」  
「えーと、こっちはロック解除が遠隔操作ではできないです、

利用も一部の限られた職員のキーでしか出来ないうし、こないだセキュリティコードを変えさせたんですが…」

「…日本語でok?」

「えゝ…!!…!!…すいません、コードがそのままですゝ。職員がさぼったようですねゝ。使用履歴がありますゝ。今日、ですねゝ。

キーは通り魔事件の時の人のものですゝ…やられましたね…。」

「とりあえずそいつらはそっち行ったんだな!？」

「はいゝ、まちがいn」

「ok、さんきゅ!」

そのまま電話を切り、全速力で走りだす。  
できる。

俺は出来る。

——ヒーローに、なるんだ。だろ？

——お前はきっと、大丈夫だ。

二人の声が、耳にこだまする。

その声を力に変えて、先へと急ぐ。

皆に託された、一人の少女を救うために。

下らない運命を、俺の『異能』で捻じ曲げるために。

## 七日目（日）　　柊（後書き）

すこし間が空いて申し訳ありません。では、キャラクター解説、行きますね。

　　榎田　涼

内面的なモチーフ、実はありません。というか、プロット段階では実は彼は存在すらしていませんでした（笑）いざ書き始めてから、オタが俊也一人ではネタが入れにくい、掛け合いがほしい、という理由で登場となり、ポジションによって自動的に「かっこいいオタ」になりました。

外面的なモチーフは、「ものすごい髪の色」「シヨタ」のみですね。色とかはどんなのを皆さん想像したんでしょう？僕の中では、某一賊の人間失格ですね。

　　柊　蓮

もっとも構成を考え抜いたキャラです。その割にイマイチなような…。僕は小説を書く上で、まずは始まり（所謂ボーイミーツガール）を考えるのですが、この小説では、「き、貴様なぜ生きている！？」にしてみました。どうですかね。

内面的なモチーフは、僕の最も好きな作品の一つ、「リトル。スターズ！」の姉御。の、精神面弱体化版、ですね。あと、書き始めて読んだ、「アクセ。ワールド」の。雪姫にもちよつと影響あったかもしれません。めざせクーデレ、でしたが、全然うまくできなかったような。

外面的なモチーフは、髪型だけですが、「ネ。ま」の忍者のおねーちゃん。この髪型は、うまく使えばアクションの激しさが表現できるのでは、と考えて採用しました。のですが。そう考えていた時期が、俺にもありました。あと、柊は唯一、明確なバトルスタイル

（蹴り主体）があるのですが、この描写は、僕の最も（ry「カレと。ノジヨと召喚魔法」の、。雪姫をみて勉強しました。この小説はもつと評価されてもいいと思います。

あと、余談ですが、彼女の名前が素敵だ、とお褒め頂きました。ありがとうございます。でも、申し訳ないのですが、完全に適当です。一応みんな「木」関係ですが、それも「なんか統一感ほしーな」程度の意識です。深読みした方、申し訳ありません（笑）

七日目（日）　　ゝ運命ゝ（前書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

## 七日目（日）　　〈運命〉

「おおおっ！」

「ヒュウ、やるのー！あんさんの体格活かした、ええ戦法やー！」

ここまでの攻防で、榎田は既に相手の能力、『硬化』を見抜いていた。何度も急所を狙って突きたてたバタフライナイフの刃が、「刺さらない」。そして、まるで刃物同士で鏝迫り合ったかのような、甲高い金属音。

（要するに、「強欲」だろ？で、全身硬化は出来ない、っと！）

「ヤッ！」

「おお、またやられてもーた！あんさんはどうやらワイの『硬化』場所がみえるらしいなあ！」

急所を突く、と見せかけて、硬化した以外の場所を攻撃する。致命打には出来ないが、確実に相手の体力を奪える。特にさっきの一撃のように、足に入られれば、同時に機動力も削ぐ事が出来る。

この調子でいけば、時間を稼ぐくらい、いくらでもできる。  
でき……る？

そこまで考えて、ふと違和感に囚われた。

（時間稼ぎが、いくらでもできる？ダンナを倒すほどの敵を相手にして？いくら俺と相性がいいといっても、これはあまりに楽すぎじゃねえか？）

（こいつの力は、この『異能』だけなのか？）

（こいつは……。）

——本気になって、いないのではないか？

その瞬間、背筋に冷たいものが走った。

慌てて視線を向ける。

その先にいるのは、黒ずくめの男。まがましい殺気を放ち、仁王立ちする男。ニット帽と襟元で見えない表情が、心なしか苛立っているように感じる。

男は、微動だにしないまま口を開く。

「ゼツ。先に、行くぞ。」

「おお、ゼツさん？それも、奴が言っとったんか？」

「ああ。」

「いいんか？ワイ今、めっちゃたのしーで？」

そこまで言つて、軽薄そうな頬が大きく歪む。

殺人鬼が、妖しく嗤う。

榎田の目に映る『害意』の揺らぎが、輝きを増していく。

「ちいっ……！」

「はっはっは……、ワイ、楽しすぎて……あんさん、殺してしまいそうやわあ……。」

「……構わん。奴は、それでも大丈夫だと言っていた。」

「なら、ええなあ……。」

爆発的に膨れ上がった存在感。圧倒的な暴力。

そして。

いままでの殺意が赤子同然に見えるほどの、背後が妖しく歪むほどの、殺気。

「くそっ…いかせるかうおっっ!!!」

ゆっくりと第二区画に向けて歩き出した黒ずくめを止めようと駆け出そうとした榎田。

その体が。

大きく横薙ぎに吹き飛んだ。

周囲の電子機器を巻き込んで激しく転がる。

『硬化』など全く関係ない、ただ力任せの一撃。

「う、うぐおっ、お……。」

膝立ちになり、立ち上がろうとし、

一旦崩れ落ち、吐血する。

たった一撃。

力任せの一撃が、この威力。

（一瞬の殺気に、横向きに跳んでなかったら、死んでた……。）

一気に近づいた死の気配に、榎田の頬を汗が伝う。

ふらつき、吐血しながらも立ち上がった榎田を、心の底から楽しそうに見つめる、バンダナの男。その後ろに見える、歩き去る黒ずくめの男。

「あんさん…ちようどえーから、ちよおつとワイらの事おしえたるわ。ワイらは、『姓無』はな、殺人鬼なんや。『異能』に目覚めてもーたりして、ごっつい運動神経を得る…まあ、これだけやった

らよかつたんやけど、な。」

虚空を見つめながら、バンダナの男は語る。

「そのときに得てもーた力のせいで、「ある衝動」を抑えられなくなる。ごっつい力を得たもんにはよーあることや。それはな、『殺害衝動』。ワイらは、ある瞬間から、その衝動に心を奪われていく。」

ふと足元に転がった、電子機器を拾い上げ、ぐしゃぐしゃに握りつぶす。

「ワイらはな…。人間で有りたかつたんや。せやから、皆で集まって、考えた。そんで始めたんが、傭兵や。これやったら、殺しても咎められへん。衝動が堪え切れなくなったら、戦場で戦う。それで衝動を解消したたら、また普通に生きていける…。」

粉々に…鉄製の機械が本当に粉々になり、足元に落ちる。

「でもな、ワイは駄目なんや。普通の生活をしたと思う…ホシマにそうおもっとるチュやサッチとはちごーて、な。ワイは、楽しい。ジユウとおんなじで。もうきつと、戻れへんねん。だから、な。」

思い出したように、榎田を見つめる。

「殺すでえ。あんさん。あんさんは、ワイを、たのしませてくれえや…。」

話し終わると同時に、倒錯した笑みを浮かべて榎田に跳びかかる。

『硬化』した腕が、鉄の機械をまるで紙でも破るように貫く。

紙一重でかわした榎田のわき腹が、飛び散った鉄片で裂ける。

（これが、こいつの本気…。完全に、殺すつもり of 攻撃…。）

理屈も何もない恐怖。もう一発くらえば死ぬ、という焦燥。

第二区画に消えて行った男の事は、考えない。

（そつちは任せたぜ、柊……。なんとか、上手く逃げてくれ…。）

再び襲いかかる殺人鬼の打ち下ろしが、さっきまで榎田がいた場所の床を大きく凹みます。

本気のデスゲームが始まる。反撃の余裕も無い、勝ち目のない戦い。

それでも榎田は時間稼ぎに徹する。

どこまで稼げるか分からなくても、そんな事は関係ない。

それが、仲間のためになるのならば。

ただ一つ言えるのは。

彼に残された時間は、少ない。

「ぐおお……！」

悲鳴が上がる。

圧倒的だった。

次々と決まる連続した蹴りが鮮やかに決まり、異能、『重化』によつて重くなつた体さえも吹き飛ばす。態勢を立て直す前の一瞬に横に回り込み、回し蹴りを放つ。的確にこめかみを抉り、意識の刈り取りを狙う。

「諦めてもう寝ろ。」

「クソオ……調子に乗るなよおんなア……」

（殺す、必ず殺す、ぐちゃぐちゃにして殺す、ギタギタにして殺す、潰して殺す、殴って殺す、苦しませて殺す、右の薙ぎ払いで殺す、恐怖させて殺す、泣かせて殺す、ぶっ殺す。）

『姓無』の右腕、つまり柊の左側面を狙った横薙ぎの一撃を「読み」きつてかわす。そのまま重量に振り回される形となつてから空きになったわき腹を前蹴りで吹き飛ばし、その反動で空中で身を翻し、つまりはバク宙して距離を取る。

頭は、痛い。

こめかみのあたりが締め付けられるように軋んでいる。

『読心』は確かに精神的な疲労を伴うが、明らかにそれだけでは無い苦痛。

（だが、そんなものは関係ない。もう、終わる。）

『姓無』の、このジユウという男は、決して弱くはない。「ちょっと『衝動』を堪え切れない（実際はちよつとどころではない）んやけど、文句なしに『姓無』戦闘要員の一角や。」というのはコウの談。

柊が、強すぎるのだ。

完全に思考を読み、長いリーチを生かした蹴りで圧倒していた。

「コロシテヤル殺してやるころしてやる殺してヤルコロシてヤルころしテヤる…」

もう、勝敗は決した。

あとは、ただ一つ。一つだけ確認する事がある。

「師父を…楸シンを殺したのは、お前では無いな？」

「コロシテヤル殺してやるころしてやる殺してヤルコロシてヤルころしテヤる…」

反応はなかった。だが、柊の異能、『読心』は、鋭敏に『姓無』の心を読んだ。

（連れて行かれなかった…おれは、そいつの殺しには連れて行かれなかった…）

ああ…。

よかった…。

師父は、少なくともこいつに殺されたわけじゃない。

こんな、殺意だけの下らない奴に殺されたわけじゃない。

それだけで、満足だった。

「コロシテヤル殺してやるころしてやる殺してヤルコロシてヤルころしテヤるウウうつー！！」

飛び掛かる『姓無』。だが、完全に動きを読まれ、その攻撃は紙

一重で当たらない。

そして。

空振りの隙に、必殺の後ろ回し蹴りが側頭部に炸裂し、『姓無』の意識は落ちた。

「で、次はお前が相手か？」

そして、そのまま声をかける。

音も無く歩いてきた、黒ずくめの『姓無』に向かって。

「おい、キリキリはこべよな！」

「何言っただよ、あの化け物どもが入口守ってたんだろ？大丈夫に決まってツじゃねえか。」

「そうそう。特殊兵団もちょっと数が少なかったけど、あいつらが全部片付けたし。」

「なんかあればあいつらと一緒にいる奴らから連絡が来るさ。」

下らない会話の行われているのは、「兵器出荷控室」。「広域兵器保管庫」をはじめ、完成した武器の保管庫から、一部の人間のもつキーで入れる、最後の部屋。

手ごろな武器の梱包を始める者と、人間の大人より一回り大きな『新兵器』を運ぶための台車を見つくる者。無駄口を叩いてはいないものの、流石に死線をくぐってきた者たちだけあって、動きには

よどみがない。

もうすぐ外に出るためか、顔の下半分を覆う、マスクをしている。夢で何度も見た、あのマスクを。

リーダーは作業には加担せず、その様子を眺めている。

左手にがっちりと抱え込んでいるのは、パルカ。さっきまではまるで意識がないように静かだったが、今になって何かに脅えるように見えるが、男にはなんなのかは分からないだろう。

そして、右手に持つのは、ボタンのスイッチ。組織が長い時間をかけて作り上げた、ハッキングの成果。『新兵器』の制限装置を動作させるスイッチ。

「うぐう…」

「暴れるんじゃない！」

パルカは、知らぬ間に声をあげていた。それは、誰よりパルカ自身を一番驚かせていたのだが。

もう、死ぬのは、覚悟してたのに。

もう、抗わないって決めたのに。

シンが、向こうで待っているかもしれないのに。

「うう、うううう……」

知らずに涙が零れる。この一週間、一度も流す事の無かった涙。

「そろそろ行くぞ。次はこの台車引いて、一気に車まで行くぞ。」

武器を出しておけ。」

台車を引く係の男たちが、武器は別の者に預けて、運搬に専念する。そして、兵器を盗み出して男たちが、自前の武器を構える。

ある者は、二丁拳銃を。

ある者は、マシンガンを。

そして、ある者、パルカの目の前に来た男が、ナイフを抜き出す。

「んじゃ、とつとと行くぞ…何泣いてんだ、行くぞオラァ！次はどつちだぁ！？」

頬に鈍い衝撃。現実にはなつたが、まるで現実で無いかのように感覚の無い衝撃。そして、自分の言うとおり男たちが歩き出す。この部屋においてあつた梱包用のロープで縛られた両手。為す総べなく引き摺られる自分。

全てが、運命のまま。

そして、運命のままに、

ガシャン！——ドアが蹴り空けられる音。

ドアが開けられ、

「なんだぁ！？」

マスクの男たちが、一瞬油断し、

「ぱるかあああ……！……お前は、生きていたくないのかあああああ  
あ……！……！……！」

運命が、ぶち破られた。

## 七日目（日）　　ゝ運命ゝ（後書き）

遅くなった分、2話投稿してみました。残るところあと1話、エピローグまで入れて2話。思ったより長かったです…。

さて、キャラクター紹介です。

ゝ木林　森音ゝ

妹キャラ。自分の中の典型的妹（理想的、ではない）を文にした感じです。ストーリー的には、「帰るべき日常」の象徴で、一応ヘタレなりに彼女を守ることを誓って戦う…予定だったんですがねえ。メールのシーンはもったかつこよくできればよかったんですが作者の力不足で（泣）

内面的イメージは、月○の遠野家の妹ですね。ツンデレ妹代表、といった感じでしょうか。なんでも出来つつも、兄にはツンデレ。みたいな。僕はどちらかといえばったりが好みですが、友人との論争、「ツンデレは世界を救うか否か」で論破されて彼女の性格はこうなりました。

外見的イメージは、実はぶっちゃけ全くありません！一応本編では「ふわふわヘア」となっていますが、作者はふわふわヘアがどんなものかさえ知りません（笑）なんなんだ、ふわふわヘア！。ということ、僕の中で彼女は映像化されてはいませんね。

ゝ森羅　瑠璃ゝ

ルリ女史は、ほんとにモブキャラの予定でした。ですが、柊、森音がしっかりタイプなので、天然タイプは必要かな、と思い、めでたくメインキャラ昇格となりました。ストーリーを考えるにあたり、著者はまずエロゲちつくに考えて、攻略ルートを考えます。本編の潜入方法は、ルリ女史ルートのもので、これ以外ではシンが生き延びて彼のハッキングによって扉は開く…みたいな妄想をしてました。

迷ったのですが、これはやっぱり女の子優先に（笑）

内面的イメージは、ネ。まの、ちづ姉ですね。ふわふわっぽく、でも中身はしっかり考えてる…みたいな。能力のイメージは、劣化版うにつ。

外見的イメージも、ちづ姉です。とりあえず、細目は外せませんね。

七日目（日）　　く俊也く（前書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

七日目（日）　　く俊也く

カララ…ン。

完全な沈黙のなかに響くのは、薄い金属性ドアが床に転がる音。その他のものたちは、完全に思考が停止していた。

「はあ、はああ……」

叫びきったことで息が切れたのか、それともここまでの全力疾走が堪えたのか、沈黙を破って喘ぐように呼気を洩らす俊也。そのまま崩れるように片膝をつく。

それでも、

「どうなんだ…」

それでも、繰り返す。

「生き、て。いたくないのか…」

声が、返ってくるまで。

「シンは、俺、達は…、生き、て、ほし、いぞ……」

「生きて…」

喘ぐように、いや喘ぎそのものの声で繰り返す。  
冷静さを取り戻したのか、マスクの男たちが各々の武器を構え、

嘲笑の表情を浮かべる。抑えようとしないう卑た笑い声が、至る所であがる。膝について俯く俊也を、嘲笑う。

だが。

俊也は、そんなことは、どうでもよかった。

聞こえたから。

彼の耳に、ちゃんと届いたから。

嘲笑い、罵り、見下しの中でも、ちゃんと届いたから。

「……い。…っいき。」

少女の、声が。

「わた、わた、しっは…」

事務所の、最後の一人が。

「わたしは、いきたい。おにいちゃんの、ぶんまで。いきっていくたいい…。」

最後の一人が、覚悟を決めた、その小さい、でも力強い、その声  
が。

ナイフの向こうに見える少女の美しい瞳から止め処なく涙が溢れ出すのと、俯いた俊也が顔を上げ、ニヤリと笑ったのは、ほぼ同時だった。

そして次の瞬間、不用意に近寄ってきたマスクの男を、俊也は握りしめたこぶしで殴り飛ばした。

「ぐぼあああっ！！！」

きれいに顔面にストレートを決められた男が吹っ飛んでいく。うん、あの飛び方なら一発KOだな。長い間殴られてきた、俺の経験が、教えてくれているっ！

決めたのは、俺。

人を殴るのはそう言えば初めてののような気がするが、いちいち構っちゃいけない。

「てめえ！」

「動くな、撃つぞ！」

だつてさ、前前。

何人か……ってか、半分ぐらい銃持ってんだよ、ヤバイだろ。

でもこの時の俺は、なんか覚醒していた。もしかしたら俺はニュータイプだったのかもしれない（よく考えたらマジでニュータイプのようなんかもしれん）。

「ここで撃つのか？周りは火薬の山だぜ？」

その一言に、銃を持った奴らの手が一瞬止まる。もしかしたら警

告なしの発砲をしなかったのは、テロリストのこいつらもそれが分かっていたんだろ。銃を投げ捨て、一気にナイフやらロッドやら……なんだありや？よく分かんない武器を構える。

が、まあ、そのくらいなら、俺にだって経験がある。いや、この場合は、免疫、って言うべきか？

ナイフ片手に突っ込んできた男をヒラリとかわして横から殴り飛ばして落とす。うん、ここ殴られると痛いんだよ。経験則。続いて突っ込んできたやつはゴーグルみたいなのしてたから真正面から拳を入れてそれを叩き割る。

「うごあつ！」

「目が、目があアア！」

うん、流石にこの辺の奴らなら動きがよく見える。見える、見えるぞ！って感じ。あのイケメンメガネの特訓は無駄じゃなかったらしいな。このままいきや俺一人でも……ってかスルーしてたがさつき大佐いたぞオイ。

「としや、ぼたん！」

へ、ぼたん？だからヘタレに指示出す時には具体的につて先生いっても言ってるだろ！……とか馬鹿な突っ込み入れてる場合じゃねえよな、なんだよボタンって！？

「動くな！このボタンは、工場の核爆弾全部の时限装置につながる！押せば五分で町が吹き飛ぶ」

「知るかあああ……！」

「がはあつ！」

「あべしい！」

なんか言ってたのをガン無視して突っ込んできたやつらを殴りつける。だってもう動いてんじゃない、ここで止まったら死ぬだけじゃんかよ。撃つと動く、じゃあるまいし。

「だ、だか」

「なんだってええ！？パルカ、聞こえねえ！！！」

「俺の話を聞けええ！！！」

「うぐうつ！」

「ひでぶつ！」

とりあえず突っ込んでくる奴らをなんとかしながらパルカの言ってたボタンを探す。パルカもなんか言ってるっぽいけど、突っ込んでくる奴の「とあー」だか「でりやー」だか分かんない声や、パルカ抱えてるやつらのわめき声がうるさくて聞こえない。

「く、くそつ！」

「としゃ、このひとがもってるの！」

「聞こえねえ、とにかく助けっから！！！」

「くええつ！」

「くぽおっ！」

とりあえず皆のしちまえばいいだろう、と考えて、左右二人の挟み撃ちを仰け反ってかわし、頭と頭をこっちんこ。うん、これだけ見えると漫画みたいな事出来るもんだね。そしてさっきからテロリストの諸君、断末魔がなんか聞き覚えがあるんだが、どういうことだい？

——戦い、終盤。

とりあえず、大半はやつつけられたっぽい。

俺の左手には、数え切れない切り傷。あれだけナイフを防いだんだ、当然と言えば当然だろう。むしろ繋がっててくれてありがたいの域だ。利き手、右手は攻撃に使う（柊みたいに美しい蹴り技が出来るのはそれ専門の練習した人だけだろJK）、と割り切ったために防御専門（犠牲、ともいう）となった左手、ごめんね。

そして右手は、というと、無事、なわきやあなかった。なんつか、痛い。もう少し分かりやすく言えば、拳にひびが入ったみたいな感じ。あ、もしかしたらこれ大正解かも。たしか、慣れて無いくせに人をむやみに殴ると拳が痛む…みたいな事誰か言ってた気がする。

結論。満身創痍。息も絶え絶え。

でも、もーいい、と思う。

残す敵は、あと一人。

左手でパル力を捕まえた、おそらくリーダーだろう男。

こいつを殴り倒して、それで終わりだ。

「く、くそ、くるな、くるな、おすぞおおー!!」

「それで来なくなる馬鹿はいねーよ。」

つかつかと歩み寄る。

だが、この時俺は気付かなかった。これに気付かなかったのは、痛恨、といっていいだろう。俺的に。オタクを名乗るものとして。

——普通こういうときはナイフなり銃なりを、人質に向けるも  
んだろう、という事に。

本来それをするべき武器を持つ右手に握られているのが、なんか  
四角い、コントローラみたいなものだった事に。

「う、うあああつあがつ……！」

完全に錯乱し、武器を構えることさえ出来ない男に、最後の拳を  
叩き込む。

もんどりうって吹き飛ぶ男をしり目に、パル力を支えてやる。囚  
われのお姫様の開放の場面。

だが。

お姫様の口か零れたのは。

「ぼ、ぼたん、おされ、おされちゃ、ちゃったよう……！」

涙の交じった嗚咽の声だった。

柊蓮は、走っていた。

俊也のいると想像される、「広域兵器保管庫」にむけて。

敵の主力である『姓無』の一角をほぼ無傷で落としたにもかかわ  
らず、彼女の表情は険しい。勿論、まだ戦場であり、他の人間は戦

い続けているのだから、気を抜くべきでは無いのは当然なのだが、それだけでは無い焦燥感の混じった顔。

黒ずくめの『姓無』の言葉が、頭をよぎる。

——先に向かうべきだろう。コウは本気になったが、殺すには至らないだろう。

得体の知れない男だった。

柊にとって、得体の知れない、とは、『読心』にあたって大きな障害となる。「相手に対して感じる距離感」によって読み取る情報量が増える『読心』では、読める量が極端に減るのだ。この時読めたのは、黒ずくめの男が嘘をついているわけではない、という程度のものであった。

（信じるなら、榎田だ。奴は、きっとやる。）

何度目かの行き止まりに苛立ちながら、折り返してまた走り出す。

——貴様なら間に合うだろうと、奴は言っていた。俺も、急ぐがな。

イライラはとつくに頂点に達していたが、思考は止めない。そうしなければ、いざというときに動けないからだ。それは、自分の、そして仲間の命に直結する。

奴、とは？

間に合う、とは？

俺も急ぐ、とは？

答えの出ない思考と、思い通りにならない迷路に限りなく苛立ちつつも、駆け出す足のスピードが落ちることは、無い。

「おk…、なんと、なく、は、分かった…。」

「とりあえず、急いで逃げるべきです」。私が広域兵器保管庫にある管理データベースになんとか入り込んで、コードを止められないか、頑張ります。」

会話の相手は、ルリ女史。ケータイで「なんか核爆弾が爆発するらしい」って感じの説明だけで、何が起ってるか把握してくれるのは正直有難い。こっちはなんとかなるんじゃないかって気がするくらいだ。

なんともならないのは、こっちの方。正確に言えば、俺の現状。

一言で言ってしまうえば、情けない、に尽きる。

左腕はほとんど動かず、だらりと垂れ下がっている。足もかなりのガタがきており、支えて貰っている。自分より30センチ近く身長の高い女の子に。しかもパルカの方も、結構青痣作ったりしてるんだが、こっちはしっかりした足取りと手つきで俺を支えている。そして、右手がにぎったまま開けない（開こうとするとちよいたい。フタエノキワミアッ。）俺に代わって、携帯を耳に当ててくれているのだ。

やっぱりあのスピードとパワーで動きまわんのって、一般人には無理なんじゃね？筋肉痛ってレベルじゃねーぞ。

結論。

急いで逃げることはできない。

少なくとも、俺は無理。

「パルカあ…運命って、ホントはどうなってたんだ…？」

「…はつきりは、わかんない。でも、こんなにとしやはけがしてなくて、はしってにげた。とおもう。」

「…いや、置いてつてもいいよ？途中で柵とかが拾ってくれるだろうし。」

「やだ。」

即答。うーんどうしたもんか。

考えてるうちに、またケータイから声が聞こえる。相変わらず間延びした声だが、いつもよりちよつと緊張してる感はある声。

「……結論から言います。解除は、難しそうです。ですが、出来なければ町ごと吹き飛ぶので、どの道今からでは逃げられません。俊也さんは、広域兵器保管庫を通って少し行けば、その先の防衛用シエルターがありますから、そこに避難してください。」

「……了解、んじゃ、きるよ。」

「ええ、さようなら。」

ルリ女史の「さようなら」が若干引っかかりはしたものの、とりあえず方向性は決まった。

んだが。

「なあ、パルカあ……。聞こえてたろ、お前一人だ」  
「やだ。」

俺の足がそこまで行けそうにないのは、どう見ても明らかだった。それならば、置いていってくれた方がいいんだが。二人死ぬよりは一人死ぬ方がいいだろうし。

「そうだ、柊たちにこの事を知らせにs」

「やだ。」

「俺はお前の事をシンに頼まれt」

「やだ。」

「ある日森のくまさんg」

「やだ。」

「……………」

「……………」

若干頬を赤らめるパルカ。うん、こんなときでも笑いを忘れないのって異常なのかな？ ポジティブシンキング過ぎる？ 生まれ変わるなら関西人かな。あ、でも関西人が全員おもしろいわけじゃねえしな。

「んじゃ、とりあえず、いけるとこまでいきますか。」

こくり、と頷くパルカ。なんか喋ってくれなくなったが、まあこの期に及んで好感度上げてもいた仕方あるまい。とりあえず運ぶのをやめる気はないようなので、俺は必死に、あがらない足を引き摺り続けた。

体力の限界っ！

……とか冗談考えてる場合じゃねえかもなあ…。

とうとう、限界が来た。俺に、じゃない、パルカにだ。

考えてみれば当然なのだが、休ませるにも休んでくれないのだ。

高校生の男一人を支えて歩くだけでも重労働（弁解しておくが俺がさぼっていたわけではない）なのに、ましてや今のパルカは傷だらけ。本来の年齢を考えれば、倒れていても不思議はないだろうし。

案の定、広域兵器保管庫に辿りついたところで、とうとう倒れこんでしまったのだ。

顔を真っ赤にして息を切らすパルカ。

うーん見た目あぶねえ。あ、俺はロリコンじゃないよ。念のため。

「でも、どうすっかなあ…。」

倒れたパルカを右手の腕を使って器用に引き寄せ、そのまま壁にもたれてズルズルと座りこむ。壁にちよつと血が付いたのを見るに、どうやら背中も何箇所か切られてたらしい。ああ、また森音に迷惑かけるなあ…。いや、ここでぶっ飛んだらそうでもないか？

いや、ここでぶっ飛んだら。

——森音も。

それは、

それは、駄目だ。

そんな運命は、駄目だ。

だったら、そいつを、ぶち壊さなきゃならない。

——俺には、その力がある。そうだろ？シン。

ええ、そうですよ、やつちまってください、という声が聞こえた気がした。幻聴まで聞こえるとは俺もかなりきてるな。でも、サンキュな。やる気、でたぜ。

さて、と…

「ヘタレっ！」

ちょうどいいタイミングで飛び込む影…おお、柊じゃん。

やっぱり事実は小説より奇なり、だな。このタイミングで援軍到着とはな。

「おい、これが」

「柊、お前今からパルカ連れて、防衛用シェルターに行け。ここまですで見かけたら？」

倒れていたパルカが非難の目を向け、柊が目だけで問いかける。  
「いいのか？」と。

「頼むぜ。異論は、受け付けない。」

「やだ、やだやだやだ」

「わかった。信じるぞ。」

「おk。任せろよ。それが俺の『異能』だろ？」

ごねるパルカの腕を掴んで助け起こして強引に背負いながら、確認する柊。一応笑顔で返したつもりだったが、こわばってたかもしれない。だって傷痛いし。そのまま、少し顔を下げる。最後の休憩だ。

ゆっくり深呼吸した後、気合を入れて立ち上がる。

体がビキビキいつてるのがはっきりわかるが、そこは無理強いする。どうせこれが最後なんだからこれくらいは踏ん張ってもらわな困る。

腕がズキズキ痛むが、それも根性で無視を決め込む。当然。左腕は感覚ないから痛みは無いんだが、つかえ棒にすらならないので握りしめたまま開けない右手（激痛有）について体を起こす。

気力を振り絞って顔を上げると、誰もいなかった。

柊は、ちゃんとパルカを連れて行ったらしい。

心を読んでなかったわけではないだろうに、いいヤツだ。

「ははっ。」

笑いが零れる。これが、最後の一瞬である事を知っているから。でもまあ、最後に皆を守って死ねるなんて、誇らしいじゃん。

ってか、守れる証拠はどこにもない。

そう、証拠はない。

なのに。

俺はすべき事が。分かった。

いや。分かっていた。不思議な感覚だが、これも俺の『異能』なのかもしれない。

「はっはっは……。」

ふらふらと、歩き出す。倒れたらもう起き上がれないと思う。

目指すのは、部屋の中の、並んだ機械群の一角。チカチカと目触りに輝く光。

すがりつくようにそれに身を預ける。

——『新兵器』コントロールパネル。

これを、壊す。

当然壊したから时限装置が止まるとは限らないし、寧ろ速攻爆発する可能性が高いだろう。もしかしたら部屋ごと吹き飛んで、俺ごとおだぶつかもしれないし、そうでなくてもこのまま倒れれば失血死だろう、さすがに。

だが、俺の『異能』が、叫んでいた。

運命を壊したくばこいつを砕け、と。命を賭けてでも、と。

ふと、思う。

ああ、あの時榎田もこんな気持ちだったんだ、と。

「このシチュエーションなら、言うよな…。ははっ。」

口に微笑を浮かべ、最後の言葉を紡ぐ。観客がいないのが少々残念だがな。

「いいぜ…。」

開かない、握りしめた右手を、より一層強く握る。

「運命<sup>てめえ</sup>がなんでも思い通りに出来るってなら…！」

そして、大きく振りかぶる。これで、終わる。よな。

「まずはそのふざけた運命<sup>げんそつ</sup>を、ぶち殺す…！！！」

握りしめた拳を振り下ろし、運命を象徴するようなその光を打ち碎いた。

七日目（日）　　く俊也く（後書き）

さて、あとはエピソードを残すのみですね。そして、キャラクタ―図鑑はこれがラストになります。今まで読んでいただいて、どうもありがとうございました。よろしければ、後一話だけ、お付き合ってください…。

く楸　パルカく

ごめんなさい。この作品中最も後悔の残るキャラです。不思議系美少女という、需要バリ高（俺基準）のキャラだったにも関わらず、全然上手く書けませんでした。ごめんよ、パルちゃん。

内面的モチーフは、作者の中にある「不思議系」です。天然とは似て非なるものですね。僕の最も好きな作品の一つ「るろ。に剣心」のともえさん。まあ、やはり王道としてアヤナミさんは多分に含まれますが（笑）。

外面的モチーフとしては、とりあえずかわいらしい日本人形、つてくらいです。作者のイメージでは、「地獄。女」のあの子（名前忘れた。）ですね。

く木林　俊也く

主人公。何よりも、非常に書きやすい、書いていて楽しいキャラでした。こんなにも馬鹿キャラが書いていて楽しいとは…！「これは次回作にも生かしたい！」と思う反面、「次回はまともな人間を主人公に…」とも思います。まあ、そのへんはそのうちに（投）。内面的モチーフは、これはもう不動といっていいでしょう、僕的最（ry「CLAN。AD」の春。くん。キングオブヘタレの名を冠するにふさわしい彼に、ちよつとした『異能』を付加した…という感じです。

外見的モチーフは、彼に関しては一切排除してあります。皆さん

の思い思いのキャラにしてあげてください。求ムキャラ絵（笑）

く『性無』の面々く

実は彼らは、次回作の中ボス的なポジションのキャラ達で、今作品では登場予定はありませんでした。物語が中盤に差し掛かった際、「超能力バリバリの主人公サイドを相手に敵が「テロリスト」ではあまりに弱すぎないか？」とふと疑問に囚われ、急遽彼らの出番になりました。僕の作品の妄想もとい、構想において、「敵キャラの魅力」というのはとても重要視しています。なぜ戦うのか？なぜ悪に落ちたのか？とか。その理由がかっこいいキャラはやはり魅力的です。その点考えると、今回の悪役は0点ですね（泣）次回もつとがかっこいい敵を書くぞ！

彼らにも当然モチーフがありますが、次回以降クロスオーバー予定なので、ここでは伏せたいと思います。ご了承ください。

では、多分明日にでも最後のエピソードが上がるかな？頑張ります！

## エピソード 〓大団円〓（前書き）

初作品です。

稚拙なところも多いですが、ご意見やご感想をお待ちしています。

## エピソード ～大団円～

「…どうしてこうなった。」

「ん？何がです？」

まあ、何が、と言われれば、今の状況が、と答えるのだが。

答えがそれだけではない事は明白だ。

いったいどこでどう転んだら今ののような状況が生じるのか、という事だ。

とりあえず、迷っていても仕方ないし、この状況をなんとかする事も出来ないのだから、やるべきことは一つ、というか、出来ることは一つしかない。

—— 目の前の『楸探偵事務所』のドアを開け。

—— 今日のバイトにいそしむ。

それだけだ。

あの、嵐のような一週間から、半月。いや、体感的には嵐の最中に地震が起きて落雷が直撃しつつ吹き飛ばされたくらいのインパクトはあったんだが、とりあえず半月。

俺はなんと普通に学校に学校に通っている。いや、当然と言えば当然なんだが。

自分で言うのもなんだが、相当の怪我だったと思う。右拳骨折、左腕裂傷多数、病院搬送時出血性ショック、だったそう。それがどれくらいヤバイのか医者でも無い俺にはよくは分からなかったが、とりあえず、

「搬送があと三分遅かったら助からなかったね。」

だそうだから、けっこうやばかったんだろう。

そんな状態だったにもかかわらず、何と俺の体は骨折を含めて一週間もすれば完治してしまった。なんか『異能』に目覚めちゃうと人より回復が若干早くなるらしい。若干ってレベルなのか分からないが。

「ちわーっす。」

「おう、わーかだいしょー。今日もよろしくなー。」

事務所のドアを開けた俺に、陽気に声をかけてくるのは、榎田。そういえばこいつもそう。

俺と一緒に病院に運ばれたこのチビガキは、俺よりも数段階天国に近かったらしい。もうちょい直接的に言えば、

「生きてるのが不思議だったよ。」

だそうだ。

医者からそういう評価を受けたにもかかわらず、榎田は何と俺と同じ一週間で退院した。こっちは文句なしに言えるだろう。若干つてレベルじゃねーぞ。

「さて、と。出社早々わりんだが、仕事の説明だ。俺がもう出なきゃならんし。で、そこで…」

「榎田。直接的に言え。ヘタレから離れろ、森羅。」

若干言い淀む榎田の言葉を引き継いだのは、柊。鋭い目つきで、俺を…もつと正確に言えば、俺の腕に絡みついた、ルリ女史を睨みつける。どうしてこうなったのだろう。

俺とチビガキ、あと一歩病院にたどり着くのが遅かったらオダブツ、という状態でなんとか首の皮一枚つながったのは、間違いなく柊のおかげだった。

柊はパルカをシエルターまで無理矢理連れて行った後、時間になっても爆発が起きない事を確認するとすぐにあの部屋に駆けつけ、全てを終えて倒れた俺を引き摺って工場内を走り抜け、全身ズタボロで死んでいるしか思えない状況だった榎田を担いで、出口に呼んだ救急車まで最短時間で送り届けたのだ。

こいつがいなければ俺は（ついでにチビガキも）死んでいたのだから感謝するのは当然なのだが、退院して以来、正確に言えば学校に行った日からどこか、いや明らかに視線が冷たい。

思い当たる理由と云えば…

「えゝ？いいじゃないですかゝ、私も今日は俊也さんと一緒にいいですゝ。」

「ちよつ、うで、まずつ、むねっ！！！！？」

…そう、ルリ女史と一緒にいるところを見られてからのような気がする。

その女性らしい体のラインを存分に生かして、からみとった俺の腕に体を…所謂胸を押しつける。柊のスレンダーな体には無いであろう感触に、口から意味不明な言葉が出る。あばばば。

「ヘタレ。その思考は、自殺志願と受け取っていいのだな？」

「もゝ、駄目ですよゝ、ぼゝりよくはんたい！」

一方は鋭い瞳で、一方はアルカイックスマイルで睨みあつ。つか、やべえよ、なんかバチバチ言ってるよ。こ、これが、視線の空中戦か！

ルリ女史は、出頭した。

もうちよつと詳しく言えば、森羅電気の武器——核兵器という大々的に保持、作製、輸入が禁止されている物騒な物を生産している、ということ、内部告発したのだ。

その事は既にメディアに大騒ぎされ、国内でも大手の電機メーカー、森羅電気そのものが解散するという大事件に発展し、ルリ女史の父親にあたる代表数人が逮捕される事態となって収束した。告発者のルリ女史は警察からはおとがめなし、表面上はいつも通りだったが、その心境がどういうものだったのかは分からない。

…いや、訂正だ。いつも通りでは無い。

「え〜？俊也さ〜ん、何考えてたんですか〜？」

あれ以来、やたらとくつついてくるようになった。ホントに。なんか俺好感度上げるようなことしたっけ？そしてそれと反比例するように柊の機嫌が悪くなる。この場合は不可抗力だろ、せつかく心読んでんだし。

「森羅の脂肪の塊が迷惑だ、と考えているんだ。」

「え〜。でも、私は、俊也さんと一緒、って言いましたも〜ん。ね？俊也さん？」

思考を捏造する柊と、なんか良く分からん事を言い出すルリ女史。

と、後ろのドアがガチャン！といい音を立てて開く。

それと同時に、すごい力でルリ女史から、文字通り引っぺがされる。

ルリ女史「が」引っぺがされるのでは無く、ルリ女史「から」引っぺがされる。

そのままバランスを崩したところでタイを掴まれ、ガクガクと揺さぶるのは、

「にーさんっ！待っててくださいと言ったでしょう！」

「でででもるるルリさんがが」

「にーさんの保護者は私です！森羅先輩なんかに負けないでください！――」

言わずもがな、我が妹。

あの事件が終わった後、病院で目を覚ました俺を最初に迎えたのは、森音だった。正確には、その寝顔だが。

あの後昏睡状態だった俺が目を覚めたのは、火曜日の夕方だった。

日曜日、俺のメールから何かを感じとった森音は日付が変わるまで外を探しまわり（女子高生としては不用心な限りだが）、寝ないで握りしめていた携帯電話に病院からの着信を聞き深夜にも関わらず駆けつけ、そのままつきつきりでベッドサイドにいたらしい。

…月曜日も火曜日も学校あったはずだけど良かったのかな？

そして目が覚めた後、まず抱きつかれ（しがみつかれ、の方がニュアンス的には正しい）、泣きじゃくられ、殴られて、説教され、最後に（限りなく拷問に近い）尋問された。

洗いざらい喋らされた後（当然その過程で数発殴られた）、森音は「自分もその事務所で共に働き、監視します。」といったのだ。

その結果、森音は俺と同じように放課後ここに来るのだが、

「まったくーさんは！帰り路から腕組んで何やってるんですか常識を弁えてください！！」

「う、うえ、死ぬ、た、た、タイはいつてるお、首、くびく」

「いいですか！私が待つてといったら待つんです！！」

俺は忠犬ハチ公かよ。待て、お手、じゃあるめえ。

そしてその思考を読んで笑うな柊。そしてチビガキ、てめえはなんで笑ってんだコラ。

「くくっ、んじゃあ、ルリ嬢、また今日もPCセキュリティデザインの依頼が三件。頼むぜ。」

「え、またですか？もういくつ作ってると思ってるんですか。俊也さんと一緒にいい。」

「これが資金源なんだよ。勘弁な。で、妹姫とレンの二人は、こないだの依頼があったやつな。」

ぶーたれる（見た目的には形のいい眉が心配そうに顰められて、笑顔が曇っただけだが）ルリ女史をチビガキがなだめ、同時に柊と森音にも指示を出す。

「浮気調査だろう。私の『読心』で終わりだろう。夜の俊也と一緒にに行けるだろう。」

「柊さん、そう言ってこないだ依頼の人に苛ついて小一時間説教してたからですよ、もう！」

二人はリアルではともかく仕事ではなかなかいいコンビらしい。突っ走りがちな柊のブレーキが森音、というわけだ。

「頼むぜ。んで、若大将、は、ふふっ、頼むぜ。んじゃな。」

指示を口にしかけたチビガキが俺の横を見て笑い、そのまま脇を通り抜けて外に行く。どうやら彼の仕事はもう時間が無いらしいと。

俺の学生服の袖口がふと掴まれる。

顔を向けると、そこには。

「きょうのおしごと、わたしがせつめいするの。がんばるよ、としやのおにーちゃん。」

上目づかいでこちらを見上げる、少女。俺と一緒に運命の鎖の束縛を解き、強く生きることを選んだ少女……なんていうとかっこつけすぎだろうか？ 少しでも表情豊かになった顔をこちらに向け、今日の仕事への熱意を示す。

横から「おにーちゃん禁止です！」という森音の非難が聞こえる。それが聞こえたのか、外でチビガキの笑い声が響く。

「かつこいいぞヘタレ。」と言わんばかりの半笑いを浮かべる柊がみえる。

能天気はこちらに手を振るルリ女史がいる。

そうして、俺は。

今日も、下らない運命と戦う、気合を込めて『覚悟』を決めた。

「さて、これにて一件落着ですね。」

そんな平和な事務所を、離れた場所から監視する二人の影。

一人は、黒ずくめの服装をした表情の見えないニット帽の男。

「貴様は、これで本当にいいのか？」

黒ずくめ男が、もう一人に問いかける。

そして、もう一人は。

車椅子に腰掛けて足に毛布をかけて。顔には、張り付けたような笑顔と、眼鏡。

「ええ…。彼らはもう、一人前です。私という保護者なしでも大丈夫ですから。」

心なしかいつもより嬉しそうな、そしてほんの少しの寂しさを含んだような笑顔。

『貴様は、あの時、なぜ勝ちを諦めた？』

金曜の夜、シンの命を奪うはずだったコウの打ち下ろしは、この男によって遮られた。圧倒的な力で振り下ろされたそれを受け止める、同様の力。

『貴様の『異能』は、なんだ？』

受け止めたまま問われた言葉。それに答えた後の、最後の問いかけ。

——『貴様の『最善』で、『姓無』はどう映る？』

その後、試しに説明した作戦は単純。テロリストの護衛をするフリをして、隙を見て「『新兵器』の顧客データの書類を盗み出す」。顧客データがネットから奪えなかったシンは、恐らく文書にて保管されていると推測していて、それは正解だった。

終と別れた後、ゼツはそのデータを探し出してシンに渡した。それをネタにシンが相手からゆすり取った口止め料は、『姓無』の雇

い料金などとは比べ物にならない大金だったのだ。

「もう一度問う。本当にいいのか？」

「ええ。あの子たちより、姓無というやんちゃな子供たちの方に、保護者は必要でしょう。」

そう言つて、またいつもと変わらない笑みを浮かべるシン。本来ならあの地下で死んでいたのだ、今更断る理由は無い、とシンは思う。あの後、『姓無』の医者の女性、チユの治療を受けていなければ、到底左脚断裂などでは済んではいなかったのだ。

そして。

妹に生きると言い続けた自分だ。無駄に死ぬなどは出来るわけがない。

決意を、殺人鬼と共に生きる覚悟を決めたシンの横顔を、黒ずくめの男は無言で見つめる。

しばらくの沈黙ののち、黒ずくめの男は、ゼツは口を開いた。

「……そうか。ならば。歓迎しよう。シン、ようこそ、『姓無』へ。」

「ええ。これから、よろしく願いますね、ゼツ。」

二人は、身を翻して、去って行った。

ちょうどその瞬間に、事務所の人間がふと窓の外を見上げたのは、単なる偶然だったのかもしれないし、特別な何かによるものだったのかもしれない。

## エピローグ　く大団円く（後書き）

これにて、一件落着です。

…ラストの、男二人は書くかどうか迷いました。物語的にはどう考えても蛇足ですし（笑）　ただ、次回作の予定としてちよろつと使うことになったので、こんな形になりました。すみません（泣）

ヘタレストの一週間、いかがだったでしょうか？小説など書くのは初めてのことで、難しいことの連続でしたが、最後まで楽しんで書けました。俺って幸せ者だなあ、と思っっています。

この物語のテーマは『覚悟』、ネタとしては「き、貴様なぜ生きている！？」「ご、ごめんなさい！」をしたかった、という感じがすね。

この物語を書いて、あるいはほかの方の小説を読んで、ネット小説の素晴らしさを知りました。自分のこんな小説を、お気に入り登録してくれた人、感想をくれた人、評価してくださった人、そして8606というレビュー、1953というユニークになってくださったすべての人たちに感謝を…。

そしてもしよろしければ、厚かましいですが感想や評価の一つでも、よろしく願います。まってます！！

あ、最後に。

この物語は、実際の人物、団体、国名、および作者のヘタレ具合には、一切関係ありません。ほ、ほんとですよ？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0096n/>

---

ヘタレストの一週間

2011年10月7日18時54分発行